娘々祭の賑ひ

娘々廟を祀れる大石橋の迷鎭山は一に迷眞山とも書かれ俗に嶽高山、又京甲山ともいふ。寺名は海雲寺と稱し、雲霄、雲霄、瓊霄の三女神を祀つてあつて、福壽、治眼、授兒の女神として廣く尊信されて居る。

右の如く福壽を祈、眼病を治し、小兒を授かるといふので、階級を問ず信者が多いが、殊に農民には崇仰者が夥しくあり、祭典の時期が恰も高粱の種子蒔を終つて若葉が風に戯ぐ候で、手製の荷馬車に座敷した村娘對嬢を載せて出掛ける者が多く驚くべき賑ひを呈する。

元來、支那人の家庭は嚴格であるが、此の娘々祭の時には青年男女の思ふ儘にお祭行きを許すことになつて居る、恰も我國の農村に於ける盆踊りの際と同じである。

寫眞は娘々祭當日の賑ひ盛る光景である。

大石橋の娘々祭

大石橋のニャン〳〵祭と言へば滿洲名物の一つとして日本人には一番名高く膾炙されて居る。娘々祭の行はるゝ娘々廟は滿鐵本線の大石橋驛の南方一里十八町にある迷鎭山上に祀られて在る、祭典は毎年舊曆五月十六日から十九日までで、殊にその中日の午前十時頃から午後二時頃迄が最も賑ふ。此の祭典會式の當日には臨時列車が增發される程である。祭典期間中の參廟者は無慮十萬に及ぶと言はれて居る。

祭典當日は種々なる見世物や練り物などあり。參詣人の多くはアンペラ圍ゐの自家用滿鮮馬車に家族を乘せ牛馬に曳かせて出掛け山麓に陣取るなど頗る異觀を呈するのである。

因に、娘々廟なるものは滿洲到る所に存在するが、殊に大石橋迷鎭山の娘々廟は信者多く名高く知られて居る。

市の日の海城

海城の南門外、西門外、北門外には、毎月日を定めて市が立つ例になつて居る。此日は附近の農民は馬を曳いて、此の市に集り、馬市を中心として日用品雑貨の賣買が盛んに行はれる。

寫眞は即ち其の市の日の賑ひぶりである。芋を洗ふやうな混雑、群集雑沓の光景は小都會ながらも、今日こそとの商賣が積極的の活躍を如實に認められて目覺ましくも頼ゆしく感じられるのである。

滿鐵線の海城驛

日露戦役の古戦場として名高い海城は滿鐵本線の一驛で小さい町ではあるが、軍隊の駐屯地として重きを置かれて居る。其附屬地は海城大街を主道とし其處が海城の目貫通りである。左りは商業地區右は屋敷町で、鼓に揭げた寫眞は其の目貫通りである。

此の目貫通りは城内南門より北門に通ずる一街にて城内最も殷賑を極めて居る。又城壁外にも人家多く立ち列びて地方農民を相手にする鍛冶屋が多い。

海城の層石山

海城の城内には層石山といふ小丘が取り入れられてあるが、此點は他城とは聊か趣きを異にして居る。その丘麓には滿鐵沿線中第一と言はるゝ孔子廟がある、又丘上には娘々廟が祀られてある。殊にこの遊眺望に富んで居るので、海城公園と稱して居る。又城内を南と西とに流るゝ海城河は天然の濠を爲して居る、その上流には日露戰役の際構架した軍橋を望見することが出來る。

因に海城河は別名を沙河、又は楊柳河とも稱せられる。

歴史的懐古味のある海城

往時は朝鮮街道の要衝であつたので、海城の市街には今でも歴史的な懐古味を感ずるのである。昔の所謂朝鮮街道は、北門外の不秩序に建てられた農家の間に、ほとんど泥か溝川ほどに僅かに殘されて居る城壕を起點として析木城岫巖を經て九連城に出で、そして朝鮮へ流れ込むのであるこのおぼろげな遺蹟を見ても海城が往昔朝鮮官道の咽喉たる要衝であつたことが知られる。

海城には日清、日露の兩戰役に於ける遺蹟が少からずある。

析木城の金塔

析木城は海城の東南二十五町の朝鮮街道に當つて居る。城は元時代に既に廢城となつたが其の土壘は清朝時代まで殘つて居た。析木城と言へば今は只だ山間の一部落に佛を留むるのみで荒れ果てゝ居る。けれども流石に有名な三佛塔、即ち鐵塔、銀塔、金塔の三塔は今尙ほ屹然として傲り顏に立つて居る。

寫眞に示した金塔は前記三塔中のもので、析木城の西方一里に在る。寺名は元、寶林寺と稱した古刹で本尊は釋迦如來である。塔は堂後の山腹にある、塼塔で六角十三層、一邊の長さ一丈三尺五寸、基壇の下層には小佛像、上層には獅子、塔身の各面中央に佛の座像を納てある。其彫像手法は唐式で、塔の規模又雄大。明時代に勅命を以て重修し其時寶林寺の名を金塔寺と改めた。遼東七名塔中の一に數へられて居る優秀な美塔である。

析木城の鐵塔

鐵塔は析木城の村に接して北方の畑中に在る。塼塔で六角七層。其基礎は一邊八尺の切石を用ゐ、塔身各面の中央には立像が置かれてあるが製作は拙い、清朝初期の重修と見られる。

山間に土壘さへも止めぬ迄に無慘にも衰滅に委去られた中に此の鐵塔のみは嚴然として屹立して村の目標となつて居る。

因に、三塔中の銀塔は城の東方二里に存在し、寶塔寺裏の山腹に立つて居る、是も塼塔で六角九層基石の一面十尺一寸、各面基段の龕に乳彫の佛像がある唐の貞觀中の創建と傳へられて居る。

荒廢せる柝木城

滿鐵本線海城の東南五里餘の朝鮮街道にある柝木城は、日露戰役の戰場として著名である。その盛なりし當時の城廓は、元朝時代に既に廢業に屬したが、而かも其土堡は清朝まで殘存してゐた。今は唯僅かに荒廢した山間の一部落が其佛を留めて居る。其村落の附近には有名な三佛塔、即ち鐵塔、銀塔、金塔の三つがある。

銀塔寺は唐の貞觀中の創建で明朝時代迄は寶塔寺と稱した。金塔寺は元、寶林寺と稱した、寺内の金塔は遼東七ケ中の美塔である。鐵塔寺の鐵塔は比較的製作は劣る。此塔は清朝の初期に重修されたやうに見られる。

柝木城外の姑嫂石

柝木城は古い歴史を有する土地であるだけに、其の附近には前世紀の遺物の存して居るのを見る。城の東南八支里沙河を渡つた其の前岸の丘陵先端に二個のドルメンが在る其の一つは破壞されて居るが、一つは完全に形體を止めて居る。土人は之を姑嫂石と呼んでゐる。之れが爲めに姑嫂石の稱は此地の名稱となつて居る。傳說によると太古姑と嫂との二姉が、此の丘上に登つたまゝ遂に化石したのであるとの事だ。

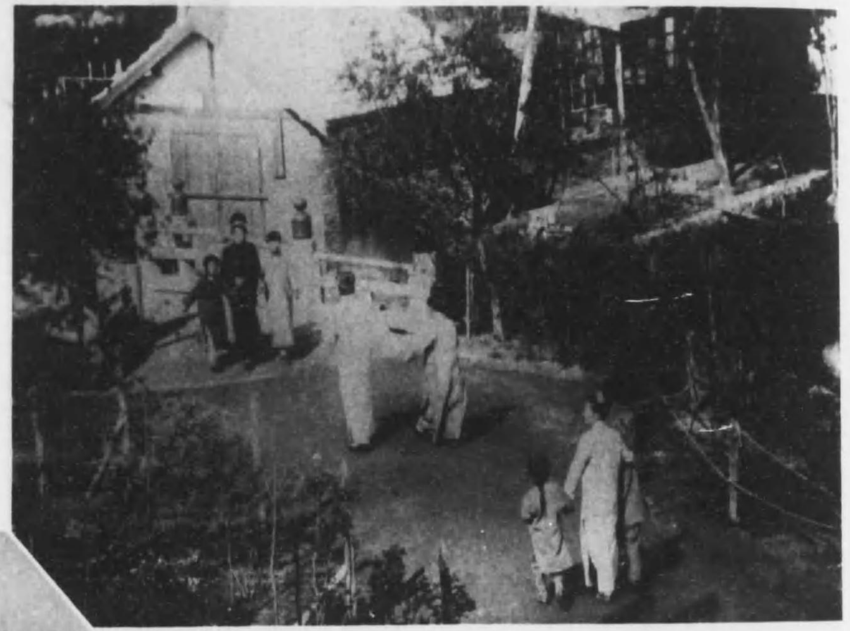
寫眞はそのドルメンであつて、北部系統の机型に屬するもので、厚さは一尺一寸大の石棚が組め立てられてある。思ふに古い世紀に於ける民族の遺跡であらう。

祭禮に競ふ婦人の髪飾

婦人の風習は世界いづれの國の婦人でも、何等かの特種な點を有するのである。そしてそれが又少なからず興味を感ずる場合もある。支那婦人、殊に滿洲婦人が、旗人の風習を傳へて居るといはれるのは一種異樣な髪飾である。

其の婦人の髪飾は、年中行事とも云ふべき其の土地の祭禮の當日には、祭禮を飾り彩る一つの裝束として婦人の誰もが各自に我れ劣らじと競爭する。

寫眞は湯崗子に於ける婦人が盛裝と共に異樣に發展せる髪飾で、如何にも祭禮との對照調和に興味を覺へしめる。



温泉地湯崗子

滿鐵沿線中の温泉地として著しく知られて居る湯崗子は熊岳縣、五龍背と共に、滿洲の三温泉として日、支、露の人々は殆ど知らぬものは無い。同じ滿鐵沿線の温泉地である熊岳城の民衆的であるに引換へて湯崗子の温泉は、何れかと言ふと上流階級向きで、所謂ブルジョア的である。それだけに又總ての設備も整つて居る。

湯崗子は温泉地であると共に、又山水風景の美にも恵しくはない、東方には千山の美容を眺め、温泉場一帶の展望は頗る佳景である。

寫眞は温泉の對翠閣から窓外を眺めた光景で池畔に逍歩を運ぶ三々五々の佳人の姿など、流石にブルジョア的である。

因に、温泉は湯元五ヶ所から湧出し其量晝夜二百石、温度は攝氏七十三度半、泉質は無色透明のアルカリ性である浴客は五、八の兩月最も多く、一ヶ年浴客宿泊二万四百七十人、日餘客一萬一千七百五十七人に達するといふ。

千山の無量觀

千山は滿鐵本線の湯崗子驛、千山驛を過ぐる時列車の車窓に望まれる山である。滿洲の名山として著名な山で、山の範圍は東西十五支里、南北二十支里南北の三嶺が並ひ聳へ南北二峽の間に溪谷があり。溪流がある北嶺には五佛頂、南嶺は千山最高の千人寨がある。全山花崗石で松柏溪を埋め春は梨花、秋は紅葉の眺め佳く、溪は四十八溪あつて幽邃閑雅、風景の美を極めて居る。全山到るところの溪谷と奇觀との諧調がよく、山中に連る五大禪寺二十五院中、最大にして且つ風景の美の絶好であるは無量觀である、自然と人工との妙を備へて雄大なる視野を占め眺望絶佳、千山を代表し滿洲第一の勝地と稱されて居る。

千山の龍泉寺

無量觀の雄大な幽趣味

遼東第一の仙境と稱さるゝ千山中、最も雄大で幽趣に富んで居るのは無量觀である。寺觀の見るべきものは千山の山中到る所に在るが、就中無量觀は最も勝れて居る。『霧煙廻り合ふて水潺々路轉して跛陀百折還る』と明時代の詩人徐文華が千山の景趣を詠じた一節である。

千山の名は古く既に唐時代以前からして現はれ、清朝になつて皇帝が此地へ行幸されたこともあつた。從つて無量觀の勝も夙に著名であることは言ふまでもない。

千山の冬景（其二）

千山の高趣幽態は、別項の千山寫眞の解說に於て紹介したが玆には右に洩れた冬期に於ける千山の眞景を揭げる。

春、夏、秋のいづれの時期に於ても千山の趣きは、勝り劣りなく絶佳の二字に盡されて居るが、冬期雪裡に於ける千山は、其の探勝する人の少きゆゑにや、餘りに紹介されて居らぬのである。

氷雪の下に眠つた千山、銀衣を着けて紺碧の空に嘯く千山。其の態趣の奇、風光の妙、容易に筆舌の紹介し盡くし得るものでは無い殊に羅漢洞から眺めた景は、言ふべからざる崇高にして豪宕の氣に富みて容易に俗人の近づくをゆるさぬ感じがする。唯だそれ神秘の仙境は之れを所揭の寫眞に說いて看る人の感に委すことゝする。

千山の冬景（其一）

千山は高崇、壯雄の觀景に優れて幽趣を極めるため名著である。其の景は春の花梨、桃の葉紅、秋の楓、冬の雪霰に至つて其の特徴を分つ難い程優劣なく絶佳の二字に盡されて居る。

無量觀境内の日時計

景觀の秀拔勝美を以て知られて居る千山中、最も雄大優秀なる景觀は無量觀である。俗界塵埃を離れた此の無量觀に生活する道士は、露を吸ひ霞を喰ふ所謂昔の仙人生活を實地に體驗しつゝあるや否やは知らざるも、斯る深山幽邃の裡にありては、彼の「山中曆日なく寒盡くれとも年を知らす」てふ詩句を連想されるのであるが、何ぞ知らん斯る別乾坤の無量觀境内にも寫眞に見る如き日時計を備へ付けられて遺憾なく時辰を識るの便に供せられて居る。

山海關城外の羊群

山海關は人も知る如く萬里の長城を境として蒙古に對する關門である。其の地は以前直隸省であつたが今は河北省と改稱された、奉天省に隣れる地であつて即ち、萬里の長城の終點である。其の關門には「天下第一關」と榜してあるだけに、古來支那が外敵に備ふる緊要必須の地として嚴かに守られたのである。近く滿洲事變に際しても此地また多少の戰塵を免るゝ能はずして壓風に吹かれたのであるが斯る殺氣に引換へて城外には朗らかな空氣を吸ふて長閑に遊ぶ羊の群は何たる悠々たる光景であらう。

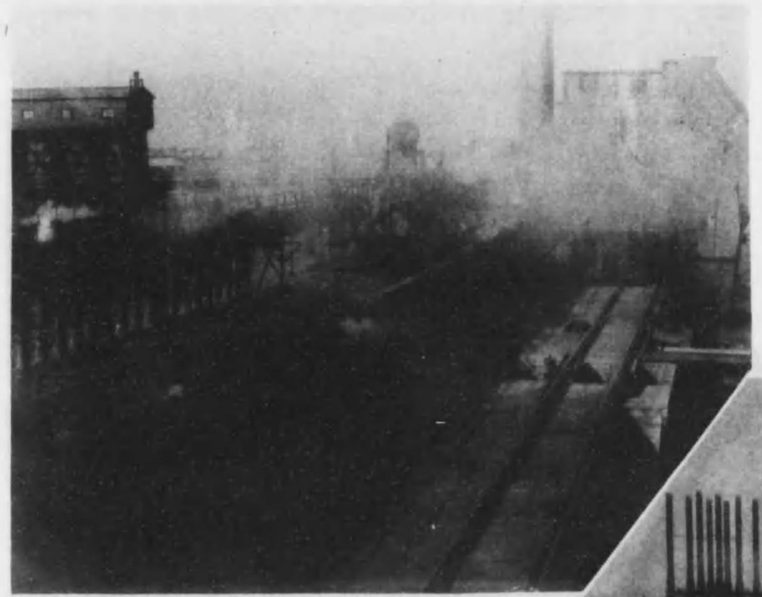
驚くべき大きなショベル

鞍山の山麓に据へ付けられた驚くべき大きな電氣仕掛けのショベルがある是れは無論鞍山製鐵所の設備の一つで碎鑛運搬用に供せられて居るのである。此の電氣仕掛けの大ショベルは電氣の作用によつてスウイッチ一つの捻ち方で宛なから怪物の如く動き出して大きな杓子のやうな鐵の掌裡に碎鑛を受け容れて運搬車へと打ちまけるのである。蓋し鞍山製鐵所の情景として確かに驚異の一つである。

鞍山製鐵所の熔鑛爐

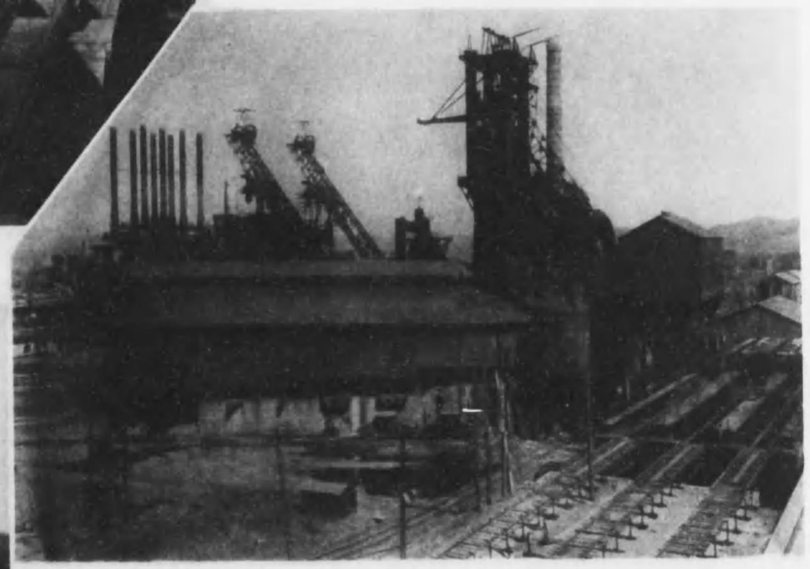
製鐵所あるが故に鞍山の名は著しく記憶されて居るのであるが、其の製鐵所を中心として半徑九哩を以て北東から西南に向けて描かるる半圓形内に鐵鑛山が點在して居つて、其の鐵の埋藏量三億トンと稱せられて居る。此の鑛山を背景として製産する鞍山製鐵所の一横成として南滿の中空にソソリ立つて居るものは同製鐵所の熔鑛爐である。

熔鑛爐は五百トン爐一基、三百五十トン爐二基、合計三基であつて、其の全能力は年産四十萬トンの出鑛を得ると稱せられて居るが、現在では二十八萬トンの年産に止めて居る。けれども軈ては鐵鋼一貫作業の計畫にして完成を告ぐる曉に於ては全滿洲の工業界には目覺しき一新紀元を見ることを期待されて居るのである。



渦巻く白煙中の骸炭工場

鞍山製鐵所の使用する骸炭用石炭は本溪湖の出産であるが、其の本溪湖は鞍山とは遠くはない地點であつて至極便利が良い。鞍山が世界有數の大製鐵所として誇る强味の一つは、製鐵に必要な石炭が近い地にあるからにもよる。同所の骸炭工場の骸炭爐は、蓄熱利用式であつて、百五十六箇の窯爐から成り、一日の生産量は八百トンと稱せられて居る。見るからに濛々として渦巻く白煙の裡に堂々たる樓閣の如き骸炭工場が見えつ隠れつする光景は實に壯觀を極めて居る。



鞍山の特長たる貧鑛處理

鞍山製鐵所の最も誇りとするものは、貧鑛處理法で、此の方法を鞍山式と稱されて居る。即ち品位の低い貧鑛を碎鐵機にかけ、夫れから還元焙燒爐によつて全部を磁鐵鑛と變じ、更に碎鐵機分級機にかけて鐵分を回收し脫水燒結せしめる作業を行ふ。これが鞍山式選鑛設備で、此の一大特長の方法に依て貧鑛が見事に處理されて三十パーセント内外の貧鑛が六十パーセントの富鑛に變化するのである。寫眞は此の貧鑛處理工場の光景で、此の方法は最も誇るに足るべき鞍山製鐵所の一特長と謂ふべきである。

鞍山郊外の高粱種蒔

滿洲名物の一つとして知られて居る高粱は。郊外に見ゆる山々が春霞に包まれる頃からして其の畑に蒔を始める。寫眞は鞍山の郊外に於ける遠望を望まれる脈を延いた山は、有名なる千山である。遙かに左から右へ遠望を背景として、長く〳〵畝つけられた畠の筋に沿ふて高粱の種粒を蒔き上つて行く乙女の姿は、こと中の趣である、斯うして高粱がすくやかで夏を迎へる樣になると、さわ〳〵と風をそよがせて滿洲の野を蔽ふのである。

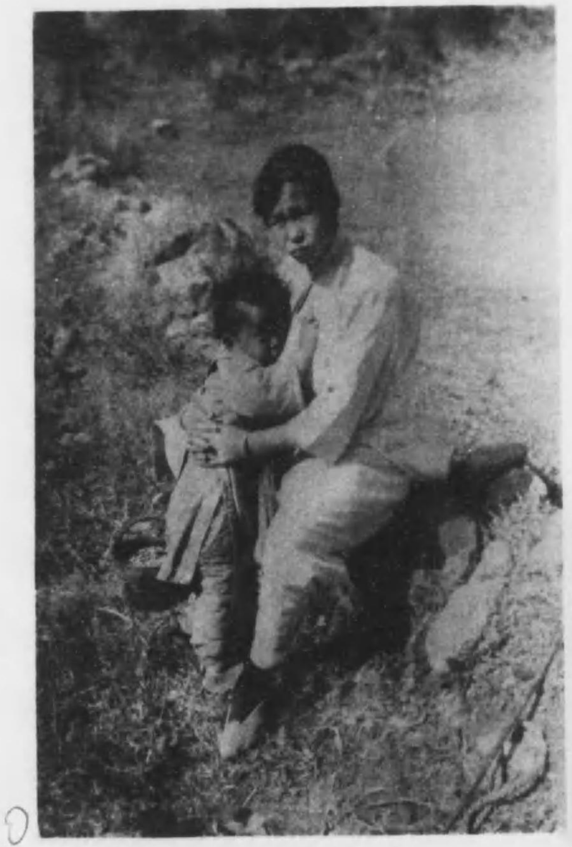
大孤山の爆破作業

埋藏されて居る鐵鑛量三億トンと稱さるゝ鞍山製鐵所の鐵鑛山中、大孤山は現に採掘されて居る富鑛所在の鑛區である。そして此の大孤山上では毎日壯烈なる爆破作業が行はれる。その一回の作業に三十トン以上の鑛石が産出する寫眞は其の凄壯たる爆破の瞬間に於ける光景である。

因に、鞍山製鐵所の採鑛能力は一日二千五百トンであるが、其中大孤山に於ける採鑛が主なるものであるといふ。

大孤山の爆破坑

大孤山は鞍山製鐵所所の屬として有數の鐵鑛山である、其の全貌ば餘り大きくは無いが何となく鐵鑛山としての偉大さを想はせる。鐵塊を運ぶ電車は山の中腹まで引きあげられて山の周圍の線路を縱横に走る。其の山腹、七合目あたりに等身大の爆破坑が掘鑿されると、其處には液體酸素の機筒が裝置されてあつて電流の作用によつて、爆破される仕掛けになつてゐる。



鞍山郊外の一情景

鞍山は鑛業都市として其市街は整然として設計され工場の施設も整つて居つて押しも押されもせぬ都市であるが、一歩市外に出でゝ足の向ふままに郊外を辿れば其處には所揚の寫眞の如き伸んびりした情景に接するのである。夏至前後の白光下に、いそしんで野良仕事の息休め、可愛い小兒を抱へて乳房を哺ます若き母の平和な姿は何たる長閑さである。

野積された鞍山の銑鐵

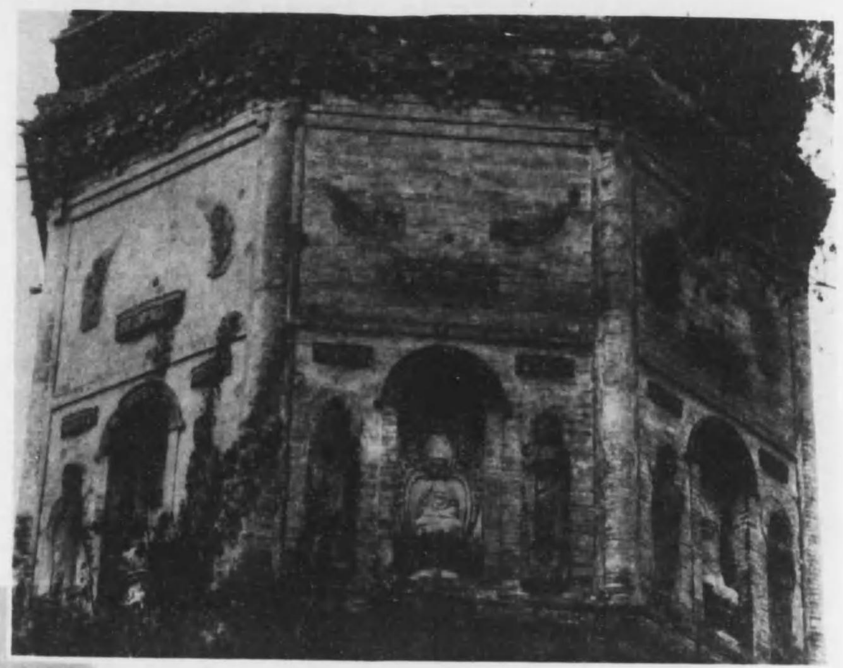
鞍山製鐵山の出銑年額は目下は二十萬トンであるが、近く二十八萬トンの能力に擴大し、追つては更に一歩を進めて所謂銑鋼一貫作業を斷行することになつてゐる。そは兎も角も目下の出銑二十萬トンといふ大量の銑鐵であつて、毎日産出される銑鐵は、これを鞍山製滿所の廣場に野積されてゐる。寫眞は即ちその野積された光景である。一見して如何にその雄大であるかを思はしめる。

因に、この銑鐵年産の大部分は日本内地に送られ例の八幡製鐵所に依つて多大の働きを爲す重要な役目を持つてゐるのである。

八卦溝の鑄物部落

鞍山製鐵所の工業市街に接續した部落に八卦溝といふのがある。其處は支那人の部落であるが、この部落に住する者は大抵鞍山製鐵所に通勤してゐる支那職工であるが、その他にも鐵鑄物の製造に從事する工業者も相當居住してゐる。

元來この八卦溝は鐵鑛山で名高い鞍山に隣接せる土地だけあつて昔から鐵鑄業は可なり發達した所である。近來この八卦溝周圍の鑛區から在昔採掘したといふ遺跡を偲ぶに足る工具や鑛滓などが發見されるのである。これに徴しても往時鐵鑄物の發達した事が窺はれる。今でも鼓地の居住者は鑄物製造を營業としてゐる者も相當にあつて、土人向きの鍋釜類を盛からず産出してゐる。



遼陽蓮花寺の古墳

遼陽の城南に喇嘛園がある。其處には清朝の天聰四年勅命によつて建立したといふ蓮花寺が存してゐる。本尊は阿彌陀佛である。此寺の後方に喇嘛系統の古墳が一つ二つ置き忘られたやうに存在してゐる。聽くところによると清朝の龍遇を蒙つた一代の名僧の墳墓であるといふ。寫眞はその古墳である。

蓮花寺は奉天の喇嘛寺と同樣の意味の下に清朝王室の興隆を祈願した寺であつて、荒れ果てた廢園の裡にも、墳墓は尙依然として殘存して當代聖僧の面影を偲ばれる。

遼陽の白塔

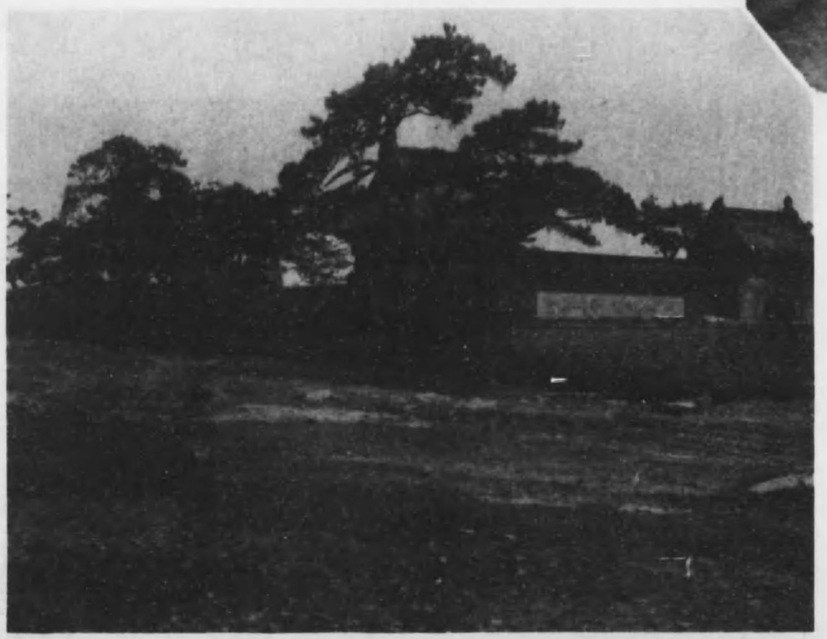
遼陽の白塔と言へば滿洲名勝の代表的の一つで、遼陽の白塔か、白塔い遼陽かとも言はるゝ程に土地の表徵となつて居る。その白塔は廣祐寺の境內に屹立せるもので、此塔あるが故に寺は白塔寺とも呼ばれる。寺の堂宇は既に廢亡に歸したが塔のみは巍然として立つてゐる。その創建の時代は不明であるが、多分明代以前と言はれる。塔は磚で築かれ八角十三層、高き基壇の上に立ち、塔上には約六十二尺の相輪を附し地上相輪の頂まで約二百五十尺、塔は基壇、塔身、層屋相輪の四部から成り、塔身には八角各面の中央に深い龕を作りて佛の座像を納れ左右に脇待の立像を置き、上部には天人が配置してある。

寫眞は白塔の塔身の部を表はしたるものである。因に塔の所在地である廣祐寺の境內を利用して今は白塔公園と稱してゐる。尙鼓には遼陽神社も建てられてある。

遼陽の東京陵

滿鐵本線の太子河を渡ると、東方の小さい丘上に奚しい遺物が望まれる。夫れが遼陽東京陵である。

東京陵の所在する山は積慶山と稱し、原名は嚴壇山俗に墳上と云ふ。東京陵の中では莊親王舒哈爾齊墓が最も規模大きく、その牆壁内に碑閣がある。墓は下部圓筒形で上部は饅頭形の煉瓦築である。高さは一丈二三尺、直徑二間位もあらう此墓の左後方には禧英墓、右方には具勒雅爾哈齊墓と具勒巴雅拉墓があり、丘の東角には穆爾哈齊墓と達爾察墓とがある。



遼陽の大東門附近

古く遼、金の時代には滿洲の大都として繁榮した遼陽は今でも到るところ古い時代の俤が偲ばるゝのである。

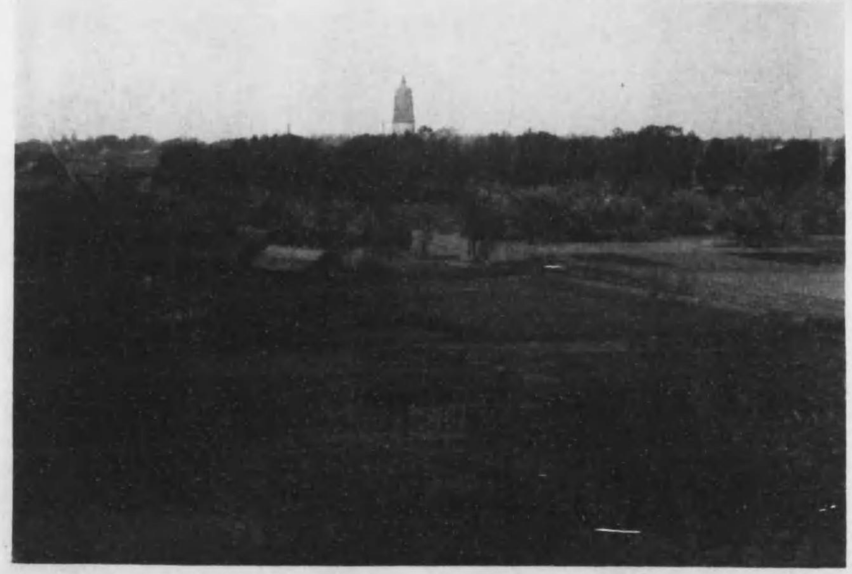
今の遼陽城は明の洪武五年に改築したものであつて東西六支里南、北四支里城門は東に大東と小東門、南に大南門と小南門、西に大西門、鐵門、南鐵門、北に大北門がある。

寫眞は已上の内の大東門附近の光景である。大東門は綏遠門と稱し、此門を出てゝ續く道は當時の高句麗街道であるといふ、街道の野趣に對して城門の古雅な風色は何となく過去の盛時を想像される。

春の遼陽城内

遼陽の城内は商業區域で、繁華な町は大南門に近い大南門街と大西門に通ずる大十字街附近である。城内は一般に蔬菜畑と葡萄園とが多くて、古めかしい寺廟や祀堂が數多くある、又旗人の奥床しい邸宅の古趣あるものが立ち並んで居る。古い建築樣式の商家が連つて居る街や、低い草葺き屋根の民家、偖は荒廢した城門等を見かける所に、漫ろに古都の面影を偲ばるゝのである。

斯うした遼陽城内にも春になれば春らしい氣分が認められ、和らかな春の色は落ちついた古都に相應はしい調和を示して居るのである。



古趣を偲ばるゝ遼陽の春

到るところに古い趣きを示し、特徴らしい城廓の構成が認めらるゝ遼陽城内は、流石に古い都であることを頷かるゝのである、それに中央の十字街を除いた外には面積の弘い果樹園や、菜園が地域を占めて居るのであるから、春爛漫たる花の頃は古趣に富んだ古い都城を圍んで美裝する城内の光景は、又一種の景趣を看取せられる。

遼陽の城廓上の樓閣は魁星樓と云ひ、北斗星中の文昌星を祀つてある。其の天井には塑像の星座圖が鏤まつてゐる。文昌星は文筆を司る星で、此の附近にある孔子廟と關係がある、往時は盛な星祭りが行はれたと言はれて居る。

古風な遼陽の酒造家

遼陽は滿洲に於ける最古の都の一つであると言はるゝだけに、城内及び其の附近には、今でも前世紀の遺物とも言ふべき古風な、家屋、偖は生活の風俗などを見かけるのである。

鼓に揚ぐる寫眞も其の一つと見るべきであらう。老鋪といはるゝ酒造家で見るからに古風な趣きには、古都の昔を偲ばれる。古來遼陽は酒造の郷土として遼東隨一と言はれて居ることを思ふと、殊に其の古風な點に懷かし味が深い。

聽くところによると、此地の酒造の作業は、夜の十一時頃から始めて夫明頃まで行ふといふ事である、斯うして深夜に釀造される强烈な燒酎が此地の名物として歡迎されるのも郷土産物の一特色であらう。

太子河のほとり

太子河の鐵橋は安奉線中第一の長橋として知られて居る。其の全長は一千七百八十尺、此橋を渡ると對岸は溪城線の太子河驛である太子河の清い流れの中に筏や獨木舟か下り行く風趣は恰も一幅の畫面である、此の河岸のほとりにも亦質朴な船人の生活を見かける。寫眞は其の飾らぬ有りの儘の光景であるが、けば〳〵しき文化の燦爛たる社會相とは何等の交渉もなきが如くに暢氣な船人の生活裡にも亦掬すべき一種の趣致は存するのである。

因に、遼陽城廂間通ひの河舟は、石炭、鉱、柴薪などを積載しき此河を往復するのである。

史實を語る遼陽の戰跡

遼陽は滿洲に於ける最古の都城の一つで、嘗ては永らく滿洲政治の中心地であつた、遼陽はもと襄平と稱し燕の昭王が遼東を手に入れて郡治を置いた所である。爾來秦、漢、高勾麗、唐遼、元、明、清の各時代に亘つて歴史に著るしく其名を知られて居る。

滿鐵本線の首山驛を過ぎると次が遼陽である。驛附近の線路に沿ふた右方には日露戰役の忠魂碑が堂々と建てられてある。驛を發して幾程もなき地點に遼

史實を語る遼陽の戰跡

遼陽は滿洲に於ける最古の都城の一つで、嘗ては永らく滿洲政治の中心地であつた、遼陽はもと襄平と稱し燕の昭王が遼東を手に入れて郡治を置いた所である。爾來秦、漢、高勾麗、唐遼、元、明、清の各時代に亘つて歷史に著るしく其名を知られて居る。

滿鐵本線の首山驛を過ぎると次が遼陽である。驛附近の線路に沿ふた右方には日露戰役の忠魂碑が堂々と建てられてある。驛を發して幾程もなき地點に遼陽城の北城である土城壁が認められる。次に太子河の鐵橋にさしかゝる迄に線路沿ひの東側に露軍十二號堡の蹟が殘つて居る

驛の南方十四里の地點には弔忠魂碑が在る、碑の高さは四十五尺、日露戰役に於ける藁平、沙河間の戰歿者一萬三千三百餘名の靈灰を納めたものである。驛の東南一里餘、城の南門外に在る玉廟臺は遼陽戰の際、露軍が閉鎖堡及び角面堡等を設けて半永久的築城をなした所で、我が第四軍は之に對して多大の犧牲を拂つて奪取したのは明治三十七年九月三日の夜であつた。

驛の西方八里二十五町に在る里溝臺は其堅三十八年一月二十五日露將グリツペンブルグの率ゆる百二十箇大隊が、我が滿洲軍の左翼立見支隊を包圍して危殆に瀕せしめたが、我援軍到りて漸く擊攘するを得た所である

想ひ起す日露戰役に於ける遼陽の大會戰は、露軍の十三箇師團に對し、我軍の十箇師團を以てしたもので、明三十七年八月二十三日以後同二十九日迄に第一、第二、第四の三軍は遼陽總攻擊の準備完く成り愈よ八月三十日夜十一時より攻擊を開始し九月四日南門を占領するまでの六日間の大激戰が行はれたのであつた。

遼陽城は早く既に露軍が大集合地點として首山一帶六里半に亘る第一線と城を直接に防禦する四里半に亘る第二線の陣地を構築し極めて堅固なるものを用意されてあつたから、敵の抵抗頗頑强で多くの死傷者續出した

此戰に於て敵の死傷は不詳なるも、戰場に遺棄された死屍のみにても第一軍方面一千第二軍方面約一千、三百第四軍方面約八百、敵帥クロパトキンの報告には戰死將官二、負傷三、聯隊士官戰死五十四、負傷二百五十二、兵戰死一千八百十、負傷一萬八百十一、戰傷遺棄士官五、兵一千二百十一とあり、我軍の

首山の史蹟

史實を語る遼陽の戰跡

遼陽は滿洲に於ける最古の都城の一つで、嘗ては永らく滿洲政治の中心地であつた、遼陽はもと襄平と稱し燕の昭王が遼東を手に入れて郡治を置いた所である。爾來秦、漢、高勾麗、唐遼、元、明、清の各時代に亘つて歷史に著るしく其名を知られて居る。

滿鐵本線の首山驛を過ぎると次が遼陽である。驛附近の線路に沿ふた右方には日露戰役の忠魂碑が堂々と建てられてある。驛を發して幾程もなき地點に遼陽城の北城である土城壁が認められる。次に太子河の鐵橋にさしかゝる迄に線路沿ひの東側に露軍十二號堡の蹟が殘つて居る

驛の南方十四里の地點には弔忠魂碑が在る、碑の高さは四十五尺、日露戰役に於ける蓋平、沙河間の戰歿者一萬三千三百餘名の靈灰を納めたものである。

驛の東南一里餘、城の南門外に在る玉廟皇は遼陽戰の際、露軍が閉鎖堡及び角面堡等を設けて牢永久的築城をなした所で、我が第四軍は之に對して多大の犧牲を拂つて奪取したのは明治三十七年九月三日の夜であつた。

驛の西方八里二十五町に在る里溝臺は其墓三十八年一月二十五日露將グリツペンブルグの率ゆる百二十箇大隊が、我が滿洲軍の左翼立見支隊を包圍して危殆に瀕せしめたが、我援軍到りて漸く擊攘するを得た所である

想ひ起す日露戰役に於ける遼陽の大會戰は、露軍の十三箇師團に對し、我軍の十箇師團を以てしたもので、明三十七年八月二十三日以後同二十九日迄に第一、第二、第四の三軍は遼陽總攻擊の準備完く成り愈よ八月三十日夜十一時より攻擊を開始し九月四日南門を占領するまでの六日間の大激戰が行はれたのであつた。

遼陽城は早く既に露軍が大集合地點として首山一帶六里半に亘る第一線と城を直接に防禦する四里半に亘る第二線の陣地を構築し極めて堅固なるものを用意されてあつたから、敵の抵抗頗頗强で多くの死傷者續出した

此戰に於て敵の死傷は不詳なるも、戰場に遺棄された死屍のみにても第一軍方面一千第二軍方面約一千、三百第四軍方面約八百、敵師クロパトキンの報告には戰死將官二、負傷三、聯隊士官戰死五十四、負傷二百五十二、兵戰死一千八百十、負傷一萬八百十一、戰傷遺棄士官五、兵一千二百十二とあり、我軍の死傷者は概數一萬七千五百三十九名であつた。是を以ても遼陽會戰の如何に激烈を極めたるかを想像されるのである。

寫眞の手前に見ゆるのは首山で、軍神橘中佐、閼谷聯隊長戰死の記念碑は右中間の橘山の山上に建てられてある。

首山の史蹟

物凄き遼河の流氷

遼河は古来滿洲の中系を爲す交通水路で、其の延長三千八百支里水源を興安嶺から發して渤海に注ぐ、河口には營口を控へ、水運よく交通に多大の便を與へて居る。其の流域は遼東、遼西の境を劃して、此の流れを下る河船は沿岸の農産物を營口に致すのである。而して是等の河船は歸荷として各種の雜貨を實地に齎らす、其の流域には著名市場が頗る多い、遼河は實に營口の生みの親とも謂ふべき水運交通の良河川であるが、而も其の結氷期となると、堅氷河面を閉ぢて宛も鐵板の夫れの如く張り詰めるのである。此期間に於ける河船は萬事休すの狀態であるが、二月の節分あたりからして春めき氣分が一とたび動出すとなると、流石に閉め固められた遼河の堅氷も、和らかき春のけわひに誘ひ緩められて堅く〳〵結びし氷も解くるの機至り、一夜恐ろしき爆音とともに炸裂した氷は、さま〳〵の形狀を爲して大塊小塊、押すな〳〵と次ぎ〳〵に集積して、上流から流れ來る有樣は實に物凄い限りの光景を呈する。斯くと見るや兩岸の船人等は、スワ解氷と狂氣の樣に春の水に誘はれて河心に船を進み出すのである。

蘇生する春の遼河

遼河の河幅は所によりて相異あるが營口に於ては場所により五百五十米突乃至七百米、水深は干潮時場所により二十五呎乃至七十呎潮汐干滿の差は平均十呎である。河水は毎年十二月下旬から結氷し始めて翌年の三月下旬頃までに至り、其の結氷期間には橇やアイヌヨットで交通されのであるが、其結氷期間に於ける不自由さは想ひやられる。けれども一とたび春風堅氷も解いて愈よ河船の交通自由となるや、河面は頓に甦生の氣分に滿ちて流域到るところに、明るく朗らかな蘇生情調の溢るのを覺ゆる。

因に、遼河は水流による河道の變異等ありて其の改修の必要上、遼河工務局の手によつて其事業が行はれて居る。

奉天の附屬地帶

滿鐵本線の主要驛中の主要驛である奉天は、設備萬遺憾なく整ひ、近代的精巧を發揮して居る。所揭の寫眞は其の附屬地帶である。附屬地帶は面積三百十五萬坪で長方形を爲し、鐵道の東方を市街地西方を工業地として分劃されて居る、市街は千代田通を中央として、驛前から浪速通、平安通の二大斜道が發せられて居る。現在の如く大市街を形成したのは明治四十一年滿鐵が市街計畫に着手して以來の急激な發展であるといふ。

乘物で埋まる驛頭

流石に全滿洲の中央驛と稱せらるゝ奉天驛頭の混雜は事實文字通り芋を洗ふが如くであるが、分けても驚かるゝのは各種の乘物雲集の光景である。凡そ世界にありとあらゆる變り型の乘物を一場に蒐めて展覽會を開きたるが如く、英國風ゆ箱馬車を始め、露西亞式の幌馬車、日本式の人力車、支那流のカマボコ馬車、偖は近代的の自動車等で、只だ飛行機を見ざるが不思議くらゐの珍光景が展開されて居る。

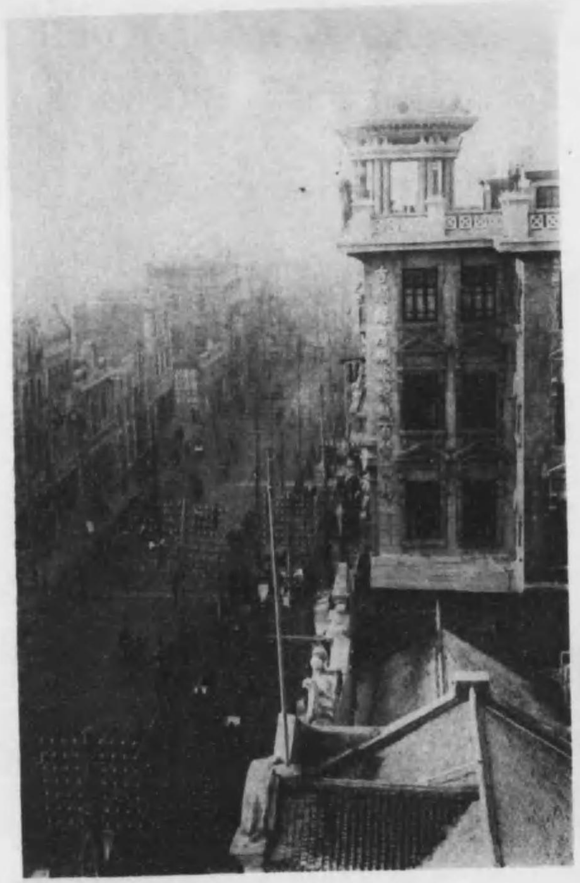
四通八達の奉天驛

奉天は滿洲の北、河流は沃豊饒な平野に在つて、其の驛は全滿洲交通の樞軸を成し即ち京奉線、安奉線、撫順支線、京奉線、奉海線、奉天驛は滿鐵本線、支線の五つの鐵道の結節點に位つて居る事、この通八達の交通線を一掌裏に握り集めて居るのである。

更に地圖の上に正確に奉天の位置をいへば、北緯四十一度五十八分、東經百二十三度三十八分、海拔四十三米八分、大連より約二百十五哩、北平より約五百二哩である。

銀座の觀ある四平街通り

奉天の四平街通りは、交通の要衝に當つて居るだけに二六時中殷賑雜沓を極めて居る。其の盛觀は宛かも我が東京の銀座に酷似した面影があるが、而かもその兩側の商舗、店頭の光景は何處までも彩色、式、支那式情調が漂ふしも居る事に氣注がるゝのである。



奉天城内の目貫市街

奉天城内の唯一の目貫市街と言へば言ふまでもなく四平街通りである古來この目貫通りは驚くべき大袈裟な店舗が華やかに裝飾されて居つたが、近來奉天省が遼寧省と改稱されてからは、此の目貫市街も調子が一變し頗るモダン式に化し、その店舗の建築は言ふに及ばず、途行く人の行裝、風俗慌だしく狂噪的な氣分を認めらるゝのである。

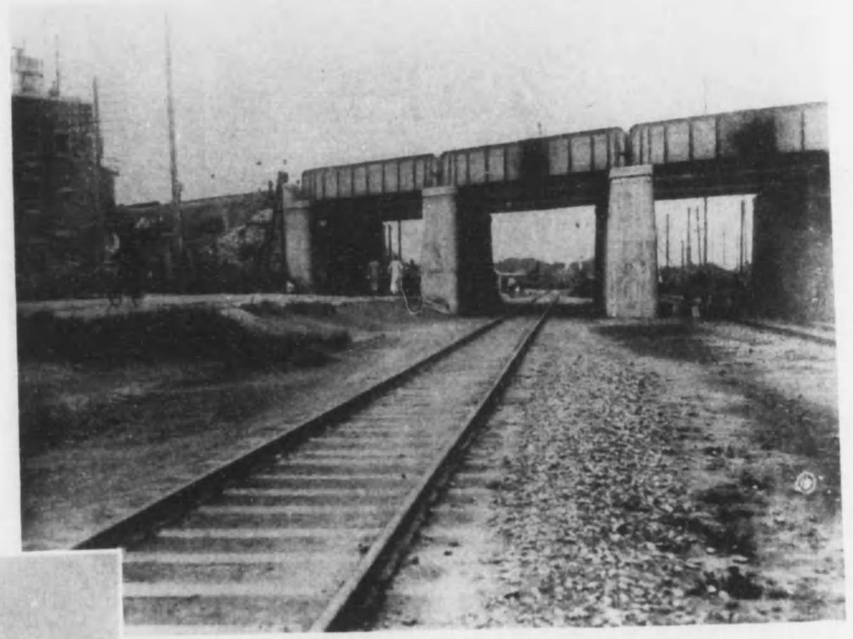
奉天の浪速通り

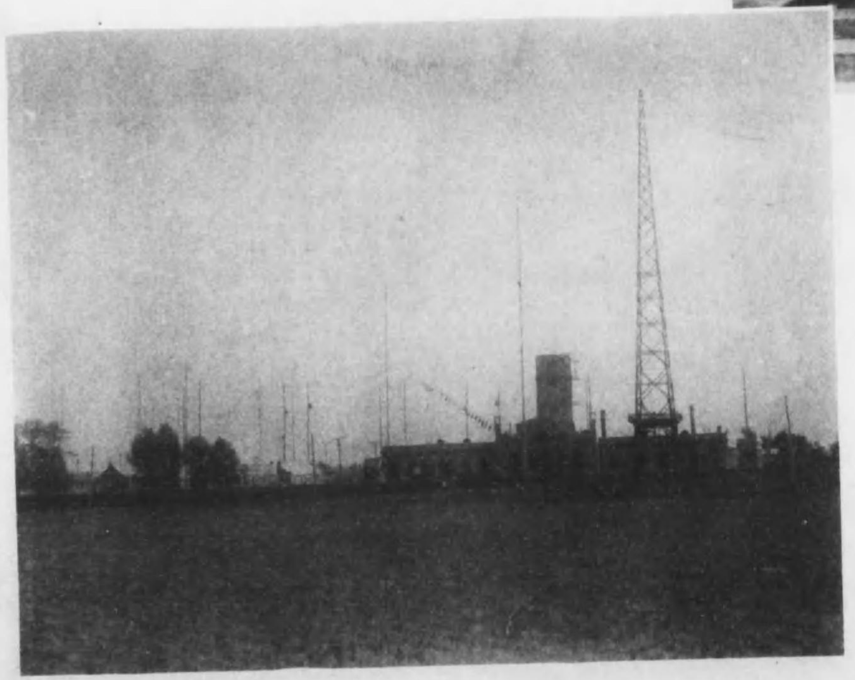
新國家滿洲國の成立前は、滿洲の主都であつて、東西省全體の政治、軍事、經濟、教育の中心地であつた大奉天は、總督府、交通の要衝に當つて居る。窩闊台、一カ所に集中し、共の運輸の堂々たる奉天市中心の大市街であつて、軸を成して居る。大星ホテル、一流旅館も奉天滿洲ふさはしい浪速通りとして、往時は大旅館と稱せられ、後陽と呼ばれ、清朝時代になつて太祖帝鼓樂隊に移し、盛京と稱し、北京へ遷都するに及んで日露戰役の際留守を守つたこの都陽は、時の都であつた。又日露戰役の際此地に於て治外法權を留守にしたことは何人も知る所である。

東北無線電信臺

東北省に於ける無線電信事業は、始め帝政露國側に於てハルビンに無線電信所一ヶ所を創設したるが、民國十一年に支那政府では外國人の無線電信設立を禁止し、その後ハルビンの同所を民國にて回收したのである。現在の東北無線電信臺は大正十三年二月奉天城西北の北營門附近に建設し、その後昭和二年五月に增設して三省に分臺を設置し、斯くして奉天軍々事通信に使用することゝなつて居るのである。

東北無線電信臺の機械設備は臨時移動式であるが、漸次永久固定式に改築されて居るとの事である。





奉天の鐵道交通

奉天は滿鐵本線即ち連長線間に於ける一大驛であつて、交通上の施設完備し、就中鐵道線路は同驛を基點若しくは乘換驛として四通八達の便がある。即ち撫順線、安奉線の基點驛で、京奉線の乘換驛となつて居る。

その滿鐵線としては撫順行、安東行、京奉線としては（瀋陽驛）北平行。奉海線（大北邊門外奉天驛）としては海龍行等で、頗る自由便利である。

寫眞は京奉、奉海兩線のクロス箇所の光景である。

大廣場の壯觀

奉天附屬地の中心には大廣場がある。此の大廣場を中心として此の附近は奉天の最も壯麗なる盛觀を示すもので、各種の機關は此の周圍を繞りて遺憾なく整備し、其の近代的設備は大連に次ぐ精彩であると言はれて居る。

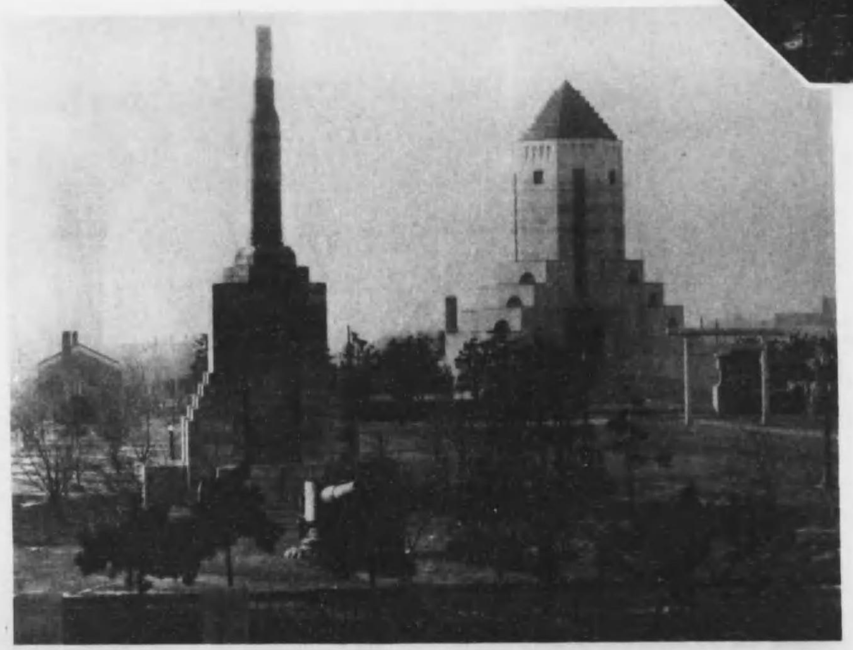
大廣場の中央には日露戰役の記念碑が屹立し、過去の歴史を語りつゝあると共に、又附屬地市街の一つの象徴として行人の目を惹くのである。

奉天の忠靈塔

奉天は日露戰役に於ける著名な戰蹟地であつて、其の附屬地大廣場には高さ六十尺の『明治三十七八年戰役記念碑』があり、千代田通りには直經三尺八寸、高さ二十三尺の小鉄彈型『明治三十七八年戰役忠魂碑』があり、そうして之と俱に『忠靈塔』が建てられてある。

『忠靈塔』は寫眞に見る如く、壯麗なる六稜のピラミット型である。是れ奉天大會戰にて護國の鬼となりし將士二萬二千八百四十八名の靈灰を祀れるもので、爾來毎年春秋二回に招魂祭を執行せられて居る。

抑も日露戰役の主眼であつた戰は言ふまでもなく奉天の大會戰で、彼我共に全力を擧げて鬪つたのであつた。露國のクロパトキン大將を總師とする露軍は第一軍リネウイッチ大將の率ゆる十箇師團半を高興嶺より萬寶山に亘り、更に支隊を以て馬群丹以東を守備しビルデルリング大將の七箇師團は萬寶山、李大人化北方間本道の東西に配備し第三軍カウリバルオ大將の十箇師團半を第二軍の右翼に連ねて四方臺に亘る線を守備した。我軍では既に全軍の集中を終り、斯て三十八年二月廿六日大山總司令官より總攻擊の命下りて愈よ開戰の幕は切つて落され第一軍は敵の左翼、第二軍は長蛇、第三軍は四方臺、第四軍は萬寶山と各軍攻擊の作戰計畫熟し猛擊奮戰の結果、我軍の包圍功を奏しで敵の退路を斷ち三月十日を以て完全に奉天を占領したのであつた。此の大戰に參與した我が戰鬪人員は二十五萬、之に對して敵軍は三十二萬の多數であつた、而して我軍の死傷は七萬、敵は九萬と算せられた。以て如何に奉天の大會戰が猛烈奮戰であつかを察せらるゝと共に、今にして其の記念の忠靈塔に對するものは多大の感慨を禁じ得ないのである。



冬期の奉天市街

奉天は滿洲の大主都として堂々たる輪廓を有して居るが、之を大別すると、鐵道附屬地、商埠地、城門の三區域で、昭和三年の調査によると其人口は附屬地三萬四千八百六十三人、商埠地四萬三千五百八十二人、城内二十七萬二千九百三十六人。

奉天の市街中、最も繁榮を示て居る附屬地は、面積三百十五萬坪、市街は秩序整然として直角形を爲し、千世田通りを中心として驛前から浪速通、平安通の二大斜道を放射し、浪速通の中間には大廣場があり、平安通の中間にも平安廣場が作られてある。

今でこそ斯くの如き大市街を形成して居る附屬地も、往時は荒涼たる野原で、其大部分は支那人の墓地であつたと言はれて居る今日の如き發達の緒に就いたのは明治四十一年滿鐵が市街計畫着手してからである。

寫眞は冬期に於ける奉天市街の光景である、奉天の冬は零下三十度内外に下降するのであるから、見渡す外部の總てが銀色化し凍結する街上は戛々の音を立て、街路樹に結べる霜花は夜に入れば赤き各家の窓灯に映して一種の裝飾觀を示すところ蓋し滿洲特異の情景である。

奉天公園の冬

冬期に入れば樹木といふ樹木は悉く霜花に包まれて宛然枯木に花を着けたるが如き美觀を呈する奉天の市街、別けても公園の美化された光景は又一としほである。

奉天公園は附屬地の市街中に在る、別項にも敍した如く其の昔は荒涼たる野原であつたが文化の發達と共に著るしき進展を示して、今其の往時の野原を語るも誰か眞面目に信ずるものもあらずやと疑はるるのであるが、而かも此の奉天公園の一帶には、僅に昔日の野原の面影を殘して、今更ながら今昔の感を深うするのである。

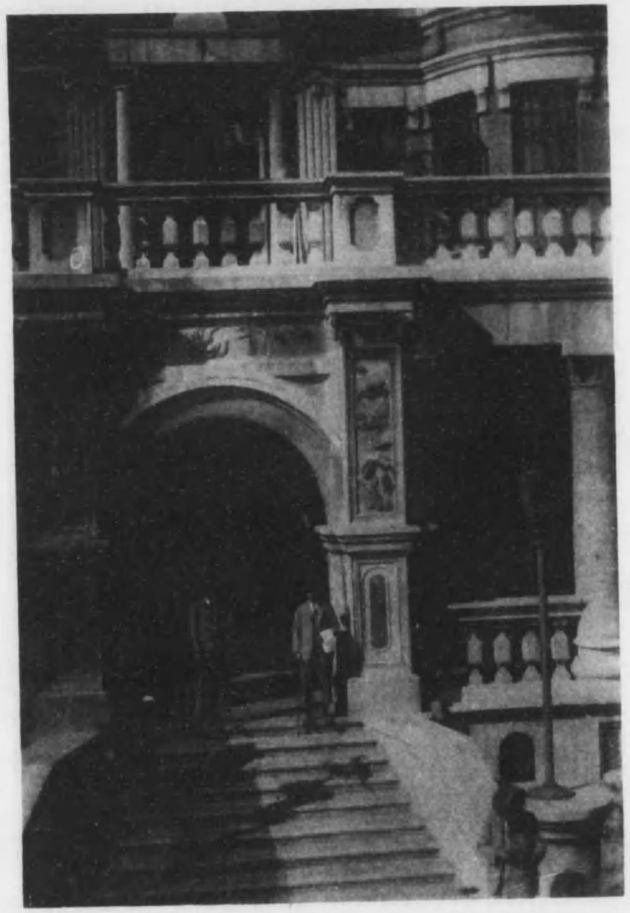
奉天の北大營

北大營は奉天驛の北方約八粁の地點に所在する。滿洲事變の勃發前までは張學良の兵營として傲慢の威を示して居つたのである。

昭和六年九月十八日夜、支那兵は此の北大營の西北柳條溝の滿鐵本線の陸橋を不法にも爆破して我が守備隊を襲撃したので我が守備隊は時を移さず應戰し北大營の支那兵兵を襲撃して之を占據したことは、何人も未だ記憶に新たなる所であると思ふ。

爾來戰爭は開展し行き奉天を遁げて錦州に赴きたる學良は其錦州をも落延びるに至つた。斯くして其の兵營であつた奉天の北大營は今は新らしき歴史の地となつた。寫眞は北大營門の光景である。

因に、奉天見物の旅客は巡覽するプログラムに必ず北大營にも案内されるが、玆には酒保があつて滿洲事變の要圖、寫眞、繪葉書、菓子、支那饅頭などを販賣して居る。



張學良の舊邸

營て奉天に傲慢の翼を張り學良は、滿洲事變以來、破竹の如き勢ひを示したる張學良の舊邸。

東三省の軍隊は、空軍司令官の指揮下に入り、海陸空の三軍を以て、北大營の支那兵を襲撃し、一挙に錦州に逃げ出した。

奉天は果して落ちたのである。

次いで錦州も陥落した。

滿洲の要衝は、今日、平和な氣分に包まれ、北大營は、今、演習の幕を閉じ、平和な氣分に包まれて居る。

共に、この歴史の地は、今、觀光の時代に入り、北大營は、今、觀光の時代に入り、共に、この歴史の地は、今、觀光の時代に入り、共に、この歴史の地は、今、觀光の時代に入り、共に、この歴史の地

奉天の北陵

滿洲の景物中、觀るべきものゝ一つとして何人も必ず奉天の北陵を數へる。北陵は奉天驛の北一里半の地點にある順治年間清朝第二代の皇帝太宗文皇帝の陵墓で、隆業山昭陵とも稱する。陵外の周圍二里に亘りて樹林鬱蒼とした荒涼の地域を有し、規模極めて宏壯、陵の隆恩門を入ると隆恩殿である。その後は明樣で、その大理石の敷石は清朝時代に皇族錢拜の爲めに造られたもの、この陵域を挾んで、東西兩配殿がある。珍奇な大理石の石像など、人の目を惹く。奉天驛を出でゝ北進する汽車の窓からこの北陵の美しい黄瓦碧瓦の殿堂を望見される。

北陵の石牌樓

壯麗美觀を以て知らるゝ北陵の建築結構中、殊に目を惹くのは、同陵の最前面に在る石牌樓である。技巧を凝らした種々の奇麗なる彫像があり、且つ、日本の如き大震害を蒙むりし事は無いので、建設當時より約三百年間毫も搖ぎ若しくは毀損することなく儼然として存してゐる。

支那本部に所在する歷代の帝陵中には、頗る頹廢しゐるものもあるに引換へ、奉天の東陵北陵の如きは、清朝祖先の陵墓である爲め力めて完全に保存しつゝあるので、この歷史的風物史蹟を偲ぶことが出來ると共に、滿洲名勝の一として永久に語り得るのである。

萬泉河の蓮花

奉天城内の大東門を出てゝ南方に小さき河沼がある渾河の一支流で、萬泉河と稱する。其處には多くの蓮が植えられて、花時妍を競ひ頗る美觀で、一勝地として知られてゐる。

寫眞はこの小河沼なる萬泉河の光景で、沼面を蔽ひ埋めた荷葉、翠條に空を蔽ふた柳葉、見るからに雅趣横溢、斯るところに贅を盡くした畫舫を泛べた文人墨客の多かつた清朝の旺盛なりし當時が漫ろに回顧されるのである。

奉天城内の宮殿

奉天の城内は、昔時の名稱のまゝに瀋陽と呼ばれてゐる。そうしてその中心は矢張り昔時の宮殿であつてその大規模な構造は、何と云つても大奉天に一つの權威を加へてゐるやうに思はれる。

寫眞はこの宮殿を望んだ光景である。傳ふる所によると宮殿は清の太祖及び太宗の宮居であつて、今より約三百年前崇德二年の建築に係るもので、滿洲に於ける支那建築上隨一の珍寶である。又この宮殿内の文溯閣は四庫全書を藏した處として名高く知られてゐる。

元日接神の式

滿洲では、正月の二日に財神を迎へ祭る式を行ふことは別項の寫眞に於て述べたが、玆に掲げた寫眞は、元日早朝行はるゝ接神（チエシエヌ）である。この祭典は元日の早旦一時から五時頃の間に院子即ち中庭に設けられた神壇に、天神の諸神を迎へる式であつて、之を接神と稱する。この式によつて新年が來るのであると言はれて居る。

でこの神壇を天地卓と云ひ、天地三界之神位と記した紅紙の神位によつて神を迎へ、そして主人は更に線香を捧げて諸神を案内して家屋内の神壇に移すのである。又竈の神も元日に下界されるといふ。

法輪寺の天地佛

奉天城外の四方には四座の喇嘛塔が聳て居る。即ち撫近門外永光寺の東塔、外壊門外延壽寺の西塔、德盛門外廣慈寺の南塔、地藏門外法輪寺の北塔の四つである。

已上四箇寺の内、法輪寺には滿蒙西漢、四體の文で彫刻された碑があり、又涅槃寂靜相を表現せる天地佛がある。玆に掲ぐる寫眞は其の天地佛である。

天地佛と云ふのは、天地即ち陰陽の兩性が相抱擁するに擬した像であつて、我國に在る歓喜聖天の像よりも一層露骨のやうに思はれる。法輪寺の本殿にはこの天地佛が中央に安置せられ、其の東には太陽、西には太陰を表象せる像を配し左右兩側には大菩薩が列せられてある。

石炭の覇王撫順

滿洲は愚か、世界の炭坑界に無比の雷名を轟し居る撫順の炭礦は、其の石炭の埋藏量約十億噸、炭層の厚さ平均百三十尺、最厚は四百二十尺、礦區は東西四里、南北一里に亙り、面積一千八百二十萬坪である。

採炭は坑内掘には大山採炭所、東鄕採炭所があり、露天掘には古城子採炭所と東ヶ崗とある。炭礦の就業人員は日本人二千六百人、支那人四萬四千四百人。出炭量は約七百萬噸で一日平均二萬四千噸、而して其の消費方面は滿鐵社用百萬噸

石炭の覇王撫順

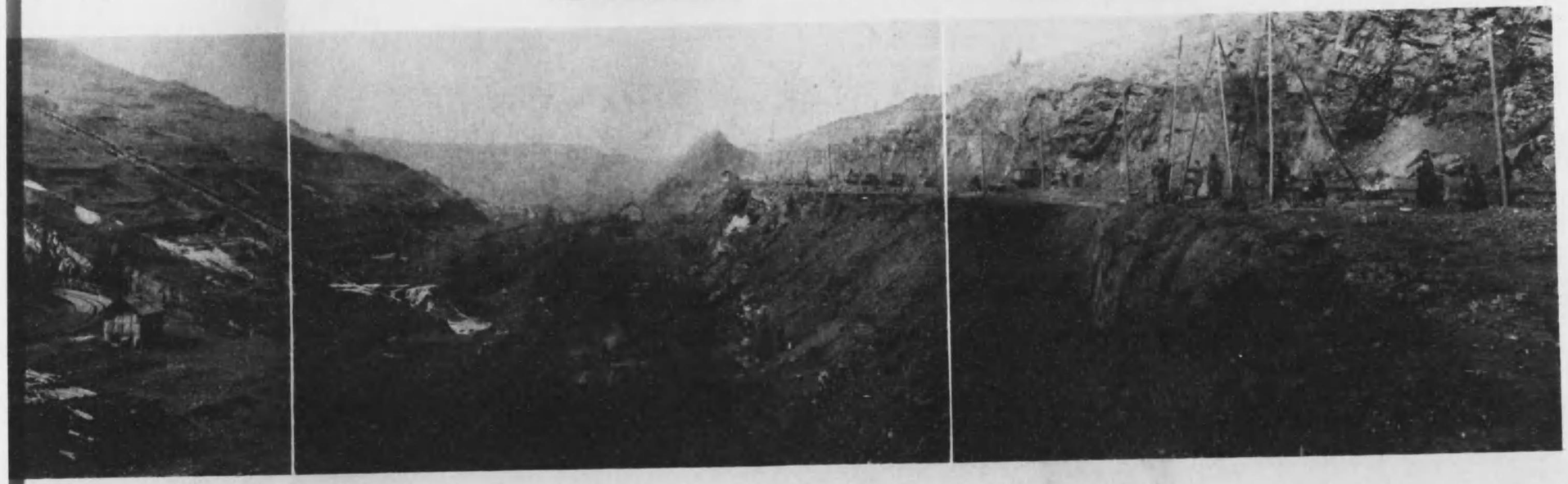
滿洲は愚か、世界の炭坑界に無比の雷名を轟し居る撫順の炭礦は、其の石炭の埋藏量約十億噸、炭層の厚さ平均百三十尺、最厚は四百二十尺、礦區は東西四里、南北一里に亙り、面積一千八百二十萬坪である。

採炭は坑内掘には大山採炭所、東鄕採炭所があり、露天掘には古城子採炭所と東ヶ崗とある。炭礦の就業人員は日本人二千六百人、支那人四萬四千四百人。出炭量は約七百萬噸で一日平均二萬四千噸、而して其の消費方面は滿鐵社用百萬噸滿洲地賣り百四十萬噸、內地移入八百五十萬噸、朝鮮向四十萬噸、大連（船焚料）九十萬噸で其殘餘は南支及び南洋方面に輸出されて居る。

撫順炭坑の發見せられたるは今より約七百年前に係り、當時高麗人が陶器製造の燃料として採掘したものと傳へられて居る。清朝に至り乾隆年間此の石炭の採掘は風水に害ありとの迷信から採炭を嚴禁し爾來久しく放置してあつたが、光緒二十七年に迷信を破つて採掘を公許し支那人によつて採炭事業を興したが、同三十年露人兵を率ゐて來り無斷鑛區內に鐵道を敷設し同炭坑を占領したのであつた。然るに日露戰役の結果我軍の手に歸するに至り明治四十年四月南滿鐵道會社之を繼承して着々面目を改め、以て今日の盛況を呈するに至つたのである。

壯觀人を壓する露天掘

撫順炭礦中、最も特色あるものは有名なる露天掘である。古城子の第一露天掘は老いて既に終結し、東ヶ崗露天掘はまだ若いが古城子第二露天掘は規模最も雄大で、現在の長さ千米突、幅三百米突、深さ八七米突で、將來は此の三倍にまで擴張される豫定になつて居る。現在では一日の出炭量一萬



滿洲は愚か、世界の炭坑界に無比の雷名を轟し居る撫順の炭礦は、其の石炭の埋藏量約十億噸、炭層の厚さ平均百三十尺、最厚は四百二十尺、礦區は東西四里、南北一里に亙り、面積一千八百二十萬坪である。

採炭は坑内掘には大山採炭所、東鄕採炭所があり、露天掘には古城子採炭所と東ヶ崗とある。炭礦の就業人員は日本人二千六百人、支那人四萬四千四百人。出炭量は約七百萬噸で一日平均二萬四千噸、而して其の消費方面は滿鐵社用百萬噸

滿洲地賣り百四十萬噸、內地移入八百五十萬噸、朝鮮向四十萬噸、大連（船焚料）九十萬噸で其殘餘は南支及び南洋方面に輸出されて居る。

撫順炭坑の發見せられたるは今より約七百年前に係り、當時高麗人が陶器製造の燃料として採掘したものと傳へられて居る。清朝に至り乾隆年間此の石炭の採掘は風水に害ありとの迷信から採炭を嚴禁し爾來久しく放置してあつたが、光緒二十七年に迷信を破つて採掘を公許し支那人によつて採炭事業を興したが、同三十年露人兵を率ゐて來り無斷鐵區內に鐵道を敷設し同炭坑を占領したのであつた。然るに日露戰役の結果我軍の手に歸するに至り明治四十年四月南滿鐵道會社之を繼承して着々面目を改め、以て今日の盛況を呈するに至つたのである。

壯觀人を壓する露天掘

撫順炭礦中、最も特色あるものは有名なる露天掘である。古城子の第一露天掘は老いて既に終結し、東ヶ崗露天掘はまだ若いが古城子第二露天掘は規模最も雄大で、現在の長さ千米突、幅三百米突、深さ八七米突で、將來は此の三倍にまで擴張される豫定になつて居る。現在では一日の出炭量一萬噸、全坑出炭の殆んど半額に達して居る。剝土剝岩にエキスカベーター、スチームショベル及び電氣ショベルを使用し夾石はダイナマイトを以て破碎し、炭層は黑色火藥を用ゐて緩めた後手掘並に電氣ショベルで採掘する。此の露天掘は坑內掘に比べて作業が容易で採炭能力を高めること、坑木の必要なきこと、炭況に順應して需要關係を調節し得る等の利益があると言はれて居る。

何しろ世界に類のない此の大露天掘の壯觀は實に一見人を驚倒せしむる一大工事である。

撫順の坑夫

撫順炭鑛に働く就業員に就ては、「別項石炭の覇王撫順」の說明にも記した如く、從業人員は日本人が二千六百人支那人が四萬四千四百人であるが、炭鑛の坑夫は主として山東省と河北省とから集つて來て居る。是等支那坑夫は本土の軍閥に苦しめられて惱ましき生活に喘くよりも、統制ある明るい朗らかな坑夫生活の方が暴竟氣樂であるといふことに氣付いて豐饒の鑛嘴に身を委しつゝあるものと思はれる。

不當搾取、積弊な制度の下に、うだつの上らぬ苦力生活に目覺めたる彼等支那坑夫は、科學發達せる文化工作にたづさはつて精神的に幸福を享け得るのである。

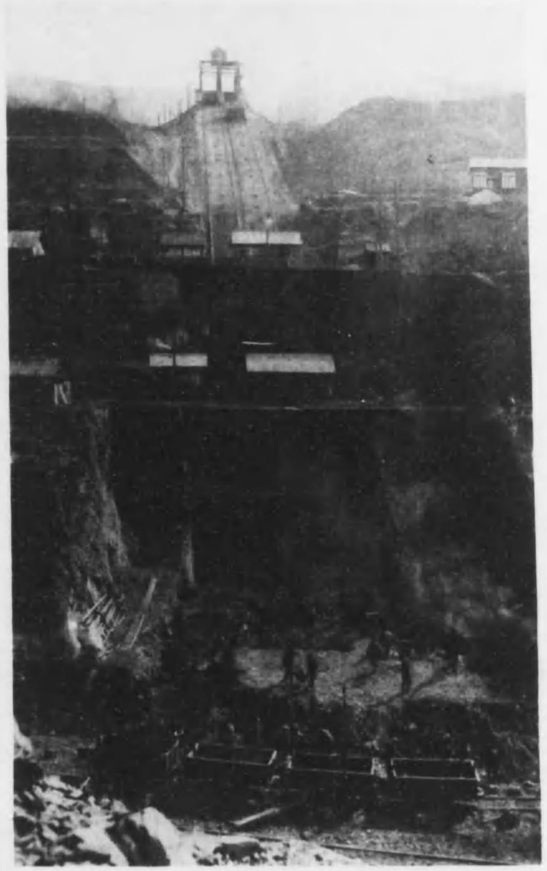
觀樂園から見た撫順

日本の施設に係る華工觀樂園は撫順に於ける諸機關施設の一つとして知られて居るものであるが、撫順を展望するには此の華工觀樂園よりするが最も好適である殊に同園の中心老君廟より展望すると堂々たる炭都撫順の機構の大きいことが頷かれる。

撫順の市街は全く炭鑛の爲めに興隆した鑛業都市であるとともに此の炭鑛を除外しては何事も撫順を語ることは出來ぬ展望一番その雄大なる炭都の旺盛ぶりを頷くと同時に、回顧して日露戰役前に遡り想へば果して如何、千金寨に僅々四五十戸に過ぎざる支那人部落が在つたのみだ、それが日本の經營に移つて以來、堂々たる市街を形成し商民工人翕然として玆に集り、撫順城内外の民も大部分は玆に蓐住し來つた、今更ながら漫ろに今昔の感に耐えない。

一差三トン掘ふ電氣ショベル

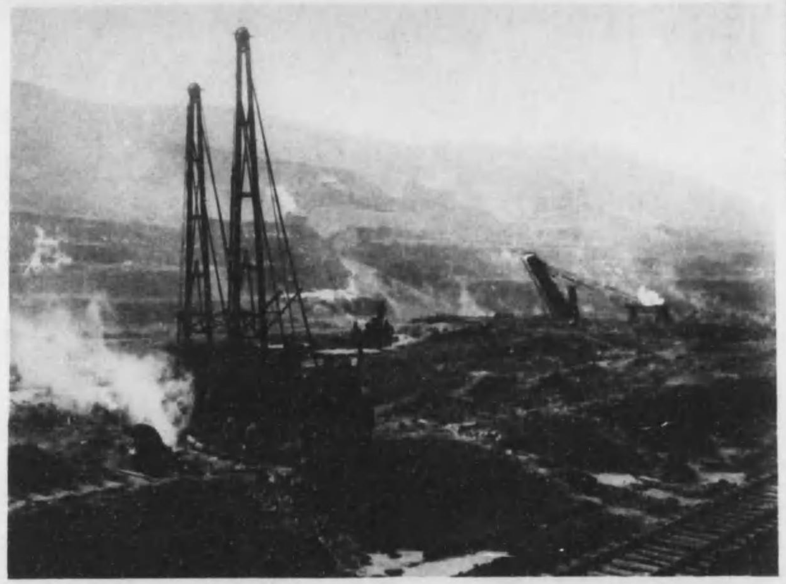
撫順炭鑛の工作は悉く電化方策であるが其の電氣ショベルの如き鋼鐵製の爪が確かに驚異の一つである。この電氣ショベルの先端に向つてはグワットシ掘り込むと破壊されたる層に向つて上げて其の底部から吐出す驚くべし一差三トン炭を淺へ投入して居るのである。ショベルは、スチームの裝置と共に二十五噸活動して居るのである。



撫順のスキツプ捲上裝置

世界無比と言はるゝだけあつて撫順炭坑の炭層は實に驚くべき厚層で四百尺にも及ぶと言ふ。そうして其の露天堀は五メートルの階層を重ねて遙かの地底を掘んで居るので、從つて表までの運炭作業はなか〳〵容易でない

寫眞は最近完成を告たスキツプ捲上げ裝置である。この裝置は階層の橋まで運搬して來たトロを轉覆して炭は下部の軌道上にある客車に移し積みて、軌道を上へと昇り選炭所へ直通することになつて居る。斯いふ風に總てが電力自動による運炭作業は實に革命的裝置と謂ふべきである因に一客車は二十五トン積載であるから一日に運ぶ數量は莫大なものである。

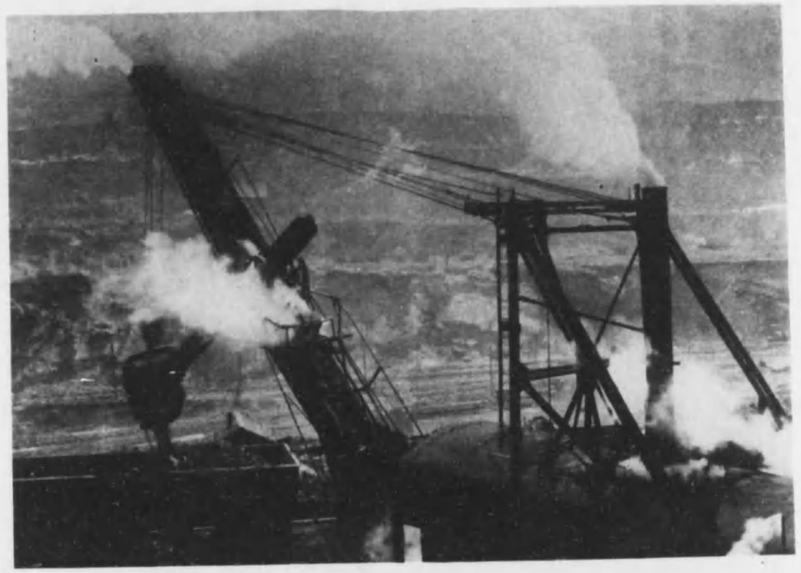


爆破作業

撫順炭鑛の作業中、第一と言はれて居るのは厚層の爆破である、ボーリングマシン地中を深く〳〵穿孔し、之に黑色の火藥を充塡する。そうして其れが驚くべき音響と共に爆破され網目の龜裂は地層をゆるめる、其處を中心として堅炭工作、運炭作業は始められるのである。凄まじいこの爆音が頻繁に響くに接すると、流石に工業地たるの情感を深めるのである。

スチームショベルの活動

撫順炭坑の雄大なことは其の有名な露天掘の作業に盡くされて居るのである。單に炭礦の坑夫と言へば深い〳〵奈落の地度に日の目も見ず青鬼の働きをする、現世の地獄を連想するに反して、露天掘の工作は、朗らかな地上の陽光を浴びながら働き、そうして其れが機械化せる作業であるのに驚かるゝのである。寫眞はスチームショベルで表土を剝して採炭する光景である。



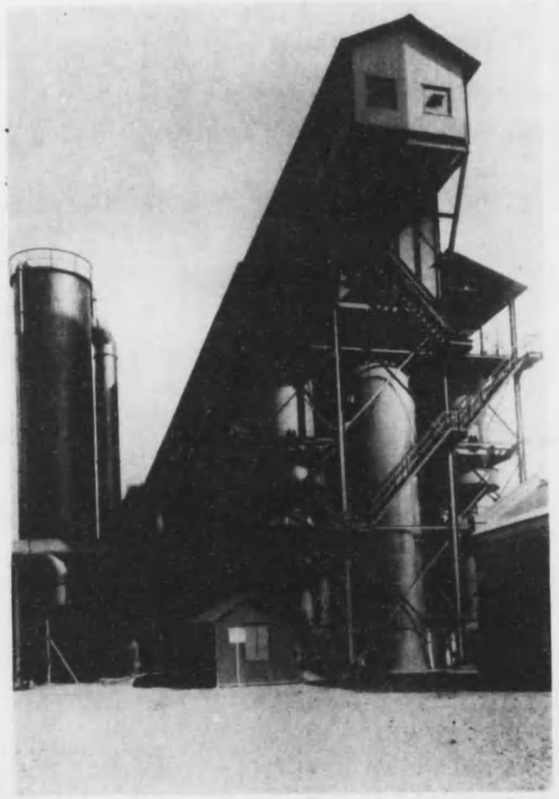
撫順の油母頁岩層

撫順炭礦には多大の油母頁岩を有して居る此の油母頁岩といふのは所謂オイルシュールで、即ち炭層の上磐の瀝青質であつて燃油工業の原料である、で此の埋藏量は五十四億トンと言はれて居る。

此の油母頁岩が發見されたは明治四十二年頃で、爾來研究を累ね重油抽出の確信を得昭和四年内熱式乾餾法による工場を完成した一ケ年の生産豫想は重油約六萬九千八百トン粗パラフイン約九千四百トン、硫安約一萬八千二百トン骸炭約四千九百トンである。

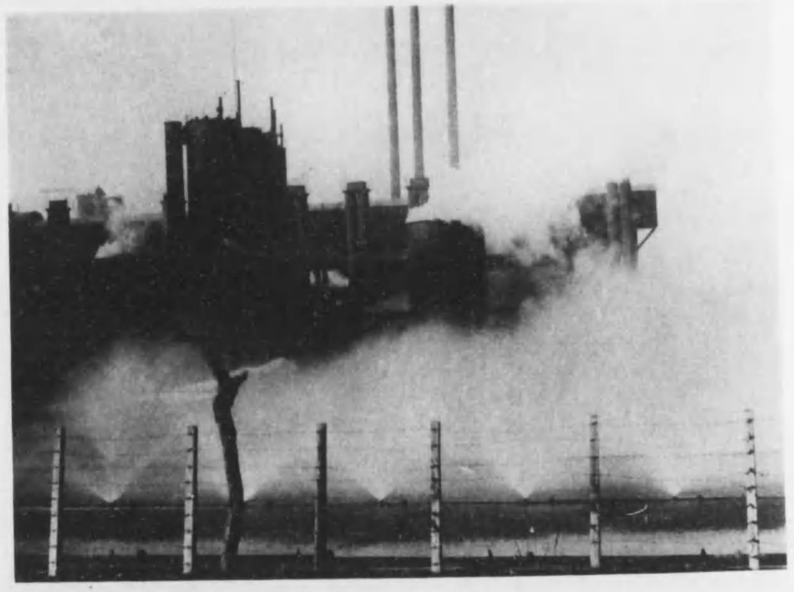
尙此の油母頁岩は將來國防燃料として重要なる使命を帶びて居ると言はれて居る。

寫眞は油母頁岩の工作狀景である。



撫順の粗惡炭處分

撫順炭礦にモンド瓦斯發電工場といふのがある。これは粗惡炭を最も有利に處分する方法として設けられた工場である、源來撫順炭は窒素分に富むで居るので此の窒素分をアンモニアに變化させて、硫安とタールをとる裝置である。瓦斯は完全に燃燒して電力を得坑内の原動力に自給してゐるのである。



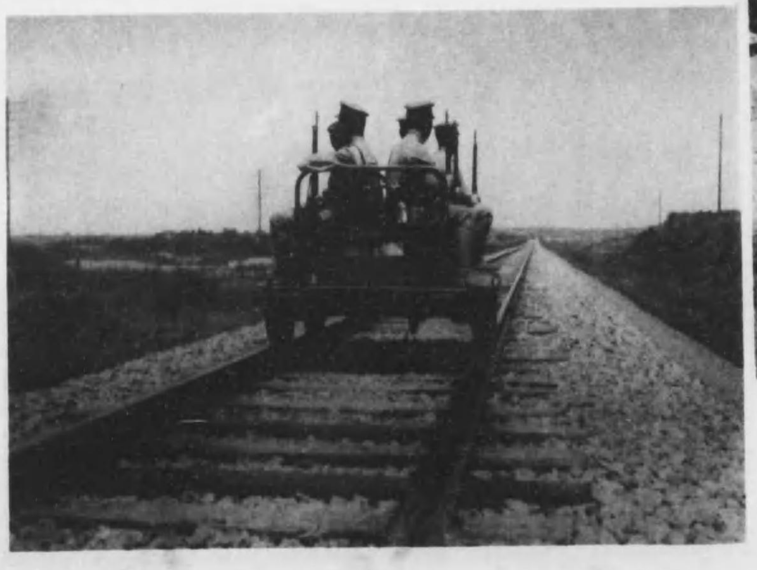
內蒙古の入口四平街驛

滿鐵本線、所謂連長線の一驛たる四平街驛は東部內蒙古の入口であつて、當驛で四洮線が連絡される、鄭家屯、通遼、洮南へ至るにも茲で乘換へ、更に洮南から洮昂線によつて齊々哈爾に出られるのである、內蒙古の物資が滿洲に致され、滿洲の資物が蒙古地に送り出さるゝにも、總て此四平街驛で連絡される。此の交通至便な當驛は元荒原中の一小部落に過ぎなかつたが、如上の交通によつて漸次發展し、更に四洮線の開通後は著しく擴充した都市と化した。

寫眞に見る驛前の中央大路が市街の主道で圓形の大廣場があり西場には瀟洒な公園がある。尙當驛は蒙古開發上には將來輕からぬ命を有する重要驛である。

巡察する鐵道守備隊

滿鐵全線に亘つて日本の鐵道守備の軍隊が配置されてあることは何人も知つて居る所であるが、是等軍隊の巡察勤務は、決して樂な容易なものではない。人の知らぬ勤勞と困難とが伴ふのである。如何なる風雷、雨雪の日でも、如何なる激暑酷寒の夜でも文字通りの不眠不休で其の任務職責を完ふしなければならぬ。然なきだに不法行爲を敢てして顧みない不逞の徒が常に鐵道沿線に出沒するに對して、是等の妨害を未然に防ぐのは蓋し鐵道守備隊の仕事で、其輕からぬ任務の程は察せらるゝのである。



物騷な設備ある宿舍

るす接に景光いなでかや穩はに代時の和平 。とく行に近附街平四てぎ過を驛諸の滿鐵 。原開
思 。るへ興をじ感な騷物にらかる見 。で家住るあてれらけ付取が眼銃にどな舍宿の驛小はれそ
騷物はにんら然てし果 。うら有でのもたれさ殘らか時當たつ在に下治の國露が遷此はれ是にふ
。うらあでるなとつ一の草り語の洲滿ものるす接に景光ふい斯が人旅 。るあで物念記な

開原の大豆囤積

開原は滿鐵本線の一驛にて相當繁榮して居り、開原大街には邦人の商店多く掏鹿大街には支那商店が櫛比し、市街の南端には糧棧が多く集まつて居る。糧棧は三十餘各城廓の如き塀を周らしその院内には數多く囤積を有して居る、囤積一つには貨車の三車乃至五車分の大豆が入つてゐる。

殊に大豆の出廻り期なる十月から翌年の三四月頃迄は最盛期で一日四千車の車馬が地方から絡繹としてこの開原の市街に集まつて來て、街路の交通は殆んど遮斷されんとするに至るのである。この光景に接しては全く「特産物の市街」「大豆の都會」であるといふ感を深くする。

寫眞は所謂囤積なるもので、高さ一丈六尺直徑十尺位アンペラ圍ゐの急造貯藏庫で、無論風雨にも耐えられるのである。

苦力の生活

支那を能く理解して居る人は曰ふ、支那人には底力のある悠久性を有して居ると。此の故に支那の苦力は辛抱強い。彼等の驚くべきは體力と勞役、とである、彼等は普通人の耐ゆべからざるに耐へて居る。最低限度に於ける食糧の保證さへ與へられたならば決して多きを求めない。且つその勞銀も驚くべき低廉である、常備苦力の一ケ月の給料は僅に五圓以下である。そして彼等の勞働時間は一日優に十五時間であると云ふに至つては更に〳〵驚くの外はない。

寫眞に紹介した苦力は滿鐵本線の開原驛附近に見かけものである。

因に、滿洲に於ける苦力は無論勞農階級のもので、之が操縱は大きな一種の社會的問題であると識者間には言はれて居る。

羊を追ふ農民の來往

別項の說明にも記す如く昌圖は粟の特產地であるだけに到るところに百姓の往き來を見る。土地の特徵とも謂ふべき楡の木蔭に、判然と定まつた道路も設けられて居らぬ雜然たる支那街には、寫眞に見る如き農民が悠々と羊を追ふて來往するなど、如何にも田舍らしい氣分が感ぜられる。

因に、昌圖の城內は粟その他特產物の市場であるから、約六十の糧棧がある。驛の西北、連岡の上に見ゆる鉢卷山は明朝時代の墩臺であるが、日露戰役の際我軍の展望地點となつた所である。又驛西貳拾八町を距つた山上には、日露戰役に於ける我が滿洲軍最終陣地記念碑が立つて居る。

楡樹城の名ある昌圖

昌圖は奉天、吉林、蒙古の境界點に當つて居る滿鐵本線の一驛で、遼河の一支流たる昌圖河の流れを繞らした丘岡の中に在る。昌圖は楡の樹が多く繁茂して居るので楡樹城とも呼ばれて居る。城內と附屬地とに分れ城內は附屬の西方二里半の地に在る。昌圖城は明朝時代には遼海衞の置れた地で嘗ては蒙古博王旗が此地を領した事もあつた今より百年前嘉慶年間には墾田を開始し漢人の集住するもの漸次增加し今日の發展を見るに至つたとの事である。

附屬地は元一寒村に過ぎなかつたが鐵道開通以來急激に開けた。當地は又昌圖粟の特產地として知られ、良質で朝鮮へ多く輸出される。

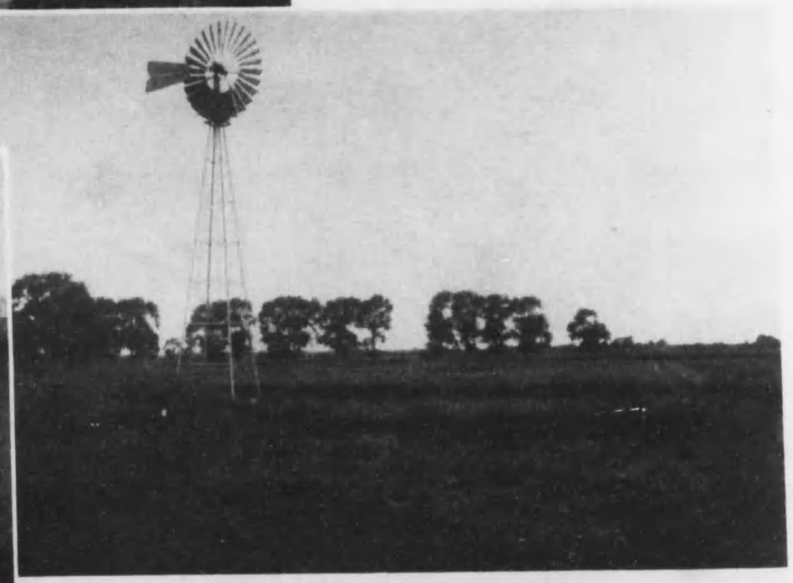
寫眞は城內一部の風景である。不規則な市街を馬蹄形に深い地隙を圍らし、夫れを利用して公園が設備されて居る。

發達せる公主嶺の支那街

公主嶺は滿洲本線中の主要驛の一つで、其地勢も南滿と北滿との境界を成し、海拔六百九十七尺の高地であつて分水嶺に立つて居るので、其町は懷德から伊通に通ふ地點であるから、是等の各地から特產物の出廻り期は其出荷量は相當多く滿鐵線中の第三位と言はれて居る。斯いふ土地であるから其支那街は如上の資源を控へて居るだけに頗る發達して居る。最近の調査によると支那街の支那人人口は九千七百九十七人で、商人中には巨商が少なからず居住し繁華を極めて居る。

公主嶺附近の部落

公主嶺の其地名の由來は、同地の北方八支里に在る墳塋・公主陵に因み、之れに其地點が分水嶺であることをも加味して名付けられたのであると言はれて居る。以前は人家も極めて稀な一寒村に過ぎなかつたのが、露人が東清鐵道を敷設した以來漸次發展を見たのである。此附近の部落には、今も寫眞に示す如き原始的な生活狀態の住家を見かける。之に依つてもその一寒村當時の面影が偲ばれるのである。



大規模な農事試驗場

公主嶺の農事試驗場は大規模なもので、地勢も南滿と北滿の境界を成し、海拔六百九十七尺の高地であつて分水嶺に居る。其町は懷德から伊通に通ふ地點であるから、是等の各地から特產物の出廻り期は其出荷量は相當多く滿鐵線中の第三位と言はれて居る。斯いふ土地であるから其支那街は如上の資源を控へて居るだけに頗る發達して居る。最近の調査によると支那街の支那人人口は九千七百九十七人で、商人中には巨商が少なからず居住し繁華を極めて居る。

大規模な農事試驗場

公主嶺の附屬地には滿鐵經營の大規模な農事試驗場がある。當場では滿蒙特産物に對する改良試驗は素より馬、牛緬羊、豚等の改良に就ても、多大の努力を傾け、着々偉大なる功績を擧げて居るとの事である。

當試驗場は驛西四町の地點に在つて、面積四千四萬坪、我國には類を見ざる大規模なものである、そして敷地の大部分は作物試驗用地と放牧及飼料作物用地に充てられてある。門前一町の間はドロの木の大並木で美觀を呈し、各研究室、溫室、標本陳列室等あり、更に離れて馬羊豚の畜舍があり廣場には緬羊が放牧されてゐる。

地名の因を爲す公主陵

滿鐵沿線の公主嶺驛は海拔六百九十七尺の高地で分水嶺に立つ町で、南北滿洲の境界を成す地勢である。

而して此地が公主嶺と稱せらるゝ因由に就ては古い歴史が之を物語つて居る。驛の北方八支里の地點に低く起伏した丘陵の間に古廟が存して居る。其の背後には蒙古帽にも似たると思はるゝ墳墓がある、傳ふる所によると此の古墳は嘉慶皇帝の姪に當る齊齡公主の陵墓であるといふ。偖こそ公主嶺の地名は之に由て命ぜられたものだと言はれて居る。

枕木の一墓標

滿鐵線長春驛を距る十八里手前の范家屯驛の驛前には、靜かでさゝやかな公園がある。園内に高さ二間ばかり小銃彈型コンクリート造りの容器を立て、内に一つの墓標が納めてある。是は明治三十八年二月日露戰役の際、新開河鐵橋破壞を企てゝ戰死した我二勇士田村騎兵中尉と望月騎兵の爲めに露軍は黑い鐵道枕木を削つて左の碑名を記されてある。

此處に一千九百五年一月二十九日より三十日に亘る夜間范家屯驛に近き第二百四十七露里橋梁襲擊に際し戰死せる日本軍士官並に下士を葬む靈よ安けくるませ

寫眞はその枕木墓標である。蓋し日露戰史上に一異例とすべき尊き一記念墓標といふべきである。

特色ある街頭の招牌

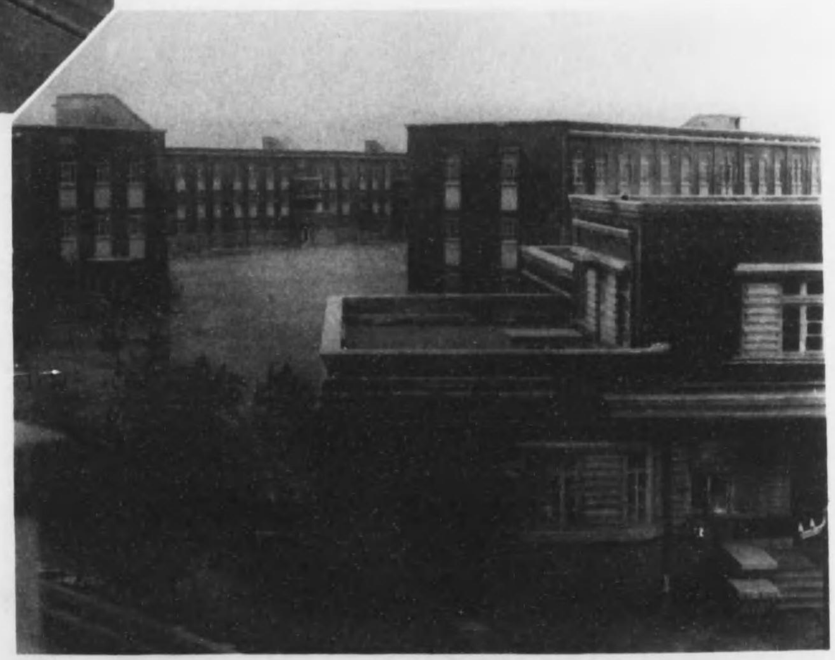
范家屯は元、房家屯と呼ばれたが轉訛して今では范家屯と呼ばれて居る。滿鐵沿線中では有數な特產取引地である。市場は相當活氣を含み糧棧、油房、牛馬仲買店など軒を並べ盛んに營業し殊に馬店などは一ヶ年七千頭の取引が行はれる。概して鐵道西には特產商が多く、鐵道東には商店が多く殷賑を極めて居る。

寫眞は范家屯市街の街頭に見受けらるゝ寶龍と稱する看板の一種で、この異彩ある標識が特產取引商店の店頭裝飾として行人の目を惹いて居る。

獨立守備隊兵營

從來長春には、無論日本の獨立守備は駐屯したが、これが大部隊を收容するに足るべき兵營は無かつたのであつた。然るに昭和五年新たに三層樓の近代的兵營を建築して、大部の守備隊を容るゝに毫も差支へなきに至つた。

寫眞は即ち守備隊兵營の光景であるが、見るからに如何にそのモダン振りなるかを窺はしめらるゝのである。



日本の經營に成る長春市街

長春市街は附屬地、商埠地、城內の三部で人口は三部を合して十二萬一千餘と言はれ、その內附屬地居住の日本人は約一萬と稱せられる。

寫眞は長春市街の光景で、その地域廣く、道路も整然、立派なる建築、施設、すべて是れ日本の手に依て經營されたものである。

斯くの如く、文化的新都市が計劃され、堂々たる近代的建築の出現を見たのは全く日本の力に依るもの、仍て以て長春將來の發展も豫知し得らるゝのである。

國際的な長春公園

長春公園は長春に於ける見るべものゝ一つとして數へられてゐる。滿鐵會社の經營に係り面積十萬二千坪を有しその廣大な境域には、樹木茂り、大なる池水あり、清楚閑寂の景趣に富むと共に、一面には花壇、溫室、噴水、小亭の設備があり、且つ兒童を喜ばしめる熊、猿、鹿、狼、兎小禽などの檻が配置され、頗る理想的に遺憾なく設備が整つてゐる。園内の池は夏季はボートを浮べ冬はスケートが盛に行はれ日、支、露の三國人が常に逍遙和樂し寃然國際的公園としての特色を持つてゐる。園の正門には等身大の女神像が平和を象徴して立ち、園内には大正八年七月實城子事件に仆れた人々の爲めの誠忠碑が建つてゐる。

糧棧街の光景

長春は滿洲特産物の出廻り市場として南方に於ける大連に對して北方に於ける大市場である。寫眞は長春取引所の附近に建ち並ぶ糧棧街の光景である。その大路、小路は大連にも見ることの出來ぬもので、この長春の糧棧街で始めて見得る景觀である。

寫眞に見る滿鉾型の陸屋根つゞきの長屋にかこまれた院子の壯大な光景は、冬期に於ける特産物出廻り期の如何に盛況であるかを想像するに充分である。

三大線聯絡の長春驛

澄澈たる意氣の下に生れた新國家、滿洲國の國都所在地たる新京の關門長春驛は滿鐵本線即ち連長線の終點として、將に滿鐵、東支、吉長の三大線の聯絡驛として國際的の觀ある大驛である。

當驛は場所に於ても時間に於ても完全に已上の三線が聯絡するのであつて各方面を志す旅客は頗る便利に乘車し得られる。當驛より吉林へは三時間ハルビンへは八時間奉天へは五時間である。

長春は中部滿洲に於ける最大の農產市場であつて物資の集散　び中繼が旺盛である故、從つて商業及び金融の地方的中心となつて居つて、當驛發送貨物の量多大にして中部滿洲特產の一大出廻り驛たるのみならず、亦實に東支南滿洲線の聯絡運輸の楔子となつて居るのである。

長春の城内

長春は今より百餘年前、清朝の道光五年に長春廳を此地に置かれたのが創始である、後同年匪賊防備の爲め市民が醵金して周圍十支里不規則な長方形の城廓を築造し、東、西、南北、東南、西南北、東北西北、馬号の九門を開いたのであつたが、今は其城壁の大部分は破壞し、城としての區劃は殆んど不分明となつた。

城内の主道は北大街南大街で、其には大商店並び各種の看板が揭げられ人馬の往來が烈しい。又城内には道尹公署、縣公署を始め支那の諸官衙學校等が多くある。

南門を出ると伊通河に架した木橋を渡る橋の袂に關帝廟の塔が聳立し、其下流には魁星樓の遺物などが在る。

滿鐵線中有數な公園

長春の附屬地公園は別項說明中にも記したるが、其の總ての設備といひ、景趣といひ、公園としては實に理想的であつて、且つ玆に逍遙和樂する日、支、露人の朗らかに見受けらるゝ快感は事實國際的公園である蓋し滿鐵本線中の有數な名公園として推稱するに價ひするものである。のみならず、新國家滿洲國の國都所在地となつた長春の公園としても決して恥しからぬものであると言ふべきである。

寫眞は別項長春公園の光景とは別の方面より撮影せる景趣である。

露國式田舍町の寬城子

寬城寺は長春の北西近くに所在する小都邑で、靜かな森に包まれた田舍街であるが東支鐵道の南部線の終端で、此玆から僅かに三粁の支線が延びて長春驛に連絡し、完全に東支鐵道と滿鐵と握手して居るのである

以前は相當に活氣を呈した土地であるが、長春の發展に勢力を奪はれて、今は頗る寂れ行き長春郊外の一部として見られてゐる。町には鐵道倶樂部、露西亞小學校等があり、露國式の田舍町として一種の興味ある土地として異色を示してゐる。

炭鐵兩有の本溪湖

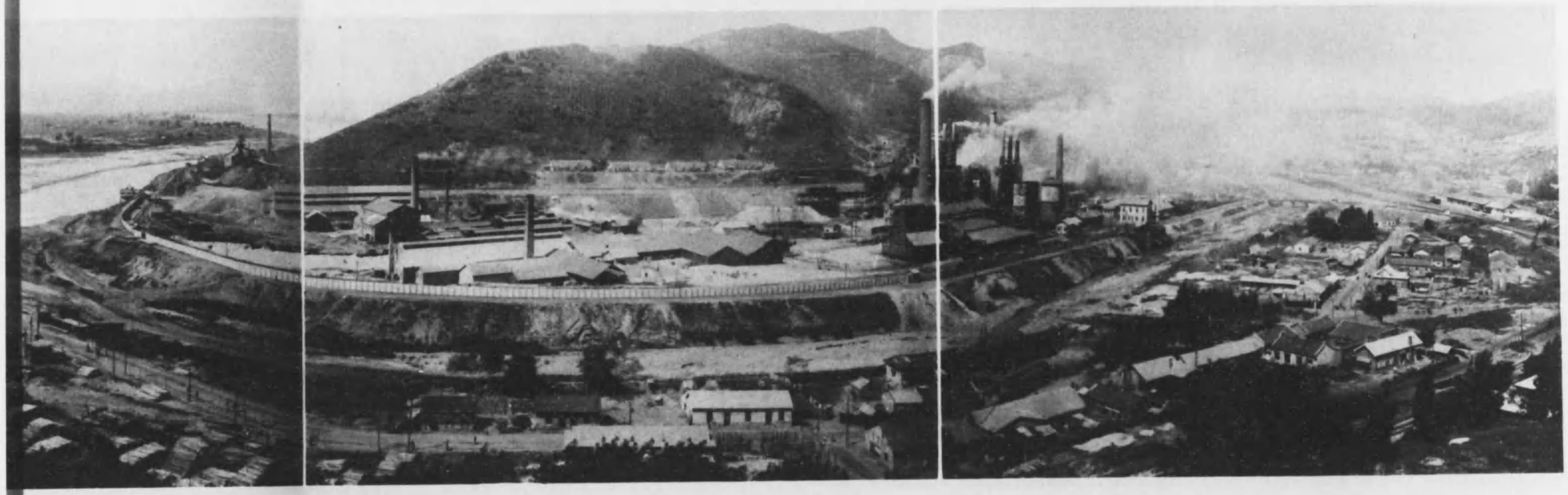
滿洲に於ける有數の工業都市として知られて居る本溪湖は奉天、安東の中間で、奉天より七十餘哩、安東より百廿四哩に位置し、石炭約四十萬トン、撫順に亞ぐ廣大なる炭層を有すると共に、約三百萬トンを埋藏する廟兒溝鐵山を附屬として、炭礦鉄鐵兩つながら有して居る。安

炭鐵兩有の本溪湖

滿洲に於ける有數の工業都市として知られて居る本溪湖は奉天、安東の中間で、奉天より七十餘哩、安東より百廿四哩に位置し、石炭約四十萬トン、撫順に亞ぐ廣大なる炭層を有すると共に、約三百萬トンを埋藏する廟兒溝鐵山を附屬として、炭礦鉄鐵兩つながら有して居る。安奉線の鐵路に方つて居然として構へる鑛鑛爐は年額約八萬トンの鉄鐵を產出して居る。

本溪湖の工業地としての存在は相當に古く、炭礦明時代に於て開發され、清朝の乾隆年間に於ては龍章標と稱する採掘權を發給して、盛に石炭を採掘し、咸豐、同治の年間には最も旺盛を極めたるが、日清、日露の兩戰役、又は馬賊の被害等の爲め事業振はず、其結果中止を見るに至つたのであつたが、明治三十八年十一月、大倉組が是に着眼して着手する事となり、翌三十九年一月開坑式を擧げ、爾來幾多の曲折を經て更に製鐵事業をも經營する事となり、明治四十四年中日合辨組織の下に本溪湖煉鐵公司と命名して有限の會社となつたのである。

左に煉鐵公司の概要を記せば資本金龍銀七百萬圓、從業員日本人二百五十人、支那人六千五百人、石炭の礦夫は千三百三十五萬坪、稼行中の炭層の厚さは三尺乃至五尺、亞無煙炭である推定埋藏量二億五千萬トン、採掘年額六十萬トン。又製鐵事業



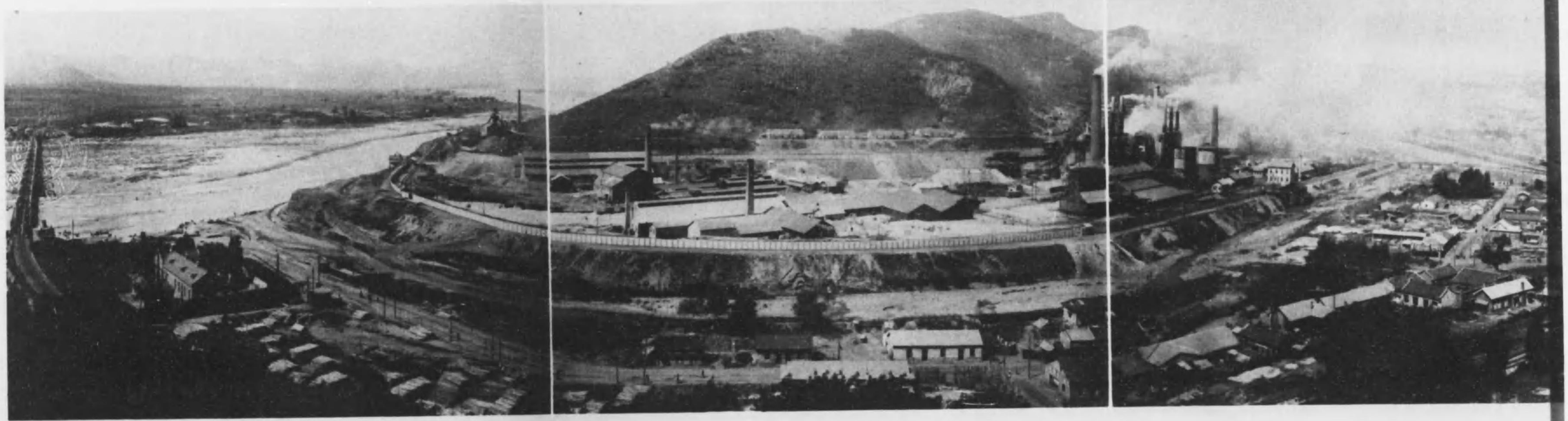
安奉線に王座を誇る本溪湖

炭鐵兩有の本溪湖

滿洲に於ける有數の工業都市として知られて居る本溪湖は奉天、安東の中間で、奉天より七十餘哩、安東より百廿四哩に位置し、石炭約四十萬トン、撫順に亞ぐ廣大なる炭層を有すると共に、約三百萬トンを埋藏する廟兒溝鐵山を附屬として、炭鑛銑鐵兩つながら有して居る。安奉線の鐵路に方つて居然として構へる煉鑛爐は年額約八萬トンの銑鐵を產出して居る。

本溪湖の工業地としての存在は相當に古く、炭鑛明時代に於て開發され、清朝の乾隆年間に於ては龍章標と稱する採掘權を發給して、盛に石炭を採掘し、咸豐、同治の年間には最も旺盛を極めたるが、日清、日露の兩戰役、又は馬賊の被害等の爲め事業振はず、其結果中止を見るに至つたのであつたが、明治三十八年十一月、大倉組が是に着眼して着手する事となり、翌三十九年一月開坑式を擧げ、爾來幾多の曲折を經て更に製鐵事業をも經營する事となり、明治四十四年中日合辨組織の下に本溪湖煉鐵公司と命名して有限の會社となつたのである。

左に煉鐵公司の概要を記せば資本金龍銀七百萬圓、從業員日本人二百五十人、支那人六千五百人、石炭の礦夫は千三百三十五萬坪、稼行中の炭層の厚さは三尺乃至五尺、亞無煙炭である推定埋藏量二億五千萬トン、採掘年額六十萬トン。又製鐵事業は廟兒溝鐵山の鑛石を主として使用し銑鐵の生產年額十二萬トン、煉鑛爐四基。尙石炭、銑鐵以外に、セメント及耐火煉瓦の製造をも行つて居る。



安奉線に王座を誇る本溪湖

本溪湖山の龍洞

本溪湖の一名所として知られて居る龍洞は本溪湖市街を西に見て本溪湖河に沿ふて山に達した所に在る、洞窟は石灰岩から成つて居つて洞内には清冽な水を湛へて淵になつて居る。此の龍洞の洞前には觀音の像が安置されてあるが、此の觀音像は所謂「有求必應」といふ道教崇拜の迷信連中は、如何なる願望でも叶へて貰へるとばかり像前に押すな〳〵と群をなして低頭祈願を籠めるので非常な繁昌をして居る。

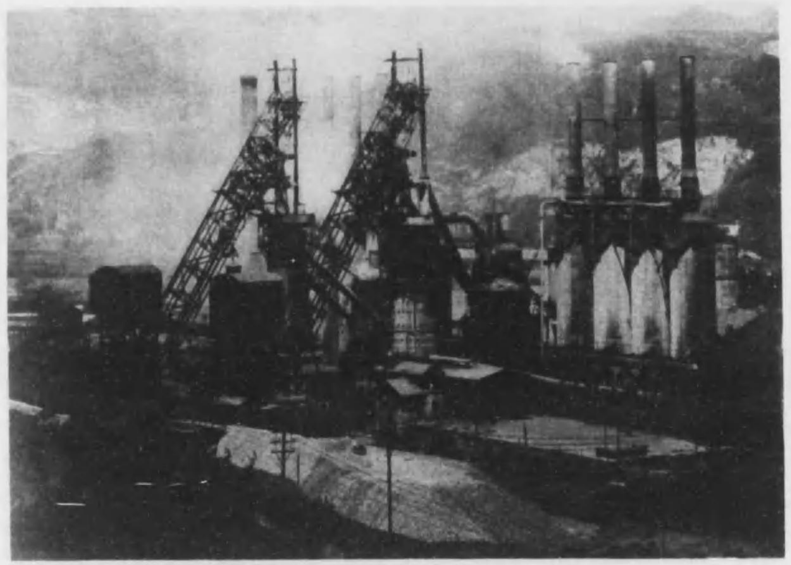
歴史を偲ばれる甕工業

本溪湖は一名を窰街と稱せられて昔から有名な紅窰即ち水甕製造所のある地で西端の一隅に今尚その歴史的の俤を偲ばれる本溪湖の歴史からすれば尠なからず光景で大小精粗自在の製造所の揚寫は眞に土質と炭鑛との出來る石炭鐵と共に陶業も亦此地の歴史的に一つの興味である。

水甕製造の質は、即ち水甕の一部分を出すことが出來る。

欲する優特の作品を出すことが出來る。

本溪湖の溶鑛爐



熔鑛爐は製鐵業の權威を如實に示すもので其の如何は製鐵業の消長には深い關係を持つて居るものである。本溪湖が滿洲に於ける炭の都市であると共に、また鐵の町として有數である熔鑛爐は實に本溪湖の一權威として紅蓮の焰をあげて居る四基の灼熱工業立國の王座を示してゐるものである。

此の熔鑛爐によつて生産される年八萬トンの鉄鐵は其の大部分は進歩し、從來我國が瑞典より購入して兵器製造技術に使用する瑞典鉄鐵に比して本溪湖の鉄鐵は遜色がない。

炭鑛都市の支那町

石炭と製鐵との都市たる本溪湖の大部分は勞働者相手の町であることは當然である。本溪湖の山を圍みて生活する約三萬人の支那勞働者で一部落を作つて居る支那市街には雜種の商店が營まれて居るが、教科書や筆墨を商ふ店と、シャツや地下足袋を賣る店とが隣接して居るなど見るからに鑛山生活の情景を領かるゝのである。

宮の原の記念碑

本溪湖より三哩餘を距ちたる地點に宮の原といふ所がある。此地は日露戰役の戰蹟で御奮戰地で遊ばした宮殿下が當時開院宮殿下の御武勳を記念すつて、昭和二年以前の名稱たる福金峯と改めて「宮の原」と呼ぶことになつた。そして御奮戰中の最も激烈であつた高地に、記念碑が建てられたのである。

戰役當時、島村旅團を基幹とする我が諸隊が本溪湖高地に殿下の優勢な敵を受け苦戰日餘連續して危急を逼つた際、宮騎兵第二の攻撃を受け夕刻に及び殿下の旅團は敵の背後を迂回し積極的攻撃を敢て高地に展開し敵を撃退したのである。

河西街の石炭窯

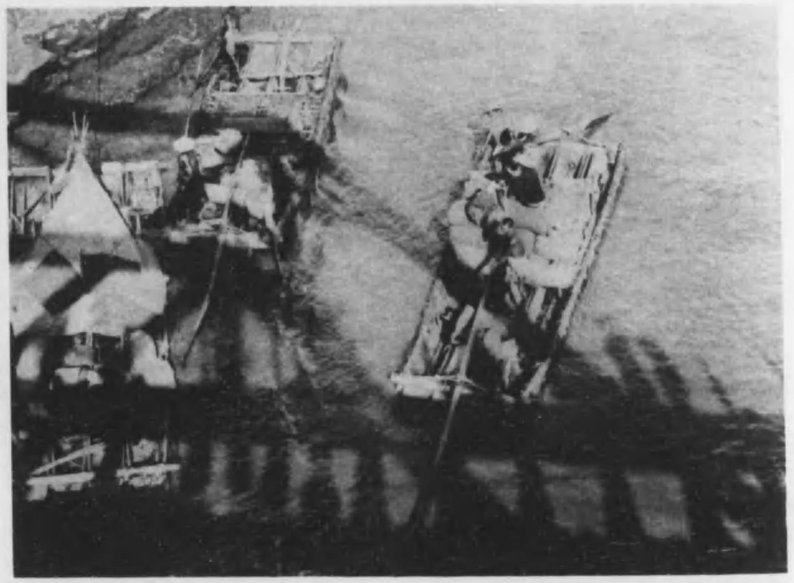
本溪湖全體に於ける石炭の產出は可成り多量な取採に富豪もらか弊下の近附の工業小にも爲が之。居る居てれさ稱總と街西河本溪湖の山々は岩灰石の露出が處處に見られる。斯ふ點に工業都市の情景を眺めて居るあでのるれさ用使に爐鑛窯て總はれそ。てれさ取採に富豪もらか弊下の近附のこ又。るあにか近手に富豪が料原く如のく斯。るあで量多りな可は出產の岩灰石るけ於に體全湖溪本。るあでいるれさ取看を景情の市都業工もに點ふい斯。るれさ載刺さ

筏と舟で賑ふ太子河

太子河は同所から牛心島に至る滿城鐵道の起點で、驛は太子河の左岸に在る。驛と同名の此河は舟と筏が頻繁に流れを上下して居るで其の河舟は往きには筏に乘りて行き、歸りには川に舟を巻艘ち連結して筏に組み雜穀類などを積載して來るのである。そうして其の積載された雜穀は行く〳〵商取引されるのであつて、河岸には此の河舟を目當に秤を携へた商賈が叫びながら懸引して呼び止めつゝあるのは一種の奇觀である。

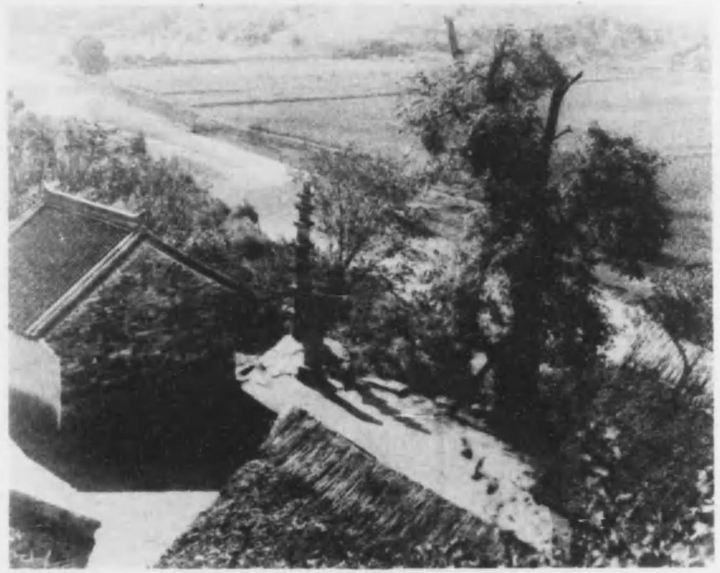
河面を蔽ふ流材

東邊道の奥深く源を發する太子河は、有名なる長白系を控へて居るので年々夥しき各種の木材を吐き出すが、河岸には此の流筏を對照としての材木商が散在して取引に拔目なく營業して居る。此の太子河の流筏によつて運ばるゝ木材は、本溪湖のみにても一ヶ年一千萬才と稱され、筏の數にして四千四五百を消化すると言はれて居る。而て此の木材は主として坑木、薪として滿洲全般に消費されるのであるといふ。



太子河下り

其・とる入に線奉安てき僊に線沿。るあが感の味無燥乾くなと何くし乏に水的較比の河子太に殊。るあでのるすがじ感の園庭大一の洲滿ろた然宛・りあ水・りあ山はに處れそ・り下河子太の夏。るあで快愉も迚は遊舟の夏の河の此・るゆ覺を快爽も最はき如くなり極ゞ變てしつき開つり迫は山の岸兩。る來出が事るす比にり下川津保の國我は爽の此は客旅の道鐵城溪。るゆ覺を味快爽きな方んは言に實くな遠に接應・流奔瀧急景に近に三日浦あたりて車汽を捨て舟ゝて依に舟ゝのもるい多ゝのは理無はのいな。



溪谷の觀音寺

安奉線の連山關と摩天嶺との中間に石河灣といふ一仙境がある、殆んど人煙を絶つて、人の往き來もない溪谷であるが、其處に一宇の觀音寺があつて七層の石塔が建つて居る。斯る人跡稀な溪谷も往時は遼陽、岫巖を經て當時の帝京であつた北京に通ずる要路であつたので、都人の送迎に頻繁を呈した事を思ふと、漫ろに時代の變遷を痛感して轉た今昔の感に堪へないのである。

橋頭の朝陽寺

安奉線の橋頭驛は自然の美に富む水郷で、諸種の設備が整頓し、土地全弊が一大遊園地となつて居る、春秋の散策、夏季の避暑など奉天地方からの來遊者が多い、其の遊園地中、驛に近い白雲臺を降ると其處に朝陽寺がある、此寺は日露戰役の際關院宮殿下が御駐泊あそばされた由緒があり、門前には其の紀念の導標が建てられてある。寺内左隅の建物は宮殿下の御部屋に當てられたもので、今は歴史的紀念として當時を偲ばるゝのである。

陳相屯の塔山

安奉線の陳相屯驛の東北、沙河の流れを隔てて大陳相屯村の後方に、全山青芝に包まれた傾斜の山がある。塔山と稱する、其の優婉な山容は恰も我が三笠山に似て居る、此山は異名を龍虎山と稱した。山麓には釋迦三尊を安置せる安寧寺があつて其佛塔が山上に聳え立ち汽車の窓から望見される塔は煉瓦で六角七層、高さ五丈、塔は唐時代の建築との事である。此塔あるを以て名高く、山の名に呼ばれて居る。此塔は冬期は好個のスキー場として歓迎され全滿洲隨一のスキー場としてスキヤーヤーに謳ばれて居る。

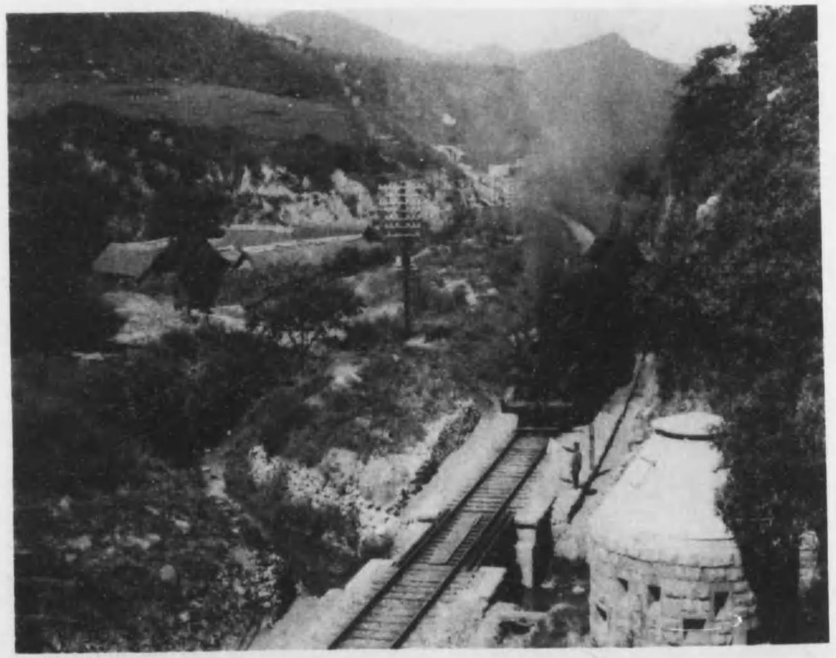
欠

安奉線の山色水光

安奉線は安東を起點として奉天に至る百七十一哩の鐵道である、其間に於ける大小停車場は總て二十七驛であるが、全線に於ける平坦な地區としては僅に奉天石橋子間の三十餘哩で、其の他は長白山系の山岳溪谷地である。それだけに又途迎する驛々の山色水光は、景趣佳絶で、車窓の一瞥にする乘客の旅情を慰むるに足るのである。

そして分水嶺たる郝家堡驛を境として鐵道は勾配を以て徐ろに上りては、又徐ろに下る、此の間に如何に山多きかは、其の大小の隧道が二十四箇所に上り、又如何に河川の多きかは、其總數二百五の橋梁に接するに見ても知ることが出來る。

因に、山地線百哩に對し四哩毎に一隧道を有する割合で、其延長二萬六千五百七十九呎であるといふ。



細河畔の香磨

安奉線の細河々畔は風景の勝地として知られて居る。この勝地に自然の風趣を背景として一種の風流な生産を營業されて居る。それは線香の材料となる木粉を挽く業で、之を香磨と稱する。

香磨の營業者は、此の細河の河沿ひに四十餘軒も有る。そして是等の香磨はその營業の設備として水車を横轉し、その動力は直ちに小屋の内の石臼の心棒を廻轉する裝置になつて居る。香木の材料としては主として楡の皮、柞樹、柳などであつて、就中楡の皮は最上品とされて居る。

景觀に富む連山關附近

安奉線の連山關は車窓より眺むるも、其の山隘を擁して地形の凡ならぬを見るのであつて、其附近も亦頗る景觀に富み、奇巖、松翠、形容の美を盡すも及ばざる觀がある。そうして遠く摩天嶺に續く連山は一層風景の勝を加ふるのである。

連山關は往時は東關と稱し、鴨綠江、遼陽間に於ける八箇所の關の一つで清朝に至つて關を廢して驛站を置く事となつた。其後明代の進運と共に驛站の數も增加して十四箇所となつたが、連山關は其の中央地點にあつて、重要視されたものであるといふ。

雪の連山關附近

連山關は滿洲の輕井澤とも呼はるゝ地で、分水嶺に近く海拔一千百尺、山巒に圍まれ細河の清流に沿ふて居るので夏季は涼しく、釣魚、水遊びなどには好適の地であるが、冬季は高地だけに積雪甚だしく、凍結した路上の雪は、歩けば蹌々として音を立てゝ軌しるのである。白皚々たる雪に包まれた冬の山々、見渡す限りの銀世界の中を街へと稼ぎに行く勞働者の姿も亦是れ一幅の畫圖裡中の趣きがある

因に、連山關の山間には、鬼臼蹶、鼠壽草、野生芍藥、梨、杏などが多く種々な高山植物もあるので、小學生が夏期に於ける山間登落地として玆を選ぶのである。

箱根の嶮に似た摩天嶺

安奉線の連山關驛の西方三里三町、遼陽街道を扼して居る峠がある。是れが摩天嶺である。此山は我箱根の嶮に頗る似て居る、所謂九十九折で、越ゆるには中々骨が折れる。明治二十七八年の日清戰役、同三十七八年の日露戰役の戰場として名高く知られて居る山である。日清役には黑龍江將軍が敗兵を收容して鼓を守り、又日露役には鼓を占領した我第二師團に對し露軍のケルレル中將が三十七年七月來襲して我軍の爲め擊退されたのであつた。

嶺上に五箇の特立した巖石があるので五峯嶺とも稱せられて居る其嶺に古い關帝廟があり、嶺上には日露戰役の戰蹟碑が建つて居る

古い歴史ある舊連山關

連山關驛の東南十町ばかり守備隊前の街道から村に入ると二十戸許りの小農村がある。其處から下關驛迄代へる。此處は之が舊連山關衝要の地で、昔は鼓門と稱した。明時代には鼓が朝鮮街道を扼した。當時鼓は朝鮮人に賣渡す物は此地で献上した。清朝になつて鼓は停止され、日清戰役後は賣物は悉く朝鮮人に賣渡された。

連山關附近の乘合船

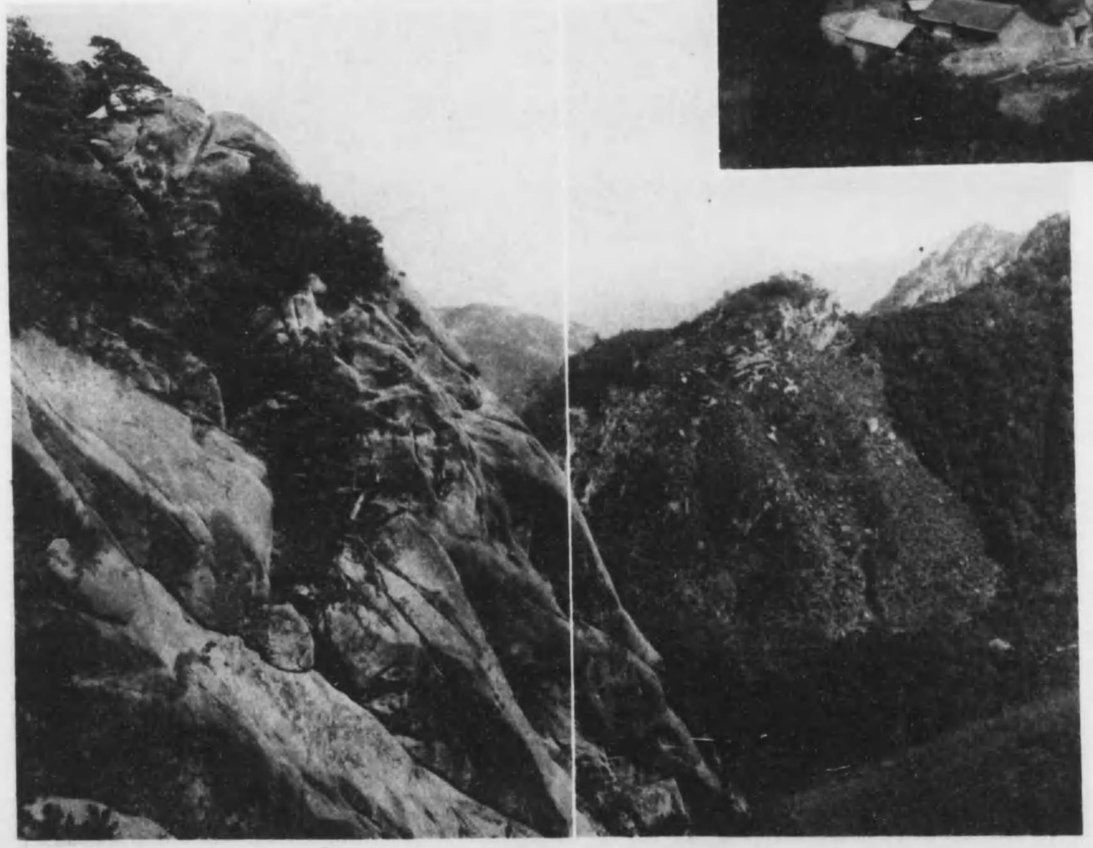
安奉線の連山關附近の或る河に、架設されるべき筈の橋もなく、渡し守が渡舟交通に便して居るが、此渡舟は一年の半だけで、冬になると河面は結氷して渡舟がなくなる。此渡舟を少の乘合客は大低そこの里人であるが、年末には自由に交通する。此里人等は渡守に賃乘し集めて渡守にお禮をするのが慣つて斯いふ土地に於てこそ、始めて斯いふ朴なる風俗を見られる。

鳳凰山中の紫陽觀

鳳凰山は安來線鳳凰城驛の南方に聳へて居る。驛より半丁許りで登山口に達する、此の登山口は山中寺觀めぐるの道である。寺觀は數多くありて總てをめぐらんとするには優に半日以上を要するが、寺觀中の主たる紫陽觀のみならば三四時間にて往復する事が出來る。

紫陽觀は鳳凰山の主寺で三官廟と云ひ舊時は大寧寺と稱した。天官地官水官の三官を正面に、左方には藥王、右方には觀音を祀られてある。本堅の外に道士の居る庫裡があり、山門前と廟前とに二本づゝの五葉の松が亭々として聳てゐる。

鳳凰山は高さ九百三十米突、その奇岩怪石は悉く花崗石から成つて居る。花崗石切場のある登山口の村は寺觀めぐり專門の道で、左の裂谷を傳ふ道が一般的の道である。



雄大壯觀の裏鳳凰

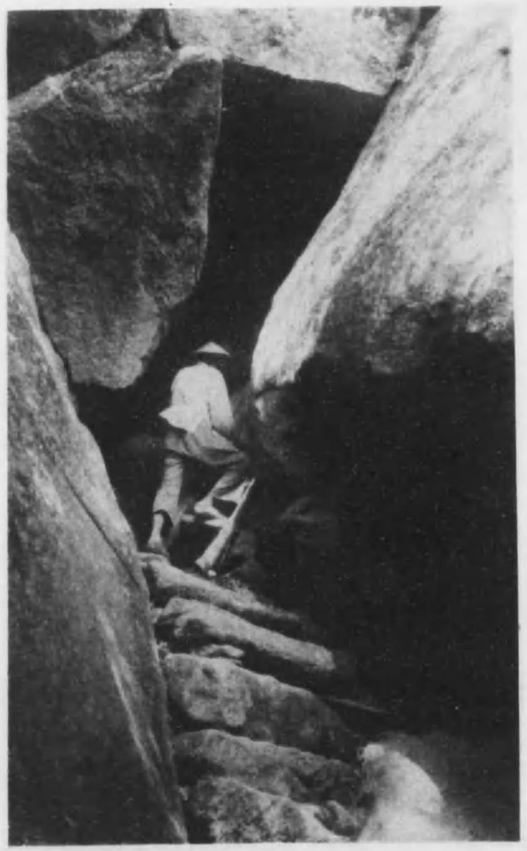
鳳凰山の山嶽美と、細河の峽谷美とは安來線に於ける双對の絶勝とされて居る。特に鬱蒼たる樹林の間に奇巖怪石の横はる鳳凰山の雄姿は峽谷美に比して重味を感ずるのである。而して鳳凰山の景觀は之を其の表面より看るも良いが、更に其反對の裏鳳凰に至つては一層雄大にして格別の深みあるを覺え漫ろに人を壓するが如きものあるを感ずるのである。

鳳凰山上の忽比烈塔

鳳凰山は安奉線の鳳凰城驛の南方に聳えて居る。此山の頂上近くに三層石造の一小塔がある、俗に之を忽比烈塔と呼ばれて居る傳說に據ると往時忽比烈が日本遠征の際に此處で勢揃ひを爲したので、その記念に建てられたものであると云ふ。勿論正確な史實は明らかでない。此山は千山や大和尙山のやうに嶮嶮でなく婦女子にも樂々と登山が出來るのが此山の特長とされてゐる。從て此塔も多くの人に知られて居るのである。

大巖石には蔽れた洞窟

鳳凰山の忽比烈塔とは反對の方角地點である觀音閣の下に一つの洞窟がある、洞上は大巖石に蔽はれ、其入口の巖には『佛之洞天、我之宇土、唯佛與我、長此修古』の十六字を刻まれてある。而して其の洞窟を二個の木梯によりて登り潜れば、如何なる酷熱の盛夏でも、冷氣五體に泌み亙りて永く耐ゆべくもあらぬ程に縮みあがるのである。しかも此の洞窟の胎內くゞりは、道敎信仰上から來たもので、是に依て甦生し長壽を得ることを意味されて居る。



高勾麗時代を語る古城址

安奉線鳳城驛の次にあるのは高麗門驛である。此驛の西北二十町の地點に存在する大石城は高七八尺の城壁で、一門の東門迹と傳へられ迹がある地是れこそ古勾麗時代遺のし城門の係る迹であるが高句麗石城城壁の一部で、西門と呼ばれる地僅に高句麗時代の一部である。此城は山頂にあるのは著しく目立つ巨大な石城で、高句麗時代の古城址である。

鳳凰山の登山口

黄錦紅繡、紅葉の美觀を誇る鳳凰山の眺めは、全滿洲の風景を玆に集めたかの觀があると言はれて居る、山は餘り難嶮でないので秋の散策を玆に節曳くものは尠くない。登山口にさしかゝると、風磐耿々としてきすび、清流淙々として響くなど、分け入るに從つて次第に山氣を深めて自然の秋味を感ずる。且つ山中のところ〳〵に懸崖を磨して記されたる文字などに接すると一としほと登山氣分に浸たる思ひがする。

懸崖の觀音閣

鳳凰山の觀音閣は、見上ぐれば戰慄を禁じ得ざる絶壁懸崖の岩角に建てられて居る。其建築は眇たる小閣ではあるが明代禪林を修した古刹と傳へられて居る。この觀音閣の下には一大洞窟があつて、其の洞窟を經て玆に達するのである。

試みに觀音閣の前に立つて眼界を展ぜんか、優に鳳凰山の半面を展望することが出來る。

一とたび踏み外せば絶壁の懸崖幾十丈の深き溪谷に墜落すべき際どい危險の位置に於ける建築を見ても奇を好む支那人の習性を思はるゝのである。

景觀美に富む高麗山嶺

高麗山は鳳凰山脈の一部で、寧ろ嚴密に兩者を區別することは六ケしい、即ち一帶連亙の山脈として起伏して居る、而かも其の山嶺に攀ぢ上りて兩山を比較して打眺むるに於ては峻嶮尖鋭に富む景觀の美は、高麗山の方が多分の優點を持つて居るやうに思はれる。

斯く觀取すると同時に、玆に築かれたる高麗城の如何に要害堅固で、克く其の天嶮の地形を利用し得たるかを思はざるを得ぬのである。

鳳凰城内の市街

安奉線の鳳凰城驛から、東北約十町、鳳凰山の麓に城壁を周らしたのが鳳凰城の市街である。背後には定軍山を負ひ、市街は城内と城外の商業區とから成つて居る。城壁は明の成化十七年に始めて築造されたもので、周圍三支里、南方に一門あるのみであつたが清の康熙二年重修して現存のものとなつた。障壁の高さは二丈、東と南の二門だけ開いて居る。城濠は既に無く城壁は所々破損してゐる。

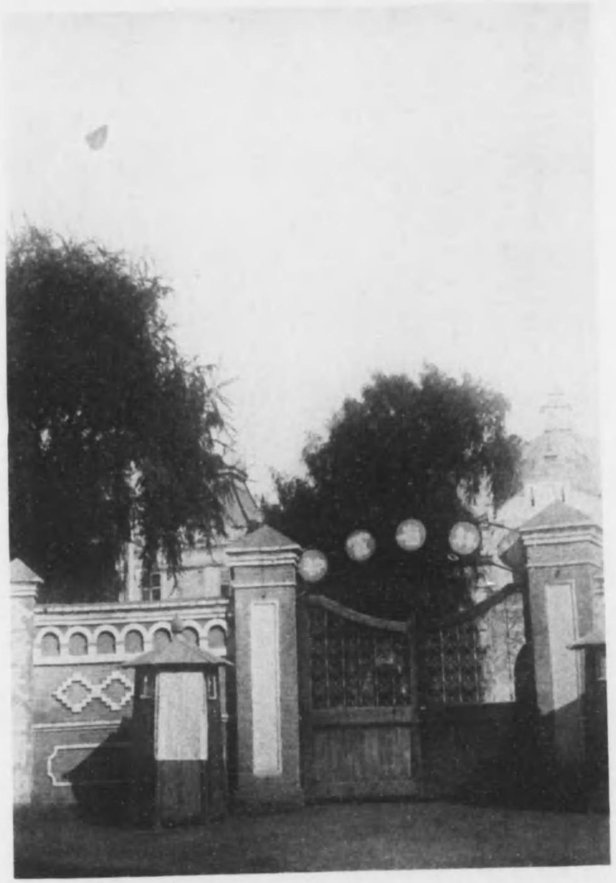
此地は古來滿韓兩民族勢力接衝の重要地點で、支那が朝鮮半島の咽喉を扼して高麗民族を支配した歴史は此の街の到るところに存する古き落付きに徴しても頷かれる。

高麗山の將軍腰掛岩

鳳凰山脈中の高麗山附近には、今も昔の史蹟が殘されてある高麗門驛の西北二十町の地點には大石城の高麗城址がある、高さ七八尺の城壁の一部と東門迹、西門迹と稱するものもある。而して此城の守將であつた高麗將軍の腰掛岩なるものが附近の谷間に今尚ほ存在して居る。岩には尻の形と足の形とを印した凹みがある。寫眞は即ち其の腰掛岩で、英雄崇拜の精神が因み深き城址附近に景物として殘されて居るのも深き興味を曳ゆる

處女の祈禱

滿洲の心臟、北滿の歡樂鄉と云はるゝ哈爾賓は、嘗ては露西亞が多大の努力を傾けて建設しただけあつて殷賑な文明都市としての誇りを示し、殊にキタイスカヤ街の如きは宛かも日本の銀座を想はしめると云はれて居るが、其の酒と女とに暮れては明け、明けては暮れる歡樂の都を、程遠からず距つた郊外には存外質朴な、神聖さを見出すのである。寫眞はハルビン附近に於ける處女の祈であつて其の表徵として建てられた標木の如何に神聖なるかを窺はしめるものである。



吉林省黨部

吉林城は迎恩、福綏、德勝、致和、北極、巴爾虎、新開、朝陽、東萊の九門が開かれ、城壁は河岸を除くの外、三方に繞らされ、其延長七支里、高さ丈餘、幅二尺許り、其形ちに因みて一名琵琶城と呼ばれて居る。城内では河南街、東天街、糧米街、北大街、西大街等が商業區として殷賑を呈して居る。又江岸には木材の筏が多數集まり、江岸の中央には督軍公署及省長公署がある。寫眞は吉林省黨部の光景である。

ハルビン停車場

東支鐵道全線に於ける中央ステーションたるハルビンは亞細亞、歐羅巴兩民族の接衝交錯する國際的な一驛で、ハルビンの重要視される價値の一つもこの點に存するのである。

且つ日本人としては夫れ以外に當驛に對して忘るべからざる深き印象を刻み殘して居ることは伊藤博文公の死である。當驛のホームに立つ日本人は何人も一種の感慨懷古の念を禁じ得ないであらう。

尙伊藤公の死と共に日本人の記憶より去らぬものは横川、沖兩志士の殉難である。兩志士の銃殺されたのは市の南郊で、其處には記念碑が建てられてある。

繁榮なハルビン市街

東支鐵道西部線の終點であるハルビンは滿洲の心臟とも言はるゝ程あつて產業、經濟、交通上、國際都市として典型的である。且つ政治上の反映もありて全滿洲の重心となつてゐる。俗に滿洲の穀倉と稱せらるゝ松花江盆地平野の農產物に對する集散市場たるハルビンは、一方北滿輸入貿易の中心地で商業上、金融界に重きを置かれて居る。

ハルビン市街の商業地で目貫の繁榮地とされて居るのはキタイスカヤ街、モスコーワヤ街である。前者は中國大街で大商店櫛比し、後者は石道頭街で日本人居留民が多い。又支那人市街の傅家甸、正陽街の如きも車馬輻輳して殷賑を極めて居る。

今より約五十年前露國が極東政策上、此地に着眼して積極的に經營したゞけあつて其設備結構に露國的氣分が溢つて居る。

ハルビンの西瓜市場

東支鐵道の東、西、南三部の各線が集まる中心點となつて居るハルビン驛は、交通が至便で百貨輻輳、確かに北滿の經濟的活動の重心舞臺である。鼓に集まる百貨の旺盛は今更事々しく言ふ迄もない。

寫眞はハルビンに於ける出盛り期の西瓜市場の光景である。是等の西瓜は松花江沃野方面の生產に係るものであるといふ。

因にハルビンに於ける穀類發送年額は三千五百萬プードと言はれて居る。

ハルビン驛屋上に翻る新社旗

完全に獨立新國家を建設せる滿洲國は諸般に亘りて漸次其の新らしき色彩は到るところに窺はるゝのである。

勞農露國にてはハルビン驛に於ける東支鐵道社旗は新たに滿洲國の五色に勞農旗を染め出した新社旗を造りて同驛の屋上に掲揚した。寫眞は新社旗が屋上に翻飜たる光景である。

ハルビンの滿鐵事務所

ハルビンの滿鐵事務所は目抜の新市街停車場の地點に在る。滿鐵事務所の階下はジヤバンツーリストビトスリーローユーに所業譽のローユーに於てられてある。

寫眞は滿鐵事務所の外觀で滿鐵事務所の所在する此の街は當時ハルビンにハルビンの案内所も出來ツーリストビトスリーローユーに於て行旅に蒙る。滿鐵事務所内の案内所は人を來る人は滿鐵事務所に尋ねて問ひ合すれば萬事立ごころに領要を得られる。

キタイスカヤ街

キタイスカヤ街は最も開ける有名な街で、ハルビンの銀座ともいふべく、夜になると全街を電飾化して詩趣されんばかりである。三十餘ヶ國の民族が雜居する都市としてその繁榮さは晴らしく巴里をも凌ぐ程であると言はれて居る。寫眞は遠景の丘からキタイスカヤの市街を望んだ光景である。

ハルビンの新市街

新市街はノーウイ、ゴロツトと云ひ、ハルビンの三主要部分の一つで、ハルビンの秦家崗といふ高臺に位置し、官衙、住宅多く、ハルビン停車場も茲にあり、又東支鐵道廳、我が滿鐵事務所も此新市街に所在して居る。

寫眞は新市街の光景である。

販へる傅家甸

傅家甸（フウチヤチンン）は新市街、埠頭區と共にハルビンの三主要部分を爲す市街で、傅家甸が、明治四十年頃までは乞食町と忠と呼ばれた支那人街であつた露國の革命急激に發展し、現在では文明機關の備つた滅立なかや滅たつなと街市の派な商人街である。所揚の寫眞は傅家甸の主道で道三街、道四街の販ぶりである。

ホツケーの遊技

ハルビンは北緯四四度五〇、東徑一二六度四〇、其の所在地點から見るも冬期は相當に寒冷激甚である。興安嶺の雪便りを聽く頃になると、冷露が下りる、霜だと家々では襲ひ來る冬の準備として壁を塗り易へ、暖爐を手入し、薪を買ひ込む事を怠らないのである。

斯うしたうち薄黑い空が續いて、いよ〳〵冬となると粉雪が降り積つて春になつて容易に融けない。而かも又此の寒い一面に冬の戸外遊戯として演じられるのはスケートであるが、此のスケート競技中でも近來特に盛になりつゝあるのはアイスホツケイである。是は爽快な男性的遊戯として到るところに盛に演ぜられて居る。

痛快な橇あそび

氷上に於ける遊戯として盛んに演ぜらるゝスケートやスケートホツケイの他に白皚々たる雪中の遊びとして橇遊びも試みられる、雪の日のハルビンの市街の一部には、寫實に見るやうな光景を見かける。是は坂道の如く勾配を附けたブリツチに路を作り、其の頂上から橇を辷らして遊ぶのであるが、深か〳〵と積る雪の中を無心に嬉々として遊ぶ罪なき痛快味ある橇遊びは冬季に於ける遊戯としては隨一のものとされて居る。

悲惨な街頭の一情景

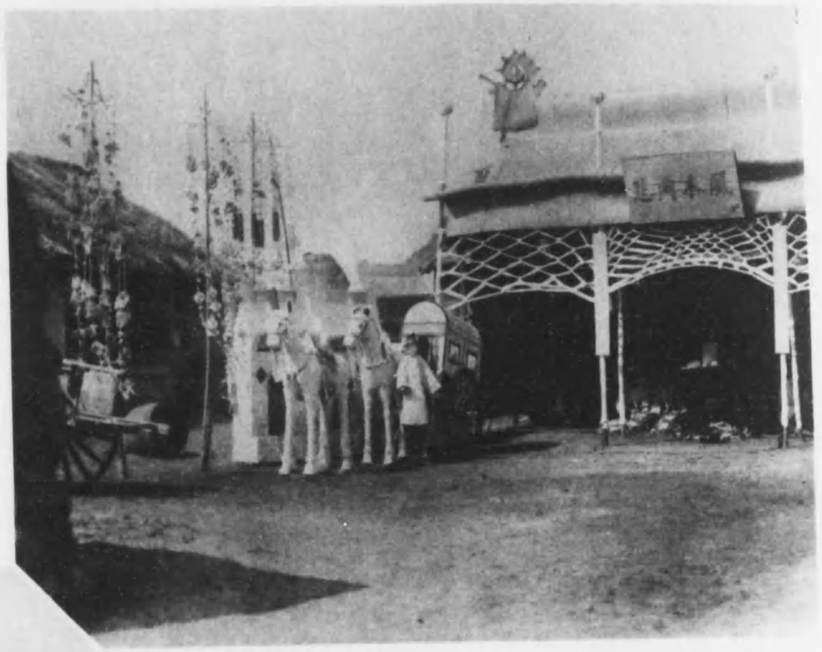
ハルビンは國際的都市として北滿に於ける政治、經濟、商業の中心地として交通完備し、市街は繁榮を極め、殊に夜間は音樂と酒と、女とに耽溺の世界を現じつゝあるが、その片面に於ては、意外にもこの寫眞に見るが如き悲惨な場面を表はしてゐるのである。

一國王朝の凌落ほど悲惨なものは無い。昨日の榮華に變る今日のドン底生活は、露國ロマノフ家が痛切に示した活ける實例である。所掲の寫眞に見る此種の情景を繁榮なハルビン街頭に見るものは、誰か人世流轉の甚だしきものあるに驚嘆せざるものは有るまい。

ハルビンの郊外所見

政治的に、經濟的に鋭い神經を尖らし、產業旺盛に、交通頻繁で、總てに於て積極的激甚な都市であるハルビンにも、一歩足を郊外に進めて田園に出れば、其處にはこの寫眞に見る如き長閑な平和鄕を見出すことが出來る

所掲の寫眞はハルビン郊外に於ける波蘭人が田園生活の一家庭である。飼牛と養鷄と、野菜ものゝ栽培に、彼等は都會の激しい目まぐるしき空氣を餘所に、肉や卵や野菜には事缺かぬ氣樂な家庭に平和な生活を續けてゐるのである。



東寧縣の城東門

綏芬河より南の方、露支國境附近に所在する東寧は素と綏芬廳の管轄區域であつたが、宣統二年に其の一部を割いて撫民通判を置くに際し、此の附近を東寧廳と定め東寧を中心地とした。其後民國二年に至り更に東寧縣と改稱し、今は縣廳の所在地となつて居る。

東寧の城壁は俄か作りの土壁であるが、露領に面して鎖東門と題された城門は嚴めしく固められて、土地の威嚴を示して居る。こは屢々馬賊に襲來さるゝ當町としての必要からでもある。

寫眞は東寧縣城東門の光景である。

齊々哈爾附近の葬送風俗

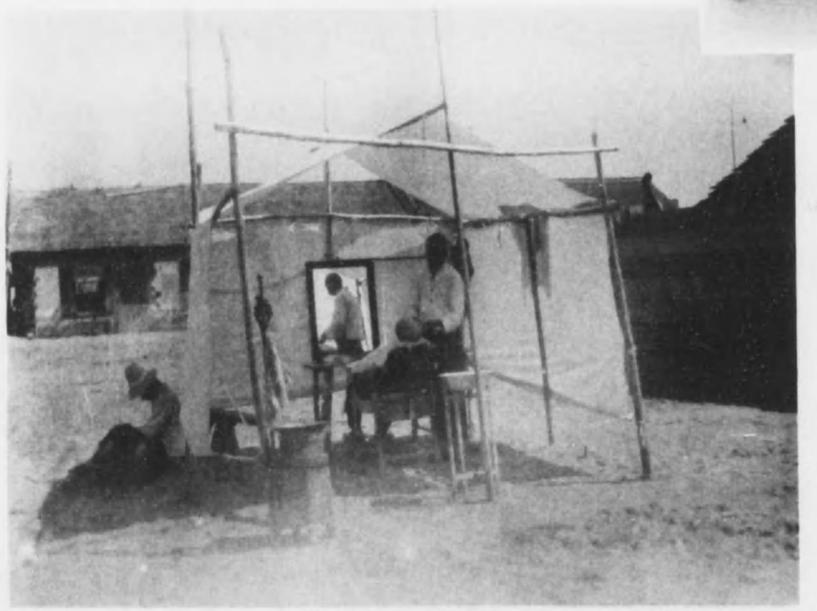
各地方の風俗慣習の異れるほど興味深く覺ゆるものは無い。殊に文化に遠ざかり居る土地に至りては、其の風俗によつて文化發達の程度を窺知るを得るのである。

寫眞は齊々哈爾附近に於ける葬送の風俗で、死者ある家から今しも出棺せんとする光景である。家の前には二頭立ての馬車、車、そして其の傍に立てる人、是等は悉く紙細工であつて、やがて墓地の前に於て燒いて了ふのである。是れは從者を始め、馬、車等に葬送させる意味であるといふ。是れ蓋し一種の殉死の風習の名殘であらう。

海林街頭の藝術味

人口僅に五千五百と稱せらるゝ小市街の海林は、比較的産業の盛んなる一都邑であるが、その一面には、自然の風景觀にも乏しからぬので偶には藝術家なども見受ける、寫眞は海林街頭に於ける藝術家のスケツチである。

見るからに田舍氣分の漂つてゐる小市街にも寫眞に見る光景に接しては漫ろに藝術味を覺ゆるのである。



林業に知られた海林

東支鐵道東部線の一驛である海林は小さな街ではあるが海林河に臨み、林業の盛んな土地で、日支合辦の中東海林採木公司がある。同公司の事業は相當有力にて海林市街の生活に對しても多大の影響を與へて居るとの事である。

當地に産する樹種は白松、赤松、魚鱗松、樺などがその主なるものである。

又、海林は林業の他に、農産物としても、米、大豆小豆、小麥等の穀類集散地として知られてゐる。

寫眞は海林市街の光景である。

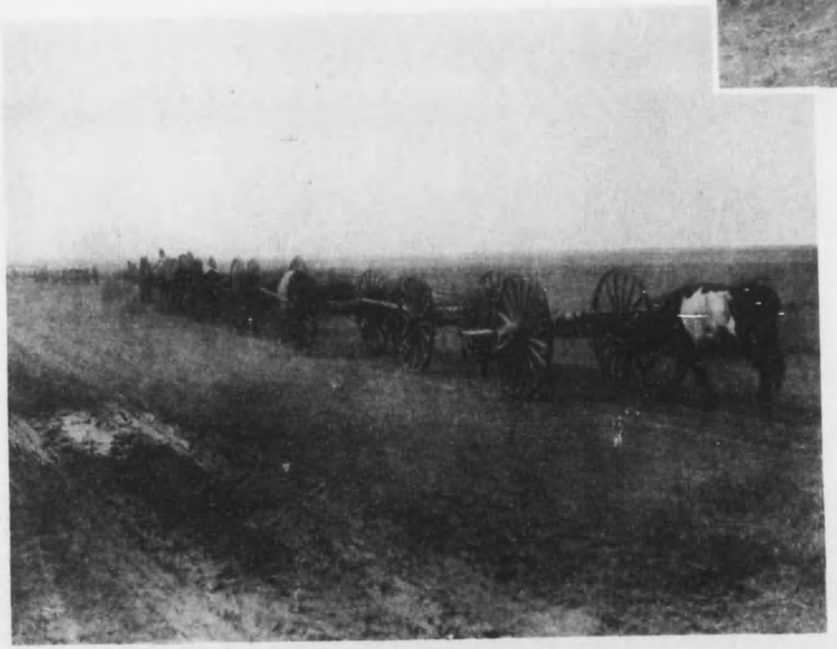
曠原を行く牛車

海拉爾は其の市街では相當盛んに蒙古貿易が、行はれるが郊外に出ると蒙古包、放牧などに接する。又市街の南郊には砂丘、オボなどが見られるのである。

此の蒙古に於ける堂々たる一都市である海拉爾の市場へ、附近の農民、百姓など物資を運び通ふのは、大低曠原を行くのである。

寫眞は斯うした物資運搬の牛車が其の歸途の光景である。

そうして此の曠原の旅行者は暴風と、狼群の襲來に對しては細心の警戒を怠らず、注意深く此の曠原を辿り行くのである。



海拉爾街頭の一情景

海拉爾は東支鐵道西部線の一驛で、コロンバイル政治的、經濟的中心地で、即ちコロンバイル政廳の所在地である。政廳は蒙古人の手に成るもので、從つて當地は蒙古的色彩が頗る濃厚である。海拉爾の市街は伊敏河の左岸にある。鐵道の北は露人の新市街、南は蒙古支那人の舊市街がある。市内は牛、馬、羊、生皮、獸毛等の取引、所謂蒙古貿易が盛に行はれる。

寫眞は海拉爾街頭に於て、露人の八百屋が支那人の百姓を呼びかけて野菜の値段をかけ合ふのであつて、露支人の住民多き當地には常に見受ける街頭の情景である。

因に海拉爾は東支線中の豐富な野菜生産地として知られて居る。

滿洲里の日本領事館

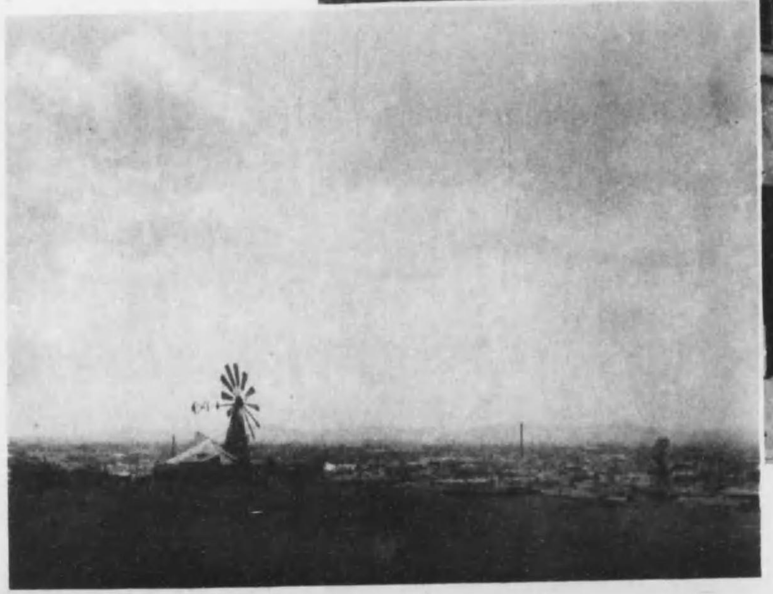
滿露國境の譯である滿洲里は、その市街は純然たる露西亞町である。人口は一萬二千で、其七割は露西亞人、其他は支那二割日本人一割といふ振り合である。

寫眞は同地の日本領事館の光景である。

滿洲里市街の展望

海拉爾に次いで蒙古貿易の頗る盛んなる滿洲里はタルバカンの取引、ダライ湖の魚類の集散地である。其市街は純露西亞式で家屋は整則正しく建てられてある。鐵道南は東支鐵道の社宅街、鐵道北は商業區である。我領事館、小學校があり、支那側に墺濠縣公署、東省鐵路軍、吟滿司令部等がある。市内にはセミョーノフ軍從軍日本義勇兵　記念碑が立つて居る。

市街の三方は山に繞らされ、其東岡には製粉用の大風車が立つて　異な風景を成して居る。寫眞は其風車より展望した滿洲里市街の光景である。



滿洲里停車場

滿洲里は滿露國境の驛である。露國ではザバイカルカイ鐵道と聯絡する車に乗つて居る。又當驛で稅關の檢査が行はれる。當驛はハルビンから二十四時間で達する。水産物、皮毛、又當驛の貨物の發送驛である。日本旅館の外に旅館あり、ジャパンホテル、ツーリスト、ユーロピの出張所もある。

阿什河の朝陽門

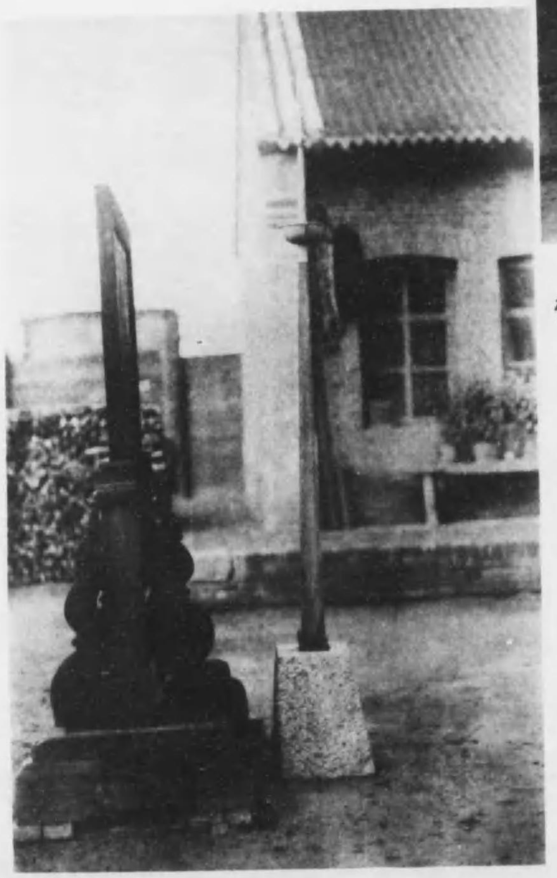
阿什河は北滿ハルビン東方九十支里にある高名な古城で、其昔寧古塔將軍の管轄下に置かれ、清朝時代には東支鐵道の一驛として繁榮した。金代には女眞部落の諸城の一つであり、清朝時代には旗屯田兵が駐屯した。この門は現存する城門で、その傍に朝陽門と稱し、滿洲文字を配してある。正面には朝陽門の今の三字を記し、その面影が偲ばれる。

北滿の要衝寧古塔

寧古塔は吉林省中央部の要衝の地で、東は琿春、浦鹽、西南はハルビン、吉林、北は約四里の三姓に通ずる道路を有し、北方は東支鐵道が通じ、寧古塔將軍を置いたこの地は清朝時代に流刑の地として繁榮した。全省を統轄する吉林將軍が駐屯し、農産物の移出入は歷史的に知られ、散在する。

靈魂を祭る神杆

所掲の寫眞は靈魂を祭る爲めに使用される神杆と稱するもので、滿洲人の家には必ず之れが立てられてある。この寫眞は吉林省の東京城に於て所見せる撮影に係る。この神杆なるものは家の門を這入ると共處に在る衝立の後方に立てられたもので、この神杆の上に設備された皿には肉などを盛りて靈魂に供へるのであるといふ。是れも滿洲風俗の一つであらう。



寧古塔市街

吉林省中の古い町として知られて居る寧古塔は民國二年に興安縣と稱され縣政府を置かれた、人口は約三萬五千で、牡丹江流域の農産物集散市場である。

所掲の寫眞は寧古塔市街の本通りである東大街の光景である。土地の一流商店は大抵この東大街に軒を並べて居る。

此の商店街の盡くる所に東北陸軍第二十一混成旅團司令部が在る。その附近には農具製造の鍛冶屋や糧食屋が多くある。

寧古塔は然なきだに落付きすぎた物靜かな寂しい街であるのに、匪賊の出沒が激しいので夜間は商店は悉く門戸を閉すので死の町の樣である。

小學生募集のビラ

寫眞は寧古塔の郊外、自然の立木へ無雜作に貼り出された小學生募集のビラである。

幾十百年も經たらんと思はる巨木の樹身に一葉の學生募集ビラを見る、何たる卒直な純朴さか。斯ういふ點にも北滿の奥地らしい氣分が親はれる

寧古塔の鮮人小兒

寧古塔は地理的に朝鮮と接する一衣帶水の圖們江を渡れば吉林省である。近頃は鮮人の移住が多くなり、殊に農産物集散市場である牡丹江流域の田畑を求めて移住し、年々加增加の傾向にある。寫眞は是等鮮人の子供等が靜かな寧古塔の郊外の仲よく和平に遊ぶ光景である。

東京城に於ける護衛兵

支那の奥地を旅行する際には、護照と稱する旅券を要する。この旅券をその地方の縣知事に示す時は必ず護衛兵を付けて呉れる事になつてゐる。寫眞は吉林省東京城の市街にさしかゝつた護衛兵の一隊である。

因に、護照に對する護衛兵は旅行者にとりては、有難くもあるが、又迷惑な事もある。彼等は時に酒手をねだる事などあるが、永い旅路を倶にする間には、何となく愛情が加はりて、いよ〳〵袂を別つといふ際には、哀別の情を催すことも有るといふ。

興隆寺の石香爐

北滿の東京城は相當に古き歴史を有する土地で、當地の興隆寺は、元石佛寺と稱し、金時代の創建の古刹であると言はれてゐる。同寺の境内には蓮瓣を彫刻せる古き石香爐がある。其高さ約二丈、幾百年の門風霜雨雪に曝されて腐蝕せる部分もあるが、而かも又古代文化の一記念として見るべきものである。

寫眞は興隆寺々庭の石香爐である

驢馬の粟粉挽

吉林省方面、北滿各地方の百姓家では、家畜として驢馬を飼育せぬ家は殆んどない、そして是等の驢馬は、其の家僕同樣に、一と廉の働きを爲して居る。

寫眞は北滿地方、一面坡附近に於ける農家の粟の粉挽仕事の光景である。寫眞に見る如く驢馬が其の飼主の指揮の下に默々として働き居る淳朴の姿は、如何にも其柔順の性格を窺はれてやさしみを感ずるのである。

松花江に働く交通機關

水運の至便とともに交通の極めて頻繁である松花江の水面には、貨物船、乘客船など靜からず輻湊して居るのである。所掲の寫眞は其の交通機關として働きつゝある交通船である。

其の嚴めしき水運の外車を有し居る層階船が江岸に横着けされて居る場面は又是れ松花江上の一情景である。

ホツプの栽培

一面坡は農産物集散地として知られるほどである。農業もまた盛んである。寫眞は當地方の增殖ホツプの場に滿ちかけるほどである。ホツプは草ナハラカに似て葉は桑の葉に似てしかも質淡黃色を帶び、一種の苦味質を含むのである。ビールに苦味を附するにはホツプを用ふるといふ。

異色ある酒屋の門

東支鐵道沿線の阿什河驛は、金時代には會寧府の首都であつたといふ歴史的な古い土地である。市街は驛の南方五支里の所で、阿城縣公署の所在地である。市街は土壁を繞らしてある。驛附屬地とを合せて人口六萬と言はれて居る。又阿什河城の南方五支里に白城といふ土城址がある。市街で人目を惹くものは酒造家の門である。寫眞に見る如く壯麗華美な結構で、且つその建築は三段構への特徴を有し、鞍形で煉瓦なく、王宮寢殿造りの樣式であるのは、酒造家の門としてその堂々たるに一驚を喫するのである。

喇嘛教の神閻君の像

寫眞は蒙古人の崇仰する喇嘛教の神の一種で、支那人は之を閻君と呼んで居る。

由來喇嘛教の神の中には頗る怪奇異形に富んだ姿を見受けることは尠くない、是れも其中の一つである。蒙古語ではこの寫眞に示す像をイルマンハガンと稱するとの事である。研究家の說によると「生れ出づる力の表現」だらうと言はれて居るそうだが原始的宗教の神で佛教の神で、はないと云ふ。

海林の高原地帶

東支鐵の東部線海林、横道河子附近は林業地として知られ、北滿木材の供給地帶であつて、尠からぬ森林を有して居る。

海林は、斯くの如く森林を有して居ると共に、又その高原地帶には種々なる高山植物のあることは言ふまでもない、その自然の景趣が敢て技巧を弄せざる豪放的素朴味を有するところに、大陸的の景趣を窺はれる且つその暮靄模糊たる夕景色に至つては到底畫家の筆致も及ばぬ自然の景觀である。

海林河の流し筏

海林市街の一粁餘の所を流れて居る海林河は上流の横道河、筒氣溝、海浪河の三河川を合せて牡丹河に注ぐのであるが、この海林は林業地として有名なので、林業場から伐り出さる海林採木公司の木材は、總て筏に組まれて、右の海林河によつて流さるゝのである。そうしてこの流し筏は海林河の沿岸地方に所在する市邑へと運搬される。

寫眞は海林河を下る流し筏の光景である。

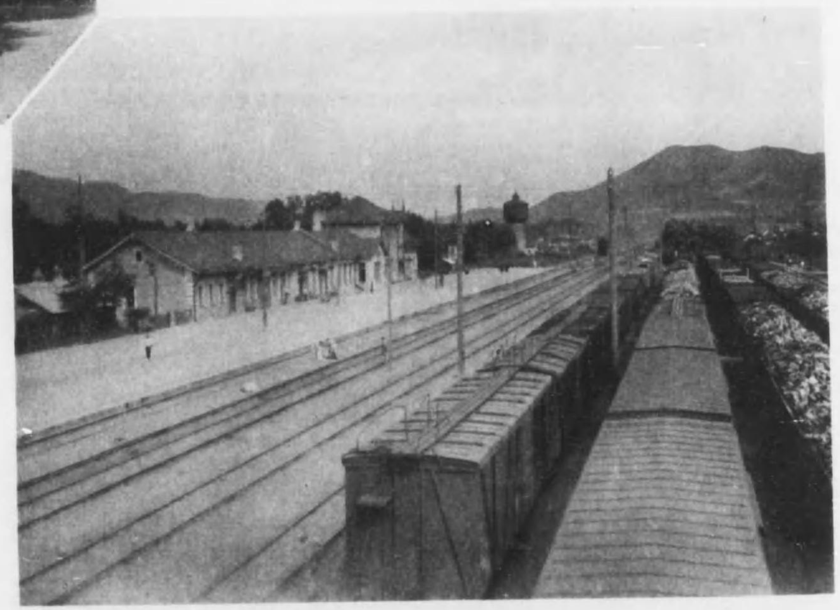
尙、海林は森林に豐かなる林業地である一面には、海河流域には比較的平野が多く、農業の灌漑に便あるので水田耕作に從事する者も相當少くない、そうしてこの水田耕作の農民は多く鮮人である。

風光明媚の一面坡

東支鐵道東部線の一驛として風景佳絶を以て知られて居る一面坡は蚊蟻河の清流に沿ふた地で、其市街は山の麓斜面に建てられてある、心地よき清流の蚊蟻河は夏季は水浴に適し、又釣魚によく、殊に河邊の公園は最も逍遙に適するので、露人は鼓を避暑地として遊ぶもの多く、貸別荘の設備も少からずある。日本人間には一面坡を「北滿の風山」と稱して居るに見ても如何に其の風光明媚の景勝地であるかを知られる。

一面坡は又北滿に於ける特産物の集散地であるが當地の名産としては山葡萄酒、苺酒、蜂蜜等がある

寫眞は一面坡驛構内の光景である。

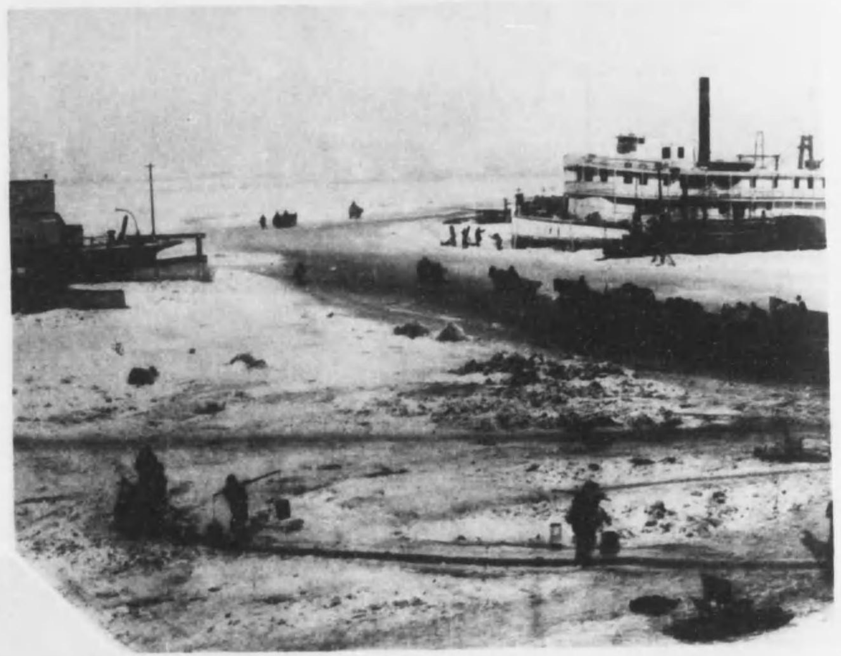


松花江畔の涼み

松花江の沿岸が水利に至便で、其の水運による百貨の集散、交通の頻繁であることは今更言ふまでもないが、是れと共に又一方には風光景趣に富むの一面を有するのである。

三伏の盛夏に涼を納るゝ適地として露人が松花江畔に逍遙安憩するもの多く、その水面を撫で來る涼風に吹かるゝ爽味は又なく好適なものである。

寫眞はハルビンに於る松花江畔の光景である。



氷上の驢馬車と自動車

一とたび結氷期に入るや、平時は一葉の大江によつて隔絶されて居つた兩岸の人々は、此時期に於て船に依らず、車馬に依つて自由に交通する事が出來る松花江は、平素水運の至便なると共に冬期またこの人々は別種の幸福に惠まれて居る。

寫眞は結氷せる氷上を驢馬に牽かせた馬車が悠々と大江の上を交通し、けたゝまく風を切つて自動車が疾走する光景である。

結氷した松花江

松花江は黑龍江の一大支流で、嫩江と共に北滿洲の水量を大部分包括してゐる。水源を白頭山の北西山麓に發し五百餘粁にして嫩江と合流し本流に合するまでには六百粁の延長を有して居る。ハルビンより下流は舟掉の便よく水運自由にして、船腹に水車風の大推進機を付けた淺吃水船が客を乘せ貨物を積みて通航する松花江はハルビンの生命とも謂ふべくであるが、冬期に及ぶと氣温は零度以下三十度以上にも下降する。そうして十一月より翌年の四月迄は全く結氷に鎖されるこの場合には兩岸の交通は陸上と全然異らざる聯絡を取るに至る。

寫眞は冬期に於ける松花江の結氷せる光景である。

興安嶺の落葉松相（其一）

由來、滿蒙は原野の地であると共に又森林の地で、大小の興安嶺山脈から、朝鮮國境の長白山脈一帶へかけては、最も豐富な大森林を爲した地方である。

興安嶺森林の伐採事業を經營して居る札免公司は其區域頗る廣く、我四國大の廣袤を包有して居るといふ。

寫眞は興安嶺森林中の落葉松相の一部の光景である。

興安嶺の落葉松相（其二）

所掲の寫眞も、前者と同じく興安嶺の森林に於ける落葉松である。

大小興安嶺地方は一帶に鬱葱たる針葉樹及び濶葉樹の大森林であるが、其の森林が美しき草原と相錯綜して、何處までも延び續いて居る。天然の美觀は實に見事なものである。

滿洲の森林に豐富である事は何人も口にするところであるが、調査した專門學者の談によると興安嶺の森林の如きは殆んど見當も付かないほどであると言はれて居る。

斧で割る牛肉の凍結

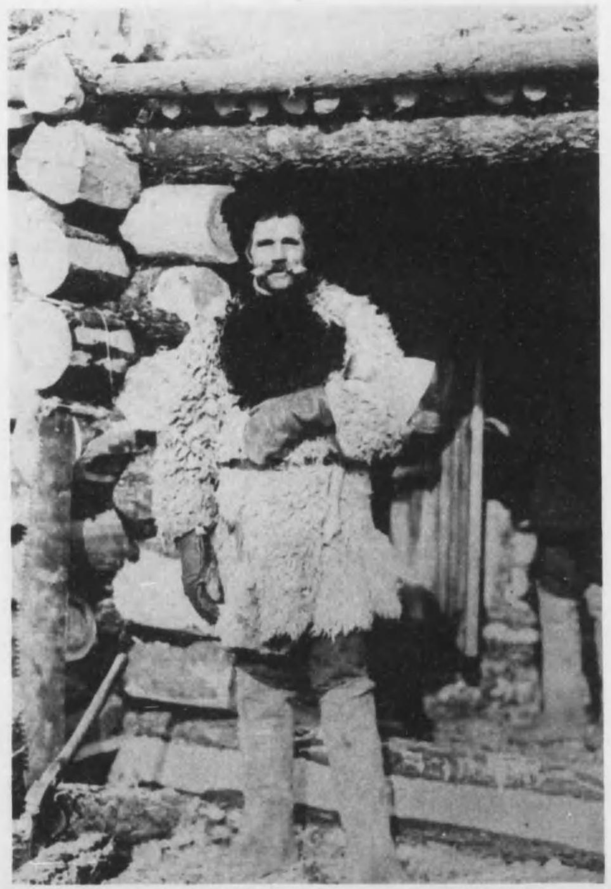
零下四十七度といふ酷寒猛烈な時には牛肉の片塊は凍結して恰かも一つの石塊の如く、挺子でも毀すことの出來ぬ堅い〳〵固結體となつて、どうにもかうにもならぬ事があるのは珍らしくは無い。斯ういふ時には、其の堅いかたまりの大きなものは鋸で挽き之れを俎板の上に載せて斧で割つてから煮るといふ事である。斯いふ事實に徴しても如何に其寒さの程度を想像し得られる。

寫眞は北滿地方に於ける嚴寒中凍結せる牛肉を斧で割りつゝある情景。

興安嶺山中の樵夫風俗

興安嶺山中の樵夫に就ては別項の寫眞說明中にも記したが、零下三四十度にも達する酷烈な嚴寒と戰ひつゝある彼等は山中の丸太小屋を己れの住む獨自の世界として居る。そして彼等の風裝といへば頭から爪先まで毛皮づくめで裝身し、一寸遠目には人間か獸か判然しがたき服裝である。斯る服裝した樵夫が鼻下の髯に息が凍結して霜花を着け、それが一つの裝飾を爲して居るのは一種の奇觀である

寫眞は興安嶺山中の丸太小屋に於ける樵夫の風俗である。



森林の霜の花

北滿に於ける大陸的の自然美は何と言つても冬の朝に眺める雪景色と霜の花である。零度以下三十度といふ嚴寒を犯して、其の景趣美觀を擅まゝにするのは、一種の冒險的痛快な興味である。

寫眞は北滿の興安嶺附近の森林を彩り結んだ霜の花である。神秘的な天巧自然の美には到底人間の俗手は及ばない。

興安嶺の白樺の森

滿蒙の間を北々東に向つて走る山脈は言ふまでもない興安嶺である。そして其脈は黑龍江岸にまで延びて居る。冬期には零度以下三十餘度にも至る嚴寒の中に、默々として靜かに立てる白樺の森は、自然の景觀を彩る美趣である、そして雪の消ゆる五六月の候になると幻にも似たらん柔らかい若芽が出るに及んで更に一層の彩景である。

雪中の柚小屋

海拔四千尺といはるゝ興安嶺は北滿唯一の高地で、冬期酷寒には零下四十七度といふレコードを示す、此の場合には、石も木も、土も水も悉く凍結して了ふ。斯る酷寒の中に、白皚々たる堆雪に圍まれながら、丸太を積み重ねた露西亞式の柚小屋を透つて、其處から盡々として炊煙を上らして居る、詩趣味的にも亦何たる雄々しさよ。

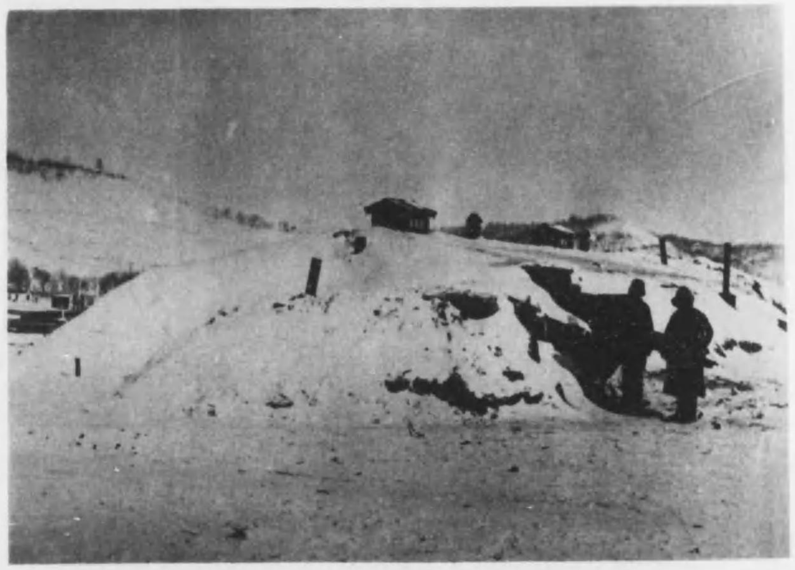
寫眞は雪裡の興安嶺に於ける柚小屋である。

森林中の牧牛

海拔四千尺と言はるゝ興安嶺、山林中の酷寒は、優に搖測に餘りあるが、斯くの如き猛寒骨をも刺すと思はるゝ此の高嶺の森林中に放牧されて居る牛は存外平氣である如くに思はれる、而して此處の氣温は正に零下四十七度といふに至つては驚歎するの外はない。

興安嶺中の搖作業

酷寒には零下四十七度に達すると言はるゝ海拔四千尺の興安嶺、四面白皚々と積もつた雪の森林中に於ける搖の作業、都人士は夢には其の勞作の味は解するに由もなからう。而かも屏風の如く繞らされた森林は霜の花に飾られて丁々と響くこだまを伴とする伐木作業の彼等の境地にも亦相當の慰みも絶無ではあるまい。



北滿地方の穴居生活

北滿の或る地方には地下數丈の穴を掘り穿ちて、其れに屋根をさしかけ、其の上に土を蔽ひて小山の如くに堆くする。そうして其内に住んで居る。寫眞に見る上層の小屋は空氣ぬきで土中から突立つて居るのは煙突である。地下は幾つかの室に分れて頗る保温に適した住居である。

蒙古の井戸

蒙古に於ける井戸は別項に四ツ目井戸の寫眞を紹介したが、この寫眞は偶然に本一は今日見出されて居るのもしらず存在する昔の年代の井戸であるかぬ知らぬ。

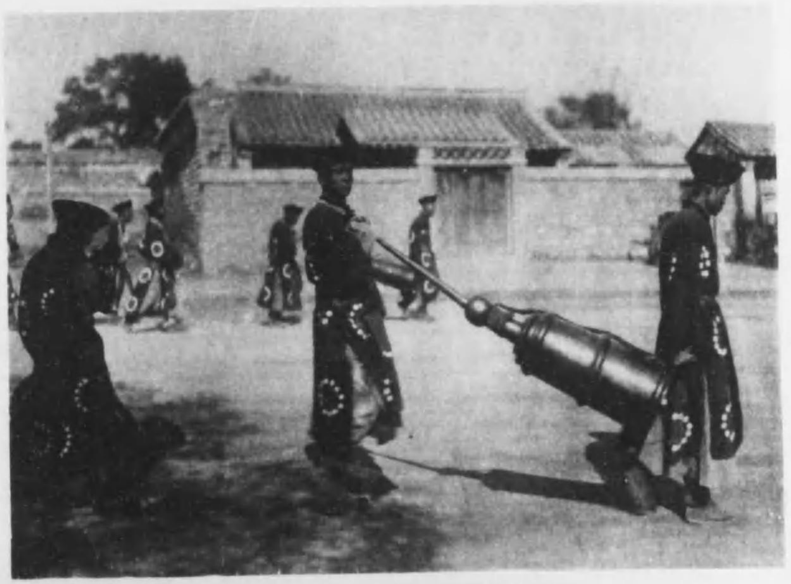
スレツパーの置場

興安嶺の森林伐採事業を經營する札免公司のことは別項同山森林の寫眞說明に於て述べたが、其の大廣袤の地域を有する同公司の手に由て森林地帶から伐り出だされる木材の量は實に無限といふべく、而して東支鐵道、滿鐵等の用材たるスレツパーは皆之に由て供給されるのである。寫眞は該スレツパーの置場。

製材場の柚作業

興安嶺森林の伐採事業經營者である札免公司の作業場では、山から伐り出した木材をスレツパーに製材してゐるが是等の仕事に從事してゐる北滿勞働者の柚作業は、人間業とも覺へぬ、程猛烈な酷寒に耐え、倦まず撓まず二六時中營々として作業と戰つてゐるのである。

寫眞は製材場に於る柚作業の光景である。



嫁入り道中（其一）

諸國各地方の嫁入り風俗ほど、鄕土氣分を發揮して居るものは無いと同時に、又尠なからざる興味を覺ゆる。

所揭の寫眞は北滿地方に於ける嫁入りの光景であつて、花嫁は輿の裡に納まり、輿の前後には喧がしきまで囃し立てる音樂に送られながら結婚の式場へと送り込まるゝのである。

華やかに彩る花樓

總ての祝賀、祭典、若くは儀式の祭場、偖は商店の開業、賣出し披露などの裝飾に使用さるゝものに花樓といふのがある。所揭の寫眞は即ち其の花樓である。

其の規模結構の大仕掛けなところに一種支那式の獨特の意匠が窺はれる。近來我國にも流行する洋式の裝飾とは又別種の趣きがあつて、變つた興味を覺へしめる。

嫁入り道中（其二）

見るからに異樣の樂器に騷々しき音樂に景氣をつけるものか、平和に赤色の滿ちた一行の人々の中に、乘物に納まつた花嫁は、囃し立てゝ行く音樂を聞きながら花婿に擔がれて行く。

齊々哈爾城内

黑龍江省政府の所在地として知られて居る齊々哈爾は、古くは卜魯と呼ばれ、清朝時代には此地に北邊警備の城を築いて露國の南下に備へたのである。後ち龍江府と稱し、民國二年に縣治となつた。

元來齊々哈爾の名は、當地より一千粁の西方嫩江の右岸に在つた軍防所齊々哈爾の名を取つたのである。市街は木柵の中に土を滿した城壁で圍らし、城内には官衙、學校、住宅區がある。商業區は南方城外にありて、玆には我領事館や滿鐵公所が設立されてゐる。人口は城内外を通して十數萬ある。

當地は嘗に東支鐵道敷設の際は沿線を外れてゐたが、其後昂齊輕便鐵道が通じて以來頓に活氣を帶び市況旺盛を示すに至つた。寫眞は齊々哈爾城内の光景である。

國境市街綏芬河

露支國境の市街である綏芬河は東支鐵道の終端驛である當驛のことは別項「綏芬河の市街」に述べた如く露語で國境を意味するポクラニーチナヤであるが、支那では當地を綏芬河と稱してゐる。涯りなき波狀地帶はウソリー鐵道の走る沿海州へと續くのである。

此地は露國、支那、朝鮮の三民族が雜居する土地だけに密輸が盛んに行はるゝので名高いと言はれてゐる。

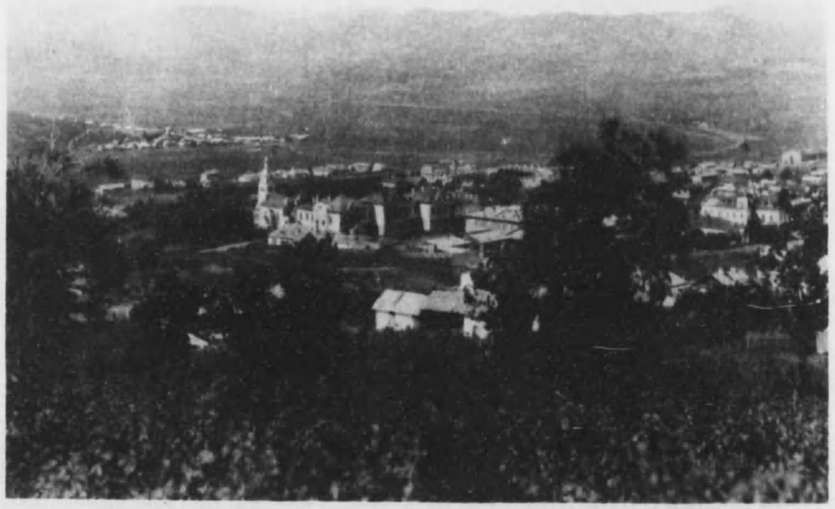
寫眞は綏芬河市街の一部である。

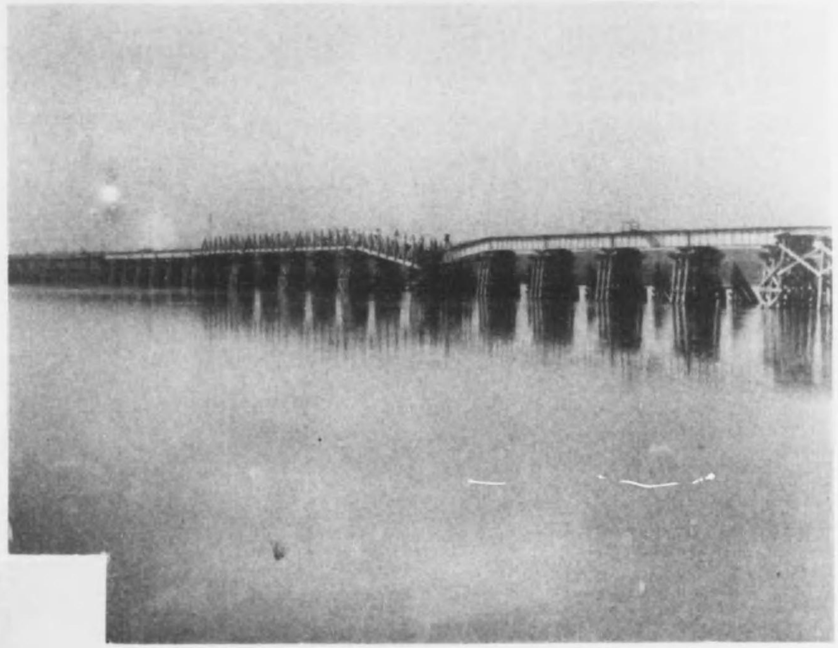
綏芬河の市街

綏芬河は東支鐵道東部線の終端驛であつて、露支國境に立つて居る。で此附近をポクラニーチナヤと呼ぶのは蓋し露語の國境の意味である。斯やうに國境に所在する驛であるから當驛の構内には露支稅關檢査所が設けられて嚴重なる檢査が行はれる。

綏芬河の市街は傾斜面に建設されて居る、所謂是れ露西亞の「山の町」の型である。此地の人口は各國人を通じて約七千七百三十三人、市内にはソヴェート聯邦領事館、鐵道倶樂部、滿鐵駐在員出張所等がある。

寫眞は綏芬河市街の光景で、その尖塔を有する教會其他露西亞風の建物が如何にも露支國境の町といふ氣分を唆る





松花江の鐵橋

松花江は黑龍江の一大支流で、その流域は嫩江と合流するまでは五百餘粁、合流以後本流に會するまでは六百粁の延長を有し堂々たる一大巨流である。

そうしてこの大江に架せられたる東支鐵西部線の鐵橋は延長實に三千百九十呎に及んで居る。

蒙古の旗長

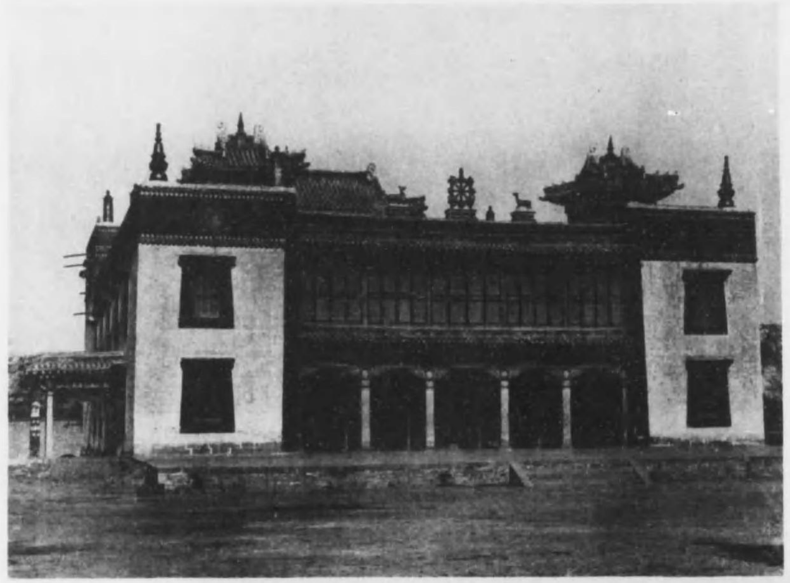
蒙古は以前は『蒙古八旗』の制を定めて北京に駐在し、滿洲朝廷に功勞のあつたものには特に蒙古の各地に封じられたが、其後は盟が成立し制度の上に大に變革を來し、今は東部內蒙古は四盟であつて其內一盟は興安嶺の裏にありて、之を裏蒙古と云ひ他の三盟は興安嶺の表にありて之を表蒙古と稱する。蒙古の主旗は清國が亡びて民國となり共和政府となつて以來、蒙古の王樣は名ばかりとなつて了つた。

寫眞は蒙古の某旗長である。旗長といへば事實に於て蒙古の王樣である、何ぞこの寫眞に見る安着の容裝なる、其の陣笠然たる官帽も尠からず威嚴を殺ぐの感がある。

蒙古貿易の旅商

遼西の錦州驛は東部內蒙古の貿易街路としての要地である。蒙古の通商は錦州の問屋から運ぶ物資は、綿絲でも、煙草でも、種々の雜貨類は、之を總て馬又は駱駝の背に據て持ち行き、其の歸路には、毛皮、甘草の類と交易し來るのである。

斯くして旅商等は朝まだきに古城を後に見て、長途の黃塵にまみれながら往き來する光景は宛ながら興趣ある一幅の畫とも見らるゝであらう。



宏壯なる茂林廟本堂

内蒙古に在る茂林廟は、その境内に一千の喇嘛僧を收容して居るとの事である。本廟の規模は宏壯なもので、鼓に掲げた寫眞は其の本堂の外觀である。昔時は活佛を中心として修道堅固に行はれたるも、近來は風紀が紊れがちであると言はれて居る。

メーリン廟の喇嘛塔

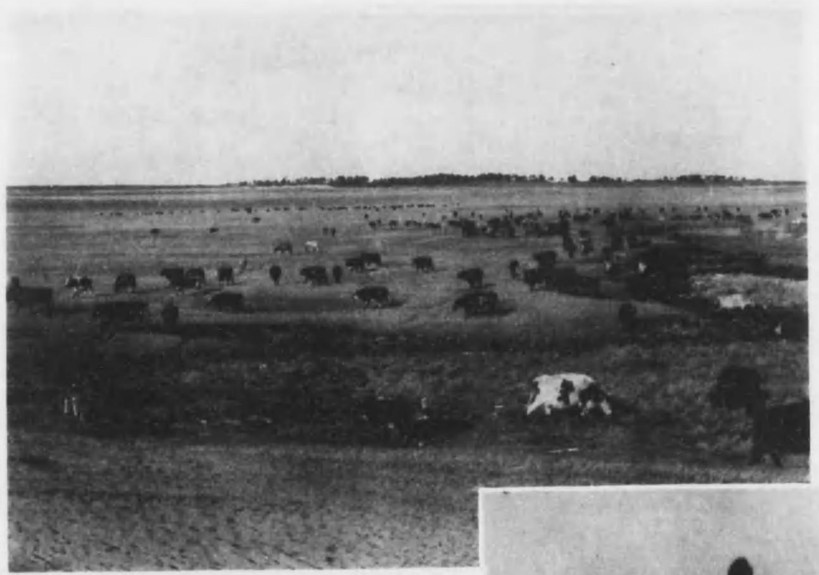
東部内蒙古のメーリン廟の喇嘛部落は開發から一日半の行程である。此の部落のメーリン廟は蒙古中著名なもので其の結構壯麗は目を驚かす程である。廟前門内に在る二基の喇嘛塔は雄麗豪華なもので、塔に施されたる彫像、色彩、裝飾等は頗る異觀を示せる裡に東洋美術の粋を極めて居る。其塔の頂上にある桃型の裝飾は日月を象徴したものである。

沙漠の黎明

沙漠を旅するものは、往々にして夜の明けきらぬ間に旅路を急ぐ事もある、行けども〳〵限りなき沙原の彼方に東雲景色ばみて日の出の逼る沙漠の黎明時ほど爽かに嬉しさを感ずるものはあるまい。

コロンバイル曠原の放牧

呼倫貝爾は東支鐵道の西部線が大興安嶺を越えて蒙古地帶に入ると、其處に展開される曠原がそれである渺茫として殆んど際限のないやうな一望千里の平原に、群牛が放牧されてゐるのを見る。是等は此の附近部落の農家で飼養する牛を二頭三頭と集めて毎日野外に放牧するので、其の監視者としては若き牧夫が共同委託されてゐるのであるといふ。



蒙古原頭の牛車

何等の形容詞を以てするも適當に言ひあらはし難き廣茫無際限の蒙古の草原、草より出でゝ草に入ると言はれた我が月の武藏野の廣さは、絶體比較にもならぬのである。此の渺茫なる草原を辿り行く一輛の牛車何たる心細き限りであらう。

曠原の駱駝隊

蒙古の曠原を旅する者は駱駝はに事はてくなれ是。るあで件物要必な實重の一唯は駱駝はに事はてくなれ是。るあで件物要必な實重の一唯は駱駝はに俗。るあで能可不は行旅の原曠實と船の上陸は駱駝はに俗。るあで能可不は行旅の原曠實

欠

水煙管を吸ふ蒙古人

寫眞は路傍に店を張つて居る所謂露店の煙草店の老爺で、商賣の餘暇に、好きな水煙草を悠々と吹かして居る情景である。

蒙古人の弓術（上中央圖）

六藝の中で弓を射るとは、馬を御する技に長ずるは武人としてしたる人の勇ましさを思はしめるものである。蒙古人が勇敢なりとは此の寫眞にもその射術を思はしめる。

蒙古の婦人

寫眞は盛裝した蒙古の婦人である。見るからに蒙古婦人特有の風俗を思はしめるものがある。元來內蒙古地方の婦女子は男子と同樣に馬にも乘れば馬車や手車をも取扱ふ。

蒙古人の相撲（下左圖）

蒙古人の相撲は、之れを日本のそれに比べては餘りに異樣であるが、又是れ民族特有の技を有して居る。寫眞は蒙古人が相撲の技を行ふ情景である。

阿巴喝人

阿巴喝（アバカ）と云ふのは察哈爾省の東部達里諾爾の北西方に位置して居る。此の阿巴喝部地方は往昔祈跋氏、突厥等が根據し、太祖の弟布格博勒格圖から一七傳して巴雅里瀾布爾古特に至り、始めて阿巴喝部の名稱が起つたのであると云ふ。

窓のある蒙古包

蒙古包に種々の式のものがあることは別項にも記したが所掲の寫眞は、包としては珍らしく窓を有する移動式のものである。此種の包は興安嶺の脈麓が靈きんとする一帶の地點に於て見られる、又單に窓のみでなく、包に泥塗りを施して窓を明けた念入りのものもある。是等は包が彼等の家屋としての一進展を示すものである。

蒙古包のいろ〳〵

生涯を放牧に托し水草を逐ふて移り住む蒙古人は、其の家屋即ち蒙古包なるものは、當然移動式でなければならぬ寫眞は彼等の住居である包の狀景である。其骨組は樹の枝を矢來式に結びたるが頗る頑丈なものであつて、冬期は之に獸皮で全部を蔽ふて寒さを凌ぐ。寫眞に見る包の背後の桙根は小牛を飼ひ置く檻である。包にも種々ありて、固定的に泥を塗つたもの、移動式のものなどある。

沙丘の旅

大興安嶺を目指して開魯から札魯特旗領への途中は、蒙古特色の茫々たる黄砂の平原で、それが宛かも巨濤の如くに隆起して居るのを見る、所謂これ沙丘である。酷熱の炎天下を此地に旅行するものは、人と言はず馬と言はず昏倒する中を、路案内の蒙古人は、騎馬で平然と悠々突破するのである。

蒙古馬の放牧

蒙古は古來ゆ駿の産馬地として知られて居る、其の殆んど總て蒙古系統の馬である。大體に於て體軀は矮小であるが能く均勢がとれて、骨格がたくましい、性質は一般に温順で粗食し、粗放に扱はれても温健で持久力が強い一代の東洋快傑と言はれたジンギスカンが亞細亞大陸を蹴散らしたのも此蒙古馬である。

族家の古蒙だん並に前の包

だん並に前の包其は眞寫。ふいと包を屋家の古蒙なき大の製銀は人婦の婚既で中の族家るあで族家髪頭だ唯は女處、で習慣がるけ着をり飾耳の形扇種もに包古蒙に因。る居てしら垂にろ後てみ組を。るあでのもの型の通普は包る見に眞寫、がるあ々

客を乘せた辻馬車

此種の馬車は多くは露西亞式のものであつて、乘車料金は寫眞は街頭に見かける辻馬車である。大連地方に於ける十錢乃至十五錢位で舗道をドライブして居る。

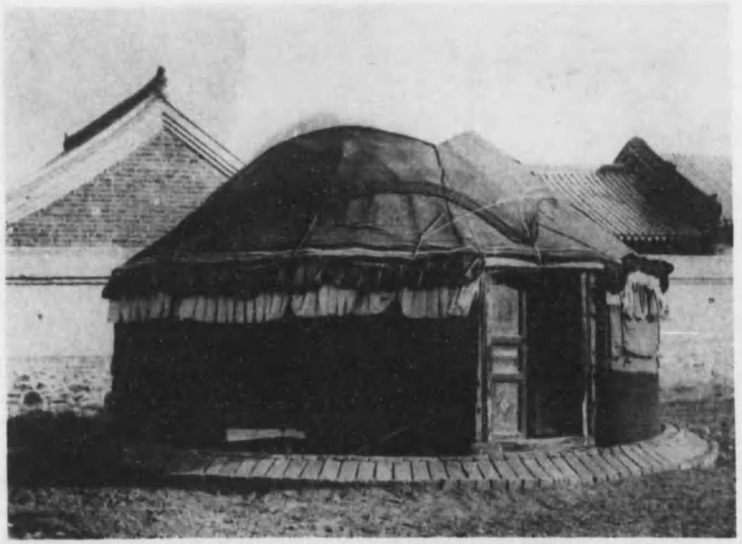
滿洲里街頭の駱駝

滿洲國と露西亞との國境に所在する滿洲里は東支鐵道の終點驛であるが、初めて當驛に着車した旅人は、その街頭に悠々と寫眞を撮影するのである、あ滿洲里の一街隊が歩みに一驚を吃するのであるが、寫眞は滿洲里の一隊を悠々歩みつゝあるの名物である。駱駝は主として外蒙西藏寄りの地方であつて、內蒙古にはその產地は主として外蒙古に於ける一種の駱駝の產出を見ないと言はれてゐる。

典型的蒙古美人

漢文的の形容詞を以てすれば、眉目清秀、潤顏豐頰とでも言ふべきこの寫眞の美人は、蒙古の某王の內室である。そのすゞやかなる目に優しき愛情を湛へ、その調和を保ちて、まことに典型的の蒙古美人と謂ふべきである。

因に、蒙古族と、漢族との兩種族婦人が服裝の相異は、漢族はスカートを用ゐるも蒙古婦人は男子同樣のターコルを着し決してスカートを用ゐない點である。



裝飾を施した蒙古包

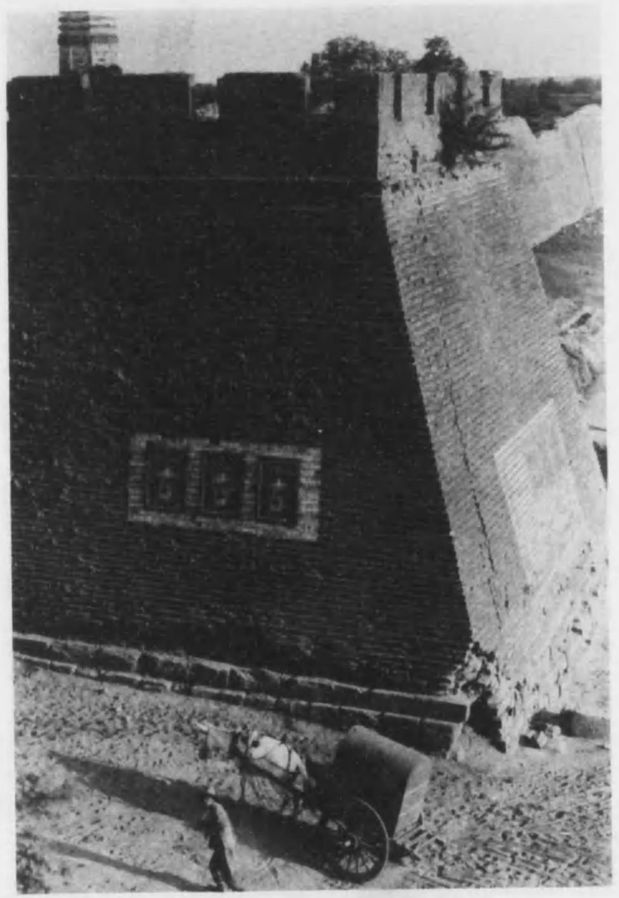
蒙古包とは蒙古人の家屋を稱するのである。蒙古の某王府の蒙古包は、その外觀を黃、鍛茶、黑などの色彩の毛氈を以て被覆した裝飾を施されてある。寫眞は即ちその裝飾きれた蒙古包の光景である。是れは主として冠婚葬祭の依式の際に於て行はれる、そしてその包の內部には王座もあり、卓子其他の調度等立派なものが用ゐられてある。

錦洲の名産漬物

錦州即ち錦縣である。錦縣は京奉線の一驛で朝陽支線への乘換驛である。錦州といへば滿洲事變に於て、彼の張學良か死守したる地として名高く何人も其の名を記憶して忘れぬのである。

此錦州の城市は驛を距る約一、五粁、小凌河に沿ふて約七萬の人口を有して居る。奉天山海關に於ける最も繁華の地である。

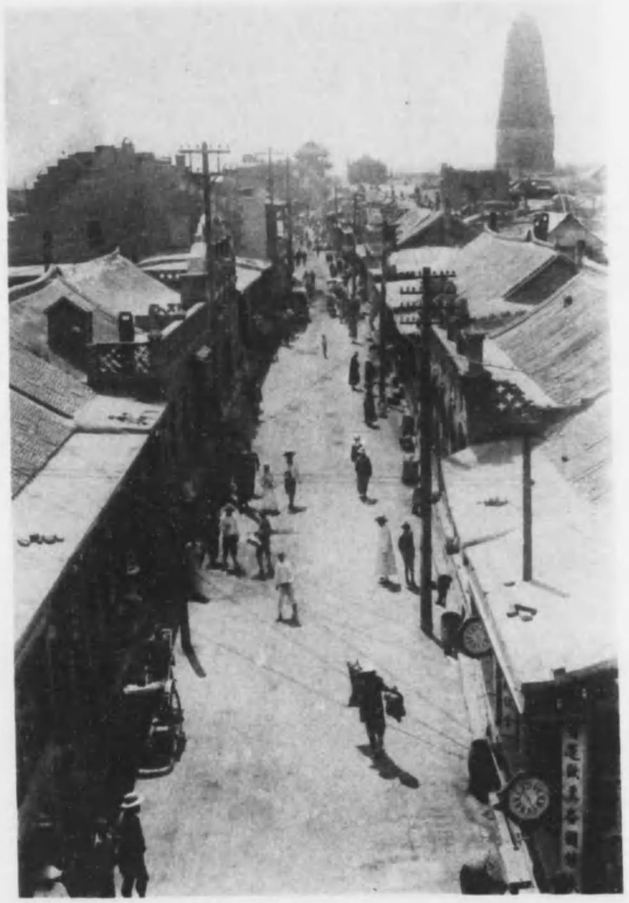
此地の名産物として最も知られて居るのは漬物で、錦州漬といへば、此地に旅行するものは、之を買ひ求めて土産にする。寫眞は此の漬物問屋の庭先に列べられた漬物で、此の醬壺には胡瓜や大角豆の野菜物が充實に壓藏されて居る。家庭的、民衆的の副食物として最も恰好の鄕土産物である。



古城壁を構へた義縣

京奉線道から分岐した錦朝線の中間の一驛で相當活氣ある商業地として知られて居る義縣は、昔時は遼東へ通ふ重要なる交通地點であつた。そうして此の一帶は古い城壁が今尙ほ往時の名殘りを留めて居る。

寫眞は義縣城内の蒙古口である蒙古方面から來る幌馬車が此の古びた城壁の下を黃塵に塗れて過ぎ行く光景は、如實に土地の氣分を表はして居るやうに思はれる。



錦縣の市街

遼西に於ける穀物毛皮の最大市場として知らるゝ錦縣は、京奉線即ち北平より奉天に通ずる北寧鐵道の主要地で、朝陽支線へも鼓で乗換へる。市街は周圍十支里、船形を成せる城壁が繞らされて居るので爲船行城の名がある。當地は唐時代から知られて居る古城で、明時代には廣寧右衛の地として、又清朝になつてからは關外の重要地として遼西に於ける政治的中心地であつた。

古門に彩られた市街

錦縣は現時遼西の大市場であるが、當地は幽州時代からの都城で、古來蒙古貿易の關間であつたのである。

所掲の寫眞は、ハンゴーメンと稱する古い門であつて、高麗時代の遺跡で、今は當市中の東關街の中央に保存されてある。

又城内には廣濟寺（一名大佛寺）と云ふ古刹が在る。寺前の白塔は八角十三層、高さ約三百九十尺、臺座には六面佛が彫刻されてある。遼の道宗年間の建立に係るもので滿洲に於ける大塔である。

尙當地には此外、觀音閣、藥師廟、三官廟、城隍廟、火神廟等がある。

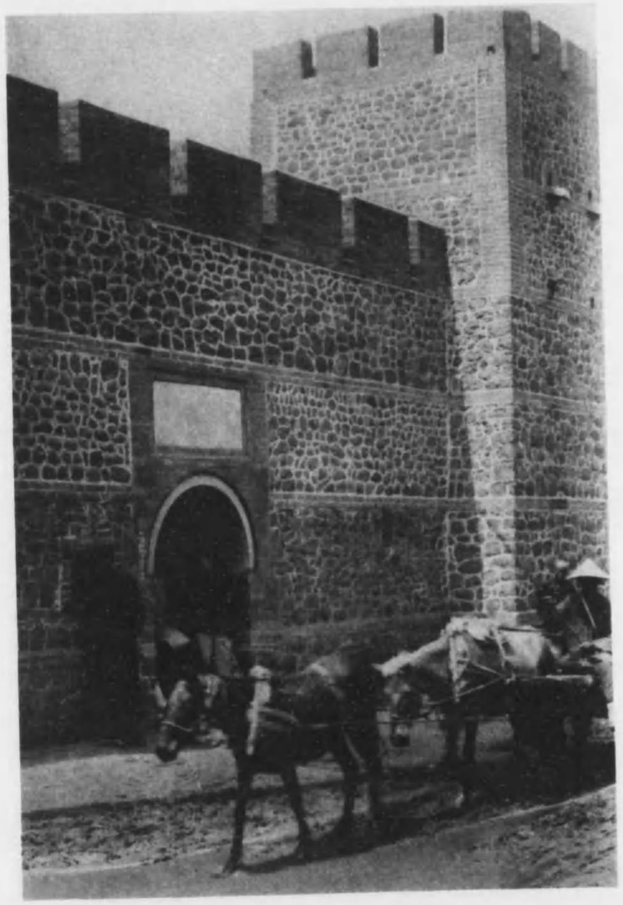
奇景に富む醫巫閭山

古來幽州の北鎭と稱せられて居る醫巫閭山は遼西に蟠蜿する名山である。地理學者の說によると、松嶺山脈が京奉鐵道に沿ふて山海關附近まで延長し、その北端は古來傳說多き醫巫閭山嶺であるが、前者とは大遼河を以て隔てられて居る、と言はれてゐる。支那十二名山の一つと稱せらるゝ名高い山で、傳ふるところに據ると、其高さは十餘里、周圍は二百四十里に達すとの事である。山中頗る奇峰怪石に富み、山容又高秀を極め、怪觀奇景人の膽を奪ふの概がある

醫巫閭山の傳說

傳說によると醫巫閭山は往時契丹の耶律突欲なるもの、其の山容の奇觀怪觀を愛して萬卷の書を此の山中に藏し、絕頂に一堂を築きて、之を望海と命名した、蓋し此の山嶺より渤海を眺め得るに由るものである、耶律沒するに及んで、其遺骸を當山に葬り、山下に北鎭廟を造營したと言はれて居る。

此山には古來寺觀廟閣の觀るべきものも相當あつたと言はれて居るが、近來遼西馬賊が鼓を巢窟とするやうになつて、多くは廢墟に歸したとの事である。



新立屯の質屋

新立屯は山通支線、即ち打通線の一驛であつて、蒙古に通ずる邊牆の要路に當つて居る。從つて此地は蒙古貿易が盛んに行はれ毎月開市の日には、農產物の取引が極めて多い。

寫眞は新立屯の當舖である。當舖は所謂質屋のことであるが、此の當舖は其の構造は物々しく銃眼を刻んであつて城砦造りの石疊み嚴めしく武裝的に造られてあるのは、此地の特色として目立つものである。是れは遼西の馬賊侵入に備ふる爲めの用意であると言はれて居る。で其店舖の通用門は平日でも嚴重に閉鎖し質入れせんとする客は傍らの小窓から僅に取引されるのである。

旅稼ぎの猿舞し

旅藝人としての猿舞はしは何處の果にも其の存在を見掛けるものである。寫眞は新立屯地方に見かける猿舞はしである。彼等は遼西から東蒙古の漢人部落を渡り歩く一種の旅藝人で、其の連れたる一匹の猿が唯一の生活資源で、それこそ生命線として此の猿を保護して生活を共にして居る。猿に演じさせる演藝用の玩具、その他一切の財產を其肩にした木箱の裡に收めて蒙古人の顧客の軒を廻り歩くのである。

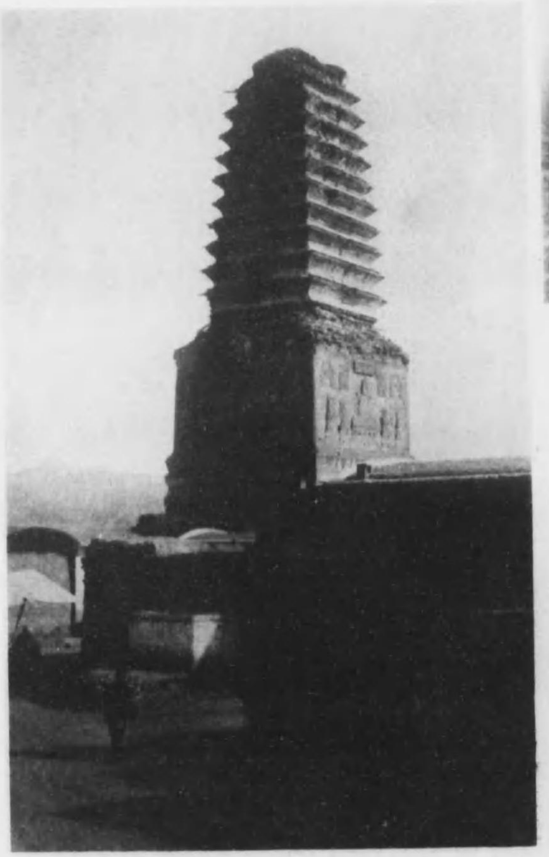
双塔山

熱河附近に所在する双塔山は、其の景趣も同地附近に於ける月並的のものと聊か趣を異にし、何となく瓢逸で神話的な面影があり、その巓頭には年代も分らぬ古い小さい古廟が祭られてある。

朝陽の三座塔

朝陽は熱河省に於ける古い土地で、晋時代には慕容皝が此地に都を置いた事がある、所謂龍城がそれである。唐代には營州柳條郡、遼、金時代には興中府と稱した、有名な三座塔はこの時代に於て築造されたものである。朝陽は元蒙古の所領であるが、古くから漢人が移住して居つたので、市街の結構は喇嘛廟を除いては蒙古風がない。

寫眞は朝陽の名高い三座塔の一つである。



熱河附近の駄騾

山地帶の熱河では、人と言はず、物と言はず、運搬するには車よりは馬背を利用するが最も便利とされて居る。寫眞は熱河附近に見かける駄騾である。土地相當に考案されたもので、又興味を唆らしめるのである。